

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2011

2013年2月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



## 序

岡山大学構内には、津島キャンパス・鹿田キャンパスともに近代化遺産が残っています。旧日本陸軍の駐屯地関連施設や医科大学の建物などで、その一部は有形登録文化財として指定されています。

2011年度（平成23年度）は、こうした比較的新しい時期を対象にした調査が続きました。鹿田キャンパスの地には、医科大学が設置される以前に、豊かな財力をもつ庄屋宅があったとのこと。同地域は、現在は鹿田町に属しますが、以前は岡町と呼ばれており、周囲よりも土地が高い屋敷地であったことが窺われます。発掘調査は、まさに、その屋敷の庭園部分にあっており、当時の土木技術や造園の手法など、興味深い資料を得ることができました。また、津島キャンパスでは、従来知られていなかった旧陸軍の門や排水路などが次々と姿を現すこととなりました。

これらは、新しい時期ということで、ないがしろにされがちなものですが、考古学的調査によって、記録に残らない情報を得ることができる、そうした好例になるでしょう。

毎年恒例の展示会では、前年度から目指している組織を超えた研究、あるいは異分野との連携をめざした取り組みを進めています。展示あるいはシンポジウムともに、やや専門性が高い内容となったように思いますが、大学ならではの企画として、一般の方にも受け入れられ、むしろ、私たちが叱咤激励されているのかもしれない。

本センターの業務は、多くの方々にささえられています。本年度の活動も、岡山県古代吉備文化財センターや岡山市教育委員会、あるいは学内の方々からも多大なご支援をいただきましたことに対し感謝申し上げます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事・事務局長）

門 岡 裕 一

副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）

新 納 泉

# 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011

## 目 次

### 第1章 津島岡大遺跡の調査研究

- 第1節 試掘・確認調査の概要……………(南健太郎) 1
  - 1. 文・法・経フェンス改修工事に伴う調査…………… 1
- 第2節 立会調査の概要…………… 9
  - 1. 調査の実施状況……………(岩崎志保) 9
  - 2. 教育学部講義棟トイレ改修屋外排水工事……………(光本 順) 9
  - 3. 津島線配水管敷設工事……………(光本) 11
- 第3節 津島岡大遺跡の研究…………… 17
  - 1. 旧陸軍関連施設の空間構造について－岡山大学津島キャンパスの調査成果から－……………(南) 17
  - 2. 津島岡大遺跡から出土した不明圧痕土器の付着炭化物の分析……………(工藤雄一郎) 22

### 第2章 鹿田遺跡の調査研究

- 第1節 発掘調査の概要……………(岩崎) 26
  - 1. 鹿田遺跡第22次調査地点…………… 26
- 第2節 立会調査の概要……………(岩崎) 31
  - 1. 調査の実施状況…………… 31
  - 2. 立体駐車場新営に伴う配管移設工事…………… 31

### 第3章 調査資料の整理・研究および公開・活用

- 第1節 調査資料の整理・研究……………(山本祝世) 41
  - 1. 調査資料の整理…………… 41
  - 2. 調査資料の保存処理…………… 41
- 第2節 調査成果の公開・活用…………… 41
  - 1. 公開・開示……………(野崎貴博) 41
  - 2. 資料・施設等の利活用……………(山本) 44
- 第3節 調査研究員の個別研究活動……………(山本) 46
  - 1. 外部資金の獲得状況…………… 46
  - 2. 論文・資料報告ほか…………… 46
  - 3. 研究発表・講演ほか…………… 46
  - 4. 資料収集・調査…………… 47

### 第4章 2011年度における調査・研究のまとめ……………(山本) 48

## 付編 1 シンポジウム

### 『水稻農耕のはじまりを考える－岡山平野の水田研究－』の発表記録

1. 弥生農村の世界－津島遺跡－……………(金田善敬) 49
2. 最古の水田? 津島江道遺跡……………(扇崎 由) 52
3. 移りゆく景観と謎の黒色土－津島岡大遺跡－……………(光本 順) 54
4. 百間川遺跡群の弥生前期水田……………(亀山行雄) 58

## 付編 2

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程…………… 63
2. 2011年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織…………… 65
3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項…………… 65

## 挿 図 目 次

図1 調査地点の位置…………… 1	図21 津島岡大遺跡から出土した不明瓦痕土 器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体 比とC/N比…………… 24
図2 土塁と水路の位置関係模式図…………… 1	図22 調査地点位置図…………… 27
図3 コーナー部における水路と土塁…………… 2	図23 調査区と土層断面の位置…………… 27
図4 水路端部の構造…………… 3	図24 土層断面柱状図…………… 28
図5 土塁と水路…………… 4	図25 検出遺構全体図…………… 29
図6 門1…………… 5	図26 弥生時代溝の遺物出土状況…………… 29
図7 門1上部で出土した門柱の部材…………… 6	図27 庭園遺構1の石積み検出状況…………… 30
図8 門2…………… 7	図28 庭園遺構2の石積み・胴木検出状況…………… 30
図9 煉瓦建物2…………… 8	図29 調査地点と土層断面位置図…………… 31
図10 調査地点と土層断面位置…………… 9	図30 土層断面柱状図…………… 31
図11 調査区土層断面…………… 10	図31 検出遺構配置図…………… 32
図12 調査地点の位置…………… 11	図32 溝1～4…………… 33
図13 土層断面…………… 12	図33 溝5・出土遺物…………… 33
図14 2011年度津島地区調査地点…………… 15～16	図34 溝6～10・溝9出土遺物…………… 34
図15 駐屯地における施設配置と施設…………… 17	図35 土坑1・出土遺物…………… 35
図16 工兵第十聯隊将校集会所と庭園…………… 18	図36 土坑2・出土遺物…………… 35
図17 昭和14年の地図に記載された門2…………… 20	図37 土坑3・5・7・9～12・14…………… 36
図18 北キャンパス南西角における旧陸軍 連施設の変遷…………… 21	図38 土坑4・6・8・13・15・16…………… 37
図19 津島岡大遺跡から出土した不明瓦痕土 器…………… 22	図39 土坑群(土坑5～13)と畦畔…………… 38
図20 津島岡大遺跡から出土した不明瓦痕土 器の付着炭化物の較正年代と縄文時代 後期の各土器型式の較正年代との比較…………… 23	図40 2011年度鹿田地区調査地点…………… 40
	図41 体験コーナー…………… 42
	図42 コウゴク・カフェコーナー…………… 43

付編

図43	黒色土の分類	50
図44	武道館当初建設予定地遺構図	50
図45	イネのプラント・オパール分析	51
図46	津島遺跡弥生前期稲作マップ	52
図47	調査位置図	52
図48	たわみ部の土層	53
図49	G層水田平面図・土層図	53
図50	あぜの土層	53
図51	出土土器	54
図52	黒色土の時期（第3次調査）	56
図53	百間川沢田遺跡と百間川原尾鳥遺跡の 前期水田	59
図54	黒色土層の広がり	59

図55	百間川原尾鳥遺跡の稲株痕跡とその 成因	60
図56	岡山大学の位置と周辺の遺跡分布	79
図57	津島地区全体図	79
図58	2010年度以前の調査地点【1】 -津島地区-	81~82
図59	2010年度以前の調査地点【2】 -鹿田地区-	83
図60	2010年度以前の調査地点【3】 -三朝地区-	84
図61	2010年度以前の調査地点【4】 -東山地区-	84
図62	2010年度以前の調査地点【5】 -倉敷地区-	84

表 目 次

表1	2011年度津島地区調査一覧	13
表2	北キャンパス西半に駐屯した部隊の 変遷	19
表3	津島岡大遺跡から出土した不明瓦痕 土器付着炭化物の分析結果	23
表4	近世土坑一覧	38
表5	2011年度鹿田地区調査一覧	39
表6	PEG保存処理工程表	41
表7	2011年度非常勤講師の委嘱依頼	44
付編		
表8	調査地点別イネのプラント・オパール 密度	55

表9	津島岡大遺跡の黒色土上面の水田畦畔 一覧	56
表10	津島岡大遺跡における景観の変化と水 稲農耕の展開	57
表11	1982年度以前の構内主要調査 (1980~1982年度)	67
表12	2010年度以前の構内主要調査 (1983~2010年度)	67
表13	埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物 概要(2012年3月現在)	75
表14	埋蔵文化財調査室刊行物	77
表15	埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2012年3月まで)	77

## 例言

1. 本記要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学構内において2011年4月1日から2012年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2. 本記要において報告している津島岡大遺跡は岡山市北区津島中一丁目～三丁目1-1、鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町二丁目5-1に所在する。
3. 執筆者は、目次に記載すると共に、原則として、本センター教員の場合は文末に、本センター以外の場合は文頭に記した。
4. 編集は新納泉副センター長の指導のもと、山本が担当した。

## 凡例

1. 岡山大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、2002（平成14）年4月1日から施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている。
  - 1) 津島地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北を基軸とし、 $(X, Y) = (-144,156,4617\text{m}, -37,246,7496\text{m})$ を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いている。
  - 2) 鹿田地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北より東に15°振り出した座標軸を基軸とし、 $(X, Y) = (-149,456,378\text{m}, -37,646,7700\text{m})$ を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺5mの方格による地区別りを用いている。
  - 3) 構内で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、その他は磁北を用いている。
2. 岡山大学敷地内で調査地点を示す場合、周知の遺跡にあたる場合はその遺跡名を、それ以外の場合は、地区名を付して示す。
3. 調査名称は、「発掘調査」に分類したものは、遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものは、原則、原因となった工事名を使用している。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。
4. 付録2に記載した既往の調査一覧は、掘削深度が中世層以下に達するかあるいは遺構などが確認された調査のみを掲載している。未掲載も含め、すべてのデータは、当センターにおいて保管している。
5. 本文などで使用している調査番号は表1並びに表5と一致する。
6. 本記要に掲載の地形図（図57）は、岡山市城図を複写したものである。





# 第1章 津島岡大遺跡の調査研究

## 第1節 試掘・確認調査の概要

### 1. 文・法・経フェンス改修工事に伴う調査（調査番号1・25、津島AW～AZI7区、AZ・BA16区）

#### a. 調査の経緯と経過

津島北キャンパス（以下、北キャンパス）の西側敷地境界（以下、境界）にフェンスを敷設する計画がなされた（図1）。岡山大学津島キャンパスは旧陸軍第十七師団駐屯地の跡地に立地しており、予定地にはそれに関係する土塁と水路が残っている。当工事では掘削によりこのような旧陸軍関連施設が失われることとなった。

こうした戦争遺跡を埋蔵文化財として扱うかどうかについては今後議論を深めていく必要があるが、当センターでは戦前から戦後における日本の近代化を考えるにあたって旧陸軍関連施設は重要な歴史資料であると判断した。土塁と水路はこれまでの測量調査で部分的に確認されているが、大学施設建築のための整地などによって埋没していると考えられる部分も多い。このため本工事に伴い記録保存を行うことは旧陸軍駐留時代の景観や施設配置を復元するために欠かすことができない。このような理由から試掘調査と工事の際の立会調査を行った。

これまで、当センターでは、北キャンパス南西角に存在した旧陸軍兵第十聯隊の将校集会所や庭園そして土塁<sup>1)</sup>、当予定地周辺の同隊橋梁演習施設<sup>2)</sup>、理学部南側通用門<sup>3)</sup>、教育学部南東側通用門<sup>4)</sup>といった旧陸軍関連施設の現状把握と、取り壊される際の記録保存を実施した。

当予定地における試掘調査は2011年11月21日・22日、2012年3月13日～15日の2回に分けて行った。また立会調査は2012年2月27日～3月29日までの間で断続的に実施した。試掘調査と立会調査は調査範囲が重複する部分があり、確認された遺構の中には両調査で同一のものもある。このため試掘と立会の調査成果をあわせて報告したほうが、遺構の全体像をより明確にすることができる。このような理由からここでは試掘調査と立会調査の成果を合わせて報告する。なお本報告では1回目の試掘を試掘1次、2回目を試掘2次とする。また立会調査もフェンス敷設と外灯設置のものがあるため、前者を立会（フェンス）、後者を立会（外灯）とする。

#### b. 調査の概要

今回の調査では土塁と水路、門（2カ所）、煉瓦建物（2カ所）が確認された。特に門と煉瓦建物は地上に露出していないため、本調査によって初めて確認された。

これらのうち土塁と水路の関係についてあらかじめ説明を加えておきたい。水路は石材を直線状に2列並行に並べることで構成されている。土塁は水路を構成する石列のうち外側の石列を覆うように盛られている（図2）。本報告では水路のうち敷地境界側を外側石列、反対側を内側石列とす



図1 調査地点の位置  
(縮尺1/4,000)

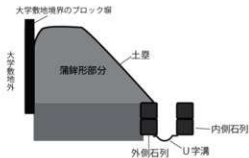


図2 土塁と水路の位置関係模式図

る。土塁と水路は構築段階から構造が一体であることから、両者をまとめて報告する。

①土塁と水路

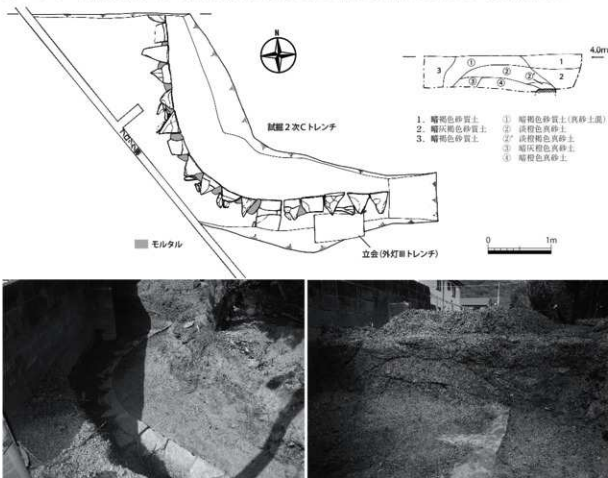
試掘1次1～4・6トレンチ、試掘2次の全トレンチ、立会（フェンス）、立会（外灯）で確認された。

【平面形態】

現状では土塁が盛土状に確認されない部分が広域にあったが、その部分にも土塁が残存していることが今回の試掘調査で確認された（試掘1次2・3トレンチ、試掘2次A～Eトレンチ）。

土塁と水路は境界と同様に直線的に配されている。しかし立会（フェンス）Cトレンチを設定したコーナー部分（図1）については、境界は角を2ヶ所設けて屈曲しているのに対して、水路の外側石材はまったく角を作らないように並べられており、非常に滑らかなカーブが描かれている（図3）。

また、立会（フェンス）では北キャンパス南西角から北へと続く水路の北端が確認された（図4）。本地点は掘削前の段階では地中に埋もれていた。このため水路は途切れることなく土塁と共に敷地境界を全周すると考えられていたが、今回、水路が途切れることを確認したことは大きな成果といえる。水路の端部は他の箇所とは異なり、上面の幅約10cm、長さ40～60cmのコンクリートを、両側それぞれに3個ずつをつなぎ合わせて構築されている。同部分は、石列が直線的であるのに対し、軸が東側へ傾いており、石列部分よりも10～15cm低い。さらに北端には水路に取りつく土管が確認された。土管とコンクリートの接合部分はモルタルで埋められ、土管の上面はコンクリート部分先端よりさらに約5cm下にあるため、この部分は地中に埋められていたと思われる。



水路のコーナー部分（試掘2次Cトレンチ）（南西から）

試掘2次Cトレンチ 土塁断面（南から）

図3 コーナー部における水路と土塁（縮尺1/60）

ここで問題となるのは石列で構成される水路と北端のコンクリート部分が同時期に作られたのかという点である。軸の傾きや上面のレベルに差があることから、時期差があると考えられる。この点については本書第1章第3節で検討する。

#### 【構築過程】

土塁および水路の構築過程は各トレンチで概ね共通している。土塁と外側石列の構築は一体となって行われている。両者の関係を試掘1次2トレンチ(図5-2)で見ると、まず明治時代の耕作土の上に不規則に真砂土と粘質土が盛られ(図5-2-⑥~⑧層)、一度上面(同⑥層)が平坦に整えられている。その後、同面から掘り込みがなされ、外側石列最下段石材が据えられている。そしてその上部に2・3段目の石材が積み上げられるが、各石材の間は小型の礫を用いて裏込めがなされている。土塁は外側石列最上段上面まで平坦になるように盛土(同③層)が行われる。そしてこの上に地上に露出する部分(以下、蒲鉾形部分とする)が盛られるのだが、蒲鉾形部分の端部は外側石列の水路構成面をわずかに露出させるように盛られている(図5-3-①②層)。外側石列最上段石材の多くは、このような露出を意識して上面が平坦な石材を用いるか水路構成面側の幅約10cmを平坦にするという工夫が見られる。

蒲鉾形の盛土形成状況は、各トレンチで若干異なっており、以下の3つに分類することができる。

A類：盛土は単一層で形成される(試掘1次2トレンチ)。

B類：盛土は複数回の水平堆積によって形成される(試掘1次6トレンチ、試掘2次A・B・Cトレンチ)。

C類：盛土は複数回の堆積で形成されるが、敷地境界側から内側に向かって傾斜するような堆積である点がB類とは異なる(試掘1次1・3トレンチ)。

また、B類には蒲鉾形部分端部(外側石列と接する部分)のみを真砂土混じりの暗褐色土で構成する部分も見られる(試掘2次B・Cトレンチ)。このような土盛り方法は水路構成石材の端部を平坦に加工することとあわせて、土塁の構築において外側石列の端部を露出させるための工夫であったと考えられる。

#### 【水路の構造】

水路の幅は概ね約30cmだが、北キャンパス南西角から北へ延びる部分のみは幅が40cmになる。水路部分には外側・内側石列ともに2段の石積みの下にコンクリート製のU字溝が設置されていた。U字溝は上面に平坦面があり、外側石列2段目下端がU字溝の落ち際の角ときれいに接する(図5-2・3)。一方、反対側は内側石列2段目下端とは合致せず、平坦面が張り出すようになっている。これに対し立会(フェンス)で確認されたコンクリート部分は底が平坦になっており、石材で構築された水路とは異なっている。また水路最上段石材には各トレンチで異なる様相が見られた。水路最上段石材のレベルは最も北側の試掘1次1トレンチ(標高約4.5m)から試掘1次3トレンチ(約2.9m)までは南に行くに従って徐々に下がっていき、標高差は約1.6mにも及ぶ。しかしその南側の試掘2次A・Bトレンチでは標高約3.8~3.9mに上昇している。また試掘2次Cトレンチコーナー部分

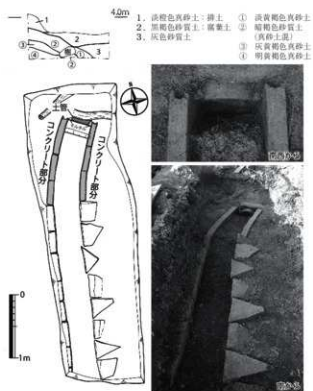


図4 水路端部の構造(縮尺1/60)

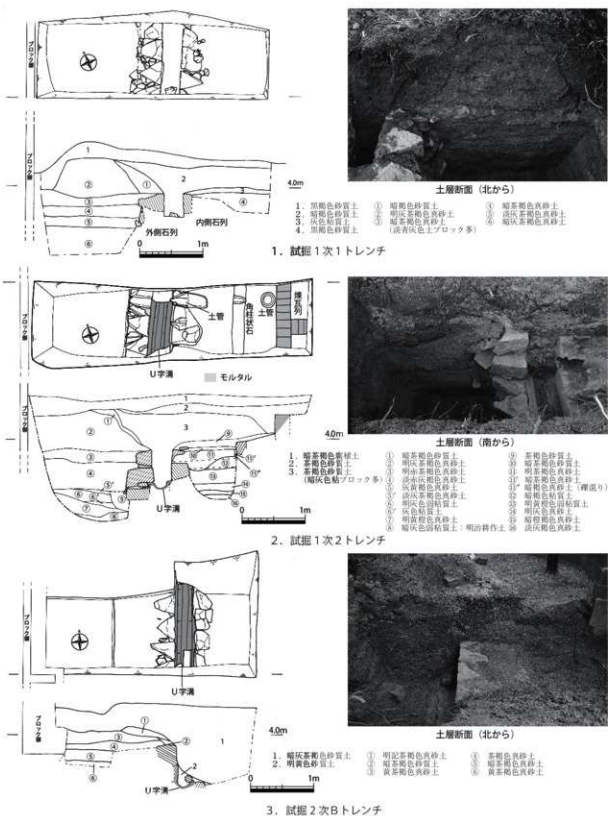


図5 土壁と水路 (縮尺1/60)

(標高約3.9m)からDトレンチ(標高約3.5m)にかけては東へと徐々にレベルを下げていくが、Eトレンチでは標高約3.8mに上昇している。水路を通る水の流れを考えると最も標高が低い位置に敷地外へと排水する何らかの構築物が存在する可能性が考えられる。

## ②門

門は2ヶ所で確認された(図1)。南側の門を門1、北側の門を門2とする。

**門1(図6)：**北キャンパス南西角から北へ約18mのところ確認された。当初、この部分は土塁の蒲鉾形部分と水路が完全な状態で残存していたが、土塁の掘削中に門柱の傘の部分や土塁と門柱が接する位置に土留めに用いられる角柱状石が出土し(図7)、下部に門が存在することが予想された。

門は南北幅1.8m、東西幅2.2mの範囲で確認された。このうち西側の東西幅0.7mの範囲が玉砂利敷きで、東側の東西幅1.4mの範囲には板状のモルタルが敷き詰められている。板状のモルタルには三角形や台形、五角形の

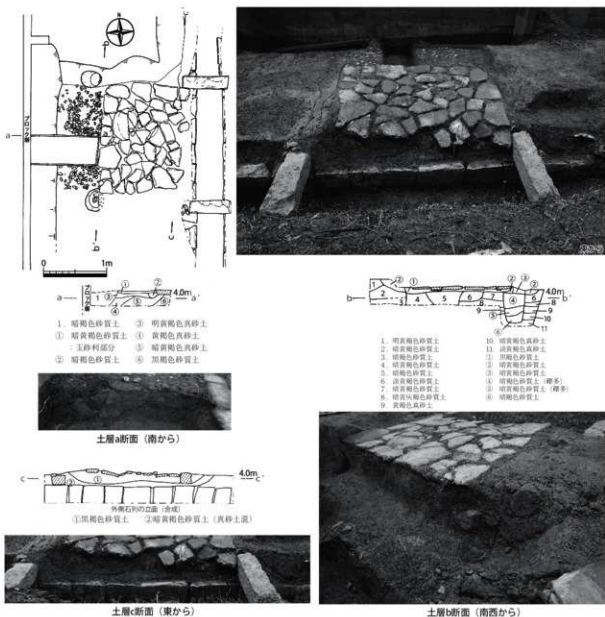


図6 門1(縮尺1/60)



図7 門1上部で出土した門柱の部材

ものがあり、大きさも不揃いである。モルタル敷きの北辺は水路に掛かる角柱状石の南西角とほぼ接する位置にあり、石柱に挟まれる空間に意識的にモルタルが敷かれたものと思われる。また玉砂利部分からモルタル部分の中間までは標高4.15mで高さが揃えられているが、これより東側は水路の方向にいっにつれて標高が徐々に下がっていく。モルタル敷きの東端部は水路の外側石列の上に重なるような構造になっている。水路に掛かる二本の角柱状石に板などを渡して外側から進入する通路としての機能を有していたものと思われる。

これに加えて玉砂利敷きとモルタル敷きの境では南北2ヵ所の柱穴が検出された。柱穴は柱の抜き取りの際に大きく形状を変えているようである。柱穴の底面は両柱穴とも標高3.4～3.5mで、柱は直径0.15～0.2mほどの細いものであったと思われる。土塁掘削時に出土した門柱の傘には中央に直径0.15m程の窪みがあり、ここに立てられた柱が門柱の軸となっていた可能性がある。

また、門を構築するための掘り方は二重に確認された。このため玉砂利・モルタル敷きの門の前段階にこの場所には既に掘り込みによる門が置かれていたと考えられる。以下前者を新段階、後者を古段階とする。古段階掘り方と新段階掘り方との間は真砂土を含む暗黄褐色砂質土で埋められている。このことから門1の構築過程を考えると、古段階の廃絶後この場所はいったん整地され、新たに新段階掘り方が掘削され玉砂利やモルタルが敷かれたものと考えられる。古段階の掘り方下面の標高は4m前後で水路よりもやや高い位置にあるため、同段階もやはり東側に向かって標高が下がっていく構造であったと思われる。

新段階の使用面である玉砂利敷きの部分と北側の柱穴で鉄釘が計4点出土した。また、掘削中に出土した門の傘の形態や土留めに用いられる角柱状石から、門の構造は現存する旧陸軍第17師団山砲兵第二大隊表門と同様であったと思われる。しかし、当位置の土塁は同門などでみられるような「ハ」の字状のプランにはなっていない。この点については本書第1章第3節で検討する。

**門2 (図8)** 北キャンパス南西角から北へ45mの位置で南端が確認された。構造は門1とは異なり石列が「ハ」の字状を呈しており、中央には約3mの空間が設けられている。平面プランが現存する門と同様であることから、当遺構も門であると判断した。ここでは北側に並べられた石列を北側石列、南側のものを南側石列とする。

南北両石列には、それぞれ6個の石の並びが確認された。中央の空間部分と接する北側石列南端には東西方向の掘り込みがあり、底には鉄管が据えられていた。鉄管の上端では小形の礫が多く出土した。このことはこの部分に存在した北側石列先端部を取り壊し、北側石列の裏込めの礫とともに埋め戻したことを示している。また南側石列の先端でも石の抜き取り穴が確認された。このことから本来の南北石列はそれぞれ7個以上の石材で構築されていたが、鉄管敷設に伴い北側石列南端が破壊され、南北の石材の数をそろえるために南側石列の先端も石材が一つ抜き取られたものと考えられる。

石列上面は標高3.85m～3.94mで、ほぼ平坦である。石材は三角形、四角形、台形があり、これまでに確認された土塁に伴う水路と同様の形状・サイズである。1次試掘4トレンチ部分では北側石列の西側に玉砂利を密に含む層が確認されており(図8 a-a' 断面③層)。本来は門1と同じように石列の西側には全体的に玉砂利が敷かれていたと思われる。石列の上端では真砂土の盛土が確認されており、最終段階ではこの門は土塁に覆われた状態であったと考えられる。門の幅は門1よりも広く、平坦な構造をしている。試掘1次4トレンチではこの部分には水路が確認されておらず、門1のように水路をまたぐための構築物は必要ない。標高も門1より20～30cm低いということから、門1とは異なる用途で設けられたものである可能性が高い。

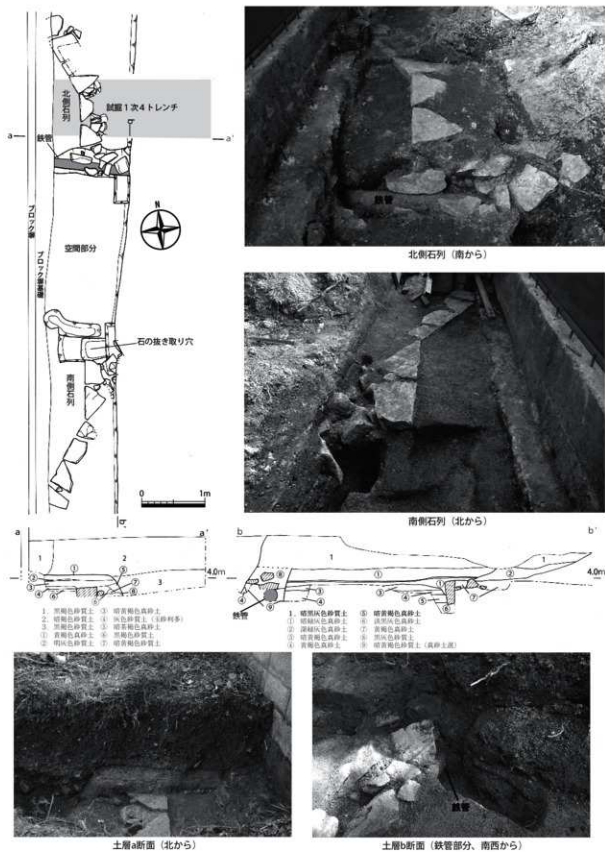


図8 門2 (縮尺1/60)

## ③煉瓦建物

本調査では煉瓦建物が2ヵ所で確認された(図5-2・図9)。試掘1次2トレンチで確認されたものを煉瓦建物1、立会(外灯)4トレンチで確認されたものを煉瓦建物2とする。

**煉瓦建物1(図5-2)：**煉瓦列は南北方向に走り、それにとりつく形で直交する東への列が確認された。4段の煉瓦積みが残存し、南北方向の煉瓦列の西側にコンクリートの土間が構築されている。土間の西側端部には径15cmの角柱状石が据えられ、建物の西側の境を明瞭にしている。この石は内側石列の最上段で平坦に描えられた面から掘り込まれて設置され、底面には小石が敷かれていた。土間には、上方に開口した土管があり、これが西側に位置する暗渠を通じて内側石列に向かい土間の下を走る。建物から水路へ排水されたことがわかる。

構築過程としては内側石列最上段の下に土管が存在するため、土管を伴う暗渠と土塁・水路は同時に作られたと判断できる。そして内側石列上面まで整地した後に土間と煉瓦建物が構築されている。また内側石列と角柱状石の間には2段の平坦面が確認されるが、同石設置のための掘り込み面の上層では、内側石列全体は覆われていない。このことから内側石列も外側石列と同様に端部を露出させた状態で使用されていたと考えられる。

**煉瓦建物2(図9)：**門2の東側で南北方向に確認された。最下段にあたる1段目とその上の2段目は煉瓦の2段積み、3段目は角柱状石で構成される。煉瓦の接合部はモルタルが用いられ、特に2段目と3段目の間は西

側からみると接合部がわからないほど隙間なく塗られている。

1段目上面の標高は3.43m、2段目は3.6m、3段目は3.86~3.87mである。1段目と2段目の上面から西側には徐々に下がっていく面が形成されている。特に2段目は暗灰色粘質土が西側へ続き、モルタルの塊へと連なっており、同段階での使用期間が想定される。その上には真砂土が標高3.8m付近で平坦に堆積しており、1段目の角柱状石が0.1mほど上にとびだす状態となる。この面は西側の門2の標高と大差ないため、同門が機能していた期間は角柱状石がステップ状に露出した状態であったと思われる。

角柱状石には帯状の突起部分があり、何らかの装飾、もしくは境界線を示す役割があった可能性がある。これより上には円礫や煉瓦の破片、炭化物を多く含む暗灰色土砂質土が堆積しており、1段目は完全に覆われている。さらにこの上には土塁の溜針形部分にみられた黒褐色粘質土ブロックを含む真砂土が堆積している。このことから煉瓦建物2は最終的には門2とともに土塁で覆われたものと思われる。



図9 煉瓦建物2(縮尺1/60)

## c. まとめ

本調査では土塁と水路の構築過程を復元することができた。また敷地内の建物と水路の関係や門の配置と構造についても重要なデータが得られた。これまでの調査では土塁と水路の現状把握が行われてきたが、今回の調査によって旧陸軍関連施設の構築方法を考古学的調査で明らかにすることができた意味は大きい。

特に現状では土塁の溜針形部分が地表に見えていなかった部分で土塁を確認し、これまでに公表されている地図に記載がない門や建物を検出できたことは、旧陸軍時代の景観や空間構造の変遷を考えるための大きな成果と



いえよう。

今後も現存する津島キャンパスの旧陸軍関連施設に注意を払っていく必要がある。

(南健太郎)

#### 註

- 1) 野崎貴博・小林育樹1999「岡山大学構内における陸軍関連施設の調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』15 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 中村大介2007「1. 旧陸軍工兵第十聯隊橋梁演習施設の測量調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要』2005 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3) 野崎貴博2008「1. 旧陸軍第十七師団駐屯地外周土塁の測量調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要』2006 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 4) 野崎貴博2008「2. 旧陸軍第十七師団山砲兵第二大隊表門と土塁の測量調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要』2006 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 第2節 立会調査の概要

### 1. 調査の実施状況

2011年度の立会調査として、津島地区では15事業28件を実施した。工事内容は、文法経総合研究棟の耐震改修工事に伴うものと、フェンスブロック塀や教育学部トイレの改修など、環境整備に伴うものが大半を占める。

工事掘削によって中世層以下の包含層および特徴的な土層を確認した調査は3件であるが、フェンスブロック塀の改修に伴う立会調査は、試掘調査とともに前項に既述しており、以下には2件の報告を行う。(岩崎志保)

### 2. 教育学部講義棟トイレ改修屋外排水工事 (調査番号12、AZ04区)

#### a. 調査地点の位置と経過

教育学部講義棟のトイレ改修に際して、屋外排水工事ならびに機械設備工事が実施された。そのうち、弥生時代早期・前期の黒色土や近世・近代と考えられる土坑・溝を検出した。屋外排水工事に伴う立会調査の成果について報告する。

屋外排水工事地点は、教育学部講義棟の北側に位置する(図10)。工事計画では、橋において1.08~1.26m、管路部分で0.80~0.97mの掘削が予定された。本調査地点の西側では公共下水道接続に伴う立会調査が2006年度に実施され、現地表から浅い1.2~1.3m(標高3.3~3.4m)から弥生時代早・前期の黒色土が検出されていた<sup>1)</sup>。したがって、本調査地点においても同様の土層が検出される可能性が想定された。

調査は2011年9月21・28・29日の3日間で実施した。なお当初の工事計画では、橋1~3とその管路の掘削が予定されていたが、掘削過程において既設生活排水管に損傷があることが判明し、橋3の北東に隣接して橋4が掘削され

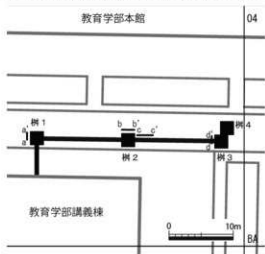


図10 調査地点と土層断面位置 (縮尺1/600)

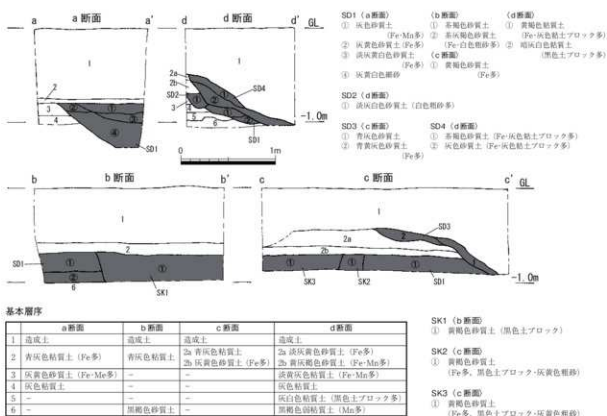


図11 調査区土層断面 (縮尺1/40)

ることとなった。

## b. 調査成果

本調査地点では、橋部分において黒色土を確認したほか、近世土坑3基、近世・近代溝5条、古代～中世の畦畔を検出した。

### (1) 層序

基本層序については掘削箇所全体で統一を行い、6層からなる(図11)。1層は造成土である。2層は近代耕作土と考えられる層で、拵1・2(a・b断面)では青灰色粘質土となり、それより東半(c・d断面)では細分して認識した。3層はa・d断面で確認したもので、灰黄色ないしは淡灰黄色砂質土で鉄分・マンガンが多く含まれる。近世層と考えられる。4層は灰色粘質土で、中世層と考えられる。5層は白色粘質土であり、拵3(d断面)で確認した。土質から古代～中世の耕作土と考えられる。6層は黒褐色を呈する砂質土または弱粘質土で、弥生時代早期～前期の「黒色土」に相当する。拵1～4において確認した。

### (2) 遺構

土坑(b・c断面)：3基を確認した。いずれの土坑からも遺物は認められない。

土坑1は拵2(b断面)に位置する。検出面は2層下面である。隅丸長方形と考えられる平面形の土坑の南西部がみつかった。埋土は黄褐色砂質土で、6層に由来する黒色土をブロック状に含む。

土坑2・3は拵2-3間管路(断面c)で確認した。いずれも検出面は2層下面で溝1上面となる。土坑2が管路南半部に位置し、その北側に土坑3が作られている。検出範囲が限られているが土坑2・3が連なる方向は北西～南東方向と考えられる。土坑2はいびつな長方形を呈し、長軸が北西～南東方向となる。北端が土坑3によって切られる。埋土は黄褐色砂質土で、6層の黒色土ブロックおよび灰黄色粗砂を多く含む。土坑3について

は、平面が長方形で、長軸が北西-南東方向となる。土坑の南東端に相当するものと考えられ、土坑2を切って作られたものである。埋土は土坑2と類似し、黄褐色砂質土で、黒色土ブロックおよび灰黄色粗砂を多く含む。

以上の土坑1-3は、検出面から近世のものと推定される。

溝(a～d断面)：4条を確認した。いずれの溝からも遺物は出土しなかった。

溝1は東西方向にのびるもので、3層上面で検出した。溝の幅は、南半部を検出したa断面で0.91mを測る。西側の方が東側よりも底面レベルが低くなるものと考えられる。深さについては現状において橋1で0.47m以上、橋3で0.43mを測る。埋土は灰黄色ないしは黄褐色の砂質土を基本とする。

溝2は橋3(d断面)で確認したもので、検出面は3層となる。溝1を切る形で作られた小形の溝である。残存幅0.26m、深さ0.16mを測る。橋3壁面の観察から、東西方向にのびるものと考えられる。埋土は淡灰白色砂質土である。

溝3・4はいずれも1層の造成土によって最終的に埋没した溝である。溝3はc断面において北西-南東方向にのびる形でみつかった。溝の幅は検出状況により判然としませんが、深さは0.50m以上となる。造成土以外の埋土は、2層と類似する青灰色ないしは青黄灰色砂質土である。溝4はd断面において確認した。橋3壁面の観察から、東西方向にのびるものと考えられる。幅は1.15m以上、深さは0.55m以上となる。造成土以外の埋土は茶褐色砂質土および灰色砂質土で、いずれも灰色粘土ブロックを多く含む。

これらの溝の時期に関しては、検出面から溝1・2が近世、溝3・4が近代に相当するものと考えられる。

畦畔(d断面)：橋3において6層(黒色土)を削りだして作られた畦畔を確認した。橋3壁面の観察から東西方向にのびるものと考えられる。幅0.24m、高さ0.05mを測る。6層の直上が古代～中世層と推定される5層であることから、本畦畔の時期は古代～中世に相当するものと推定される。

### c. まとめ

本調査地点では、包含層については弥生時代早期・前期の黒色土を確認し、遺構としては近世・近代を中心とする土坑・溝と、古代～中世と考えられる畦畔を検出した。教育学部周辺での既往の立会調査においても地形が高く、黒色土の標高が高い状況が確認されてきたが、本調査地点でもそれを裏付けるデータが得られたものといえる。遺構と条里との関係については、津島キャンパスにおける当該期の条里研究<sup>2)</sup>と対照させると、溝については条里とは合致しないものの、橋2付近で確認した3基の土坑については中世～近代における南北方向条里の里境に位置する点で、その関連性が注目されるものといえる。

(光本 順)

### 註

- 1) 岩崎志保2008「公共下水道接続工事(教育学部)に伴う立会調査」[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006]岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.6-7
- 2) 池田 晋2009「津島岡大道路における古代から近代の条里遺構」[津島岡大道路19]岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.63-72

## 3. 津島線配水管敷設工事(調査番号9、津島北BA08区)

### a. 調査地点の位置と経過

岡山大学津島キャンパスの東西道路において、岡山市による水道工事が実施された。その関連工事、岡山大学津島キャンパスの敷地内においてもなされることとなった。掘削箇所については、東西道路の北側では理学部南側および西門付近(図12)、また東西道路南側では保健管理センター北側にあたる。そのうち、理学部南側(旧

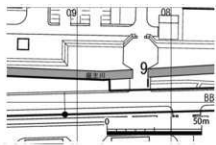


図12 調査地点の位置(縮尺1/200)

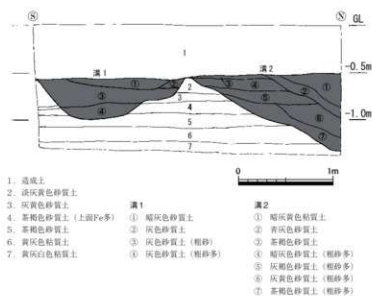


図13 土層断面 (縮尺1/40)

層は茶褐色砂質土であり、4層上面には鉄分が沈着する。近世の砂質層と考える。6層は黄灰色、7層は黄灰白色の粘質土である。色調から中世層の可能性が考えられる。

【遺構】 2条の東西溝を確認した。いずれも2層上面が検出面となるため、溝の埋没時期については近代に属するものと考えられる。

溝1 断面形が不整形な逆台形状を呈する溝である。幅1.58m、深さ0.44mを測る。埋土は4つの層に区分される。灰色砂質土を基本とし、最下層においてもっとも粗砂を多く含む。

溝2 調査区北半で確認したもので、溝の南側斜面から底面の一部にかかる箇所当たる。断面形は逆台形状で、斜面はほぼ直線的であるが、地表下1.0m付近でいくぶん外郭ラインが屈折する形状となる。規模は現状で幅1.65m以上、深さ0.83mを測る。埋土は7つの層に区分した。堆積状況から、埋土は1・2層と3～7層に区分される。1層 (暗灰黄色粘質土)・2層 (青灰色砂質土) は下面ラインが同様に斜めに傾斜するものであり、本溝の機能が停止する前の最終的な流路と考えられる。3～7層は、水平堆積する3～5層と、斜面堆積する6・7層に細分される。4層以下は粗砂を多く含む砂質土で、暗灰色や灰褐色等の色調となる。

本溝は、その規模と位置から、現在調査区北側にほぼ隣接する座主川の前身である可能性が考えられる。したがって本溝の北半に関しては、現在の座主川によって切られる形となるものと考えられる。

### c. まとめ

本調査地点では、現在の座主川の流路の前身と考えられる、近代の東西溝を確認した。現在の座主川は、必ずしも東西に一直線となるものでなく、旧陸軍の門柱の南で、大学の出入り口のひとつにあたる本調査地点付近が、南寄りにいくぶん突出する形となる。こうした座主川の前身が、さらに南に位置する可能性が今回の調査によって浮上したものと見える。

(光本)

陸軍の赤煉瓦造り門柱の南方、座主川(南側)における掘削地点において、近代に属すると思われる溝を確認した。調査期間は2011年10月3日である。以下、当該地点の報告を行う。

### b. 調査成果

理学部南側における掘削は、南北約3.25m、幅約0.5mの範囲で実施した。ここでは西壁において記録した層位の状況について概説する (図13)。

【基本土層】 1層は造成土である。2・3層は淡灰黄色および灰黄色の砂質土である。土質から近代耕作土の一種であるものと推定する。2層上面が東西方向の2条の溝の上面となる。4・5

表1 2011年度津島地区調査一覧

種別	番号	工事名称(細目)	調査期間	構内座標	掘削深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内 容
試験 確認	1	文法経フェンス工事	11.21・22	AW17 AX17 AY17 AZ17	11~20	10~16	トレンナ6※所①~⑥ 近代の上層、水跡
			3.13~15	AZ17	0.8	-	トレンナ5※所A~E 門跡・障子建物基礎
立会	2	東団地水質測定空間汚染水調査	4.06	BE10	0.75	-	既設土内
	3	茶軒障子塀撤去(太陽光発電設備) (仮設掘削)	4.15	AU13	0.83	-	造成土内
	4	工学部7号館給水管工事	5.18	AV10	0.5・0.7	-	既設内
	5	文法経雨水管修理	6.3	AY16	0.85~0.9	-	既設内
	6	津島障子水質調査工事	6.13~17	BA08~13	1.9	-	既設地上
	7		8.30・31, 9.3	BA08B10	0.5~1.4	-	造成土内
	8	津島障子水質調査工事	10.3	BA10	1.3	0.6	中世層まで、近世・近代確認
	9		10.3	BA08	1.5	0.6	中世層まで、近代障子・溝
	10		10.11	BD10	1.1	0.6	近世層
	11	環境管理センターガス漏洩調査	7.5, 7.20	AU06	0.45~0.65	-	既設地上
	12	教育学部講義棟トイレ改修工事 (屋外排水)	9.21・28・29	AZ04	0.9~1.5	0.55	古代・近世・近代遺構
	13	教育学部講義棟トイレ改修工事 (機械設備)	9.26	AZ04	0.7~0.75	0.55	近代確認
	14	文法経総合研究棟改修 (耐震補強)	11.14	AY15	0.9	-	既設調査内
	15	文法経総合研究棟改修 (電気設備)	11.29	AY15	1.75	1.55	5※所近代層、1※所近世層まで
	16	文法経総合研究棟改修 (機械設備)	12.9	AY15	0.6	-	造成土内
	17	文法経総合研究棟改修 (電気設備)	2.28	AY15・16	1.73, 1.81	1.6	近世層
	18	文法経総合研究棟改修 (屋外排水)	3.2	AY16	1.13・1.32	-	既設内
	19	文法経総合研究棟改修 (機械設備)	3.8	AY15・16	1.1	-	既設内
	20	文法経総合研究棟改修 (汚水配管)	3.13	AY15・16	0.57, 0.72	-	既設内
	21	文法経総合研究棟改修 (観音針設置)	3.14	AY15	1.78	1.3	近世層まで
	22	理学部給水管漏水修理	12.21	AZ09	0.7~1.1	-	既設工事内
	23	工学部ガス漏れ	1.5	AU08	1.2	-	既設内
	24	フェンス・ブロック撤改修工事 (チャッカー場敷)	2.6	BA-BE02	0.55	-	造成土内
	25	フェンス・ブロック撤改修工事 (文法経高欄)	2.27~3.29	AW-AZ17- AZ-BA16	0.8~1.5	-	門跡・建物基礎(工兵跡)、列灯:4※ 所(1~5)
	26	理学部地質保存地看板設置工事	2.9	AU08	0.4	-	造成土内
	27	理学部2号館高圧受変電設備改修	2.20・28	AW13	1.2 0.88~0.95	-	既設工事内
	28	教養部ガス管緊急工事	2.29	BA04	0.85	-	既設内
	29	社文研2号館カーブミラー設置	3.15	AZ14	0.6	-	既設内



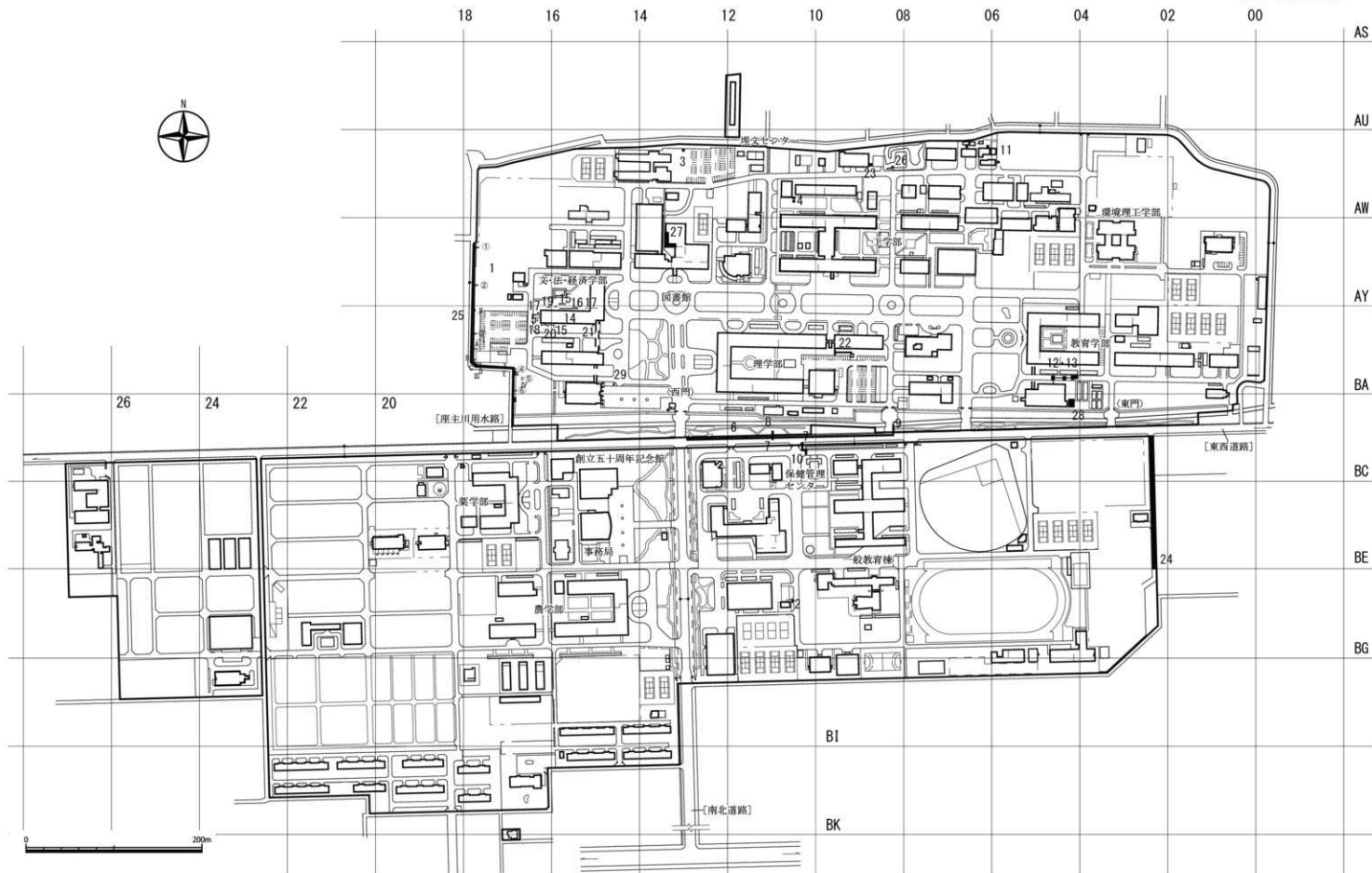


図14 2011年度津島地区調査地点 (縮尺1/4,000)

### 第3節 津島岡大遺跡の研究

#### 1. 旧陸軍関連施設の空間構造について—岡山大学津島キャンパスの調査成果から—

##### はじめに

現在の岡山大学津島キャンパスには1907年に陸軍第十七師団の駐屯地がおかれ、これ以降多くの旧陸軍関連施設が建設された(図15)。現在発掘調査を行うと表土の下には1m以上の駐屯地造成のための分厚い造成土が見られ、津島岡大遺跡第12次調査(附風図書館)で確認されたようなトロッコ軌道の痕跡から、大量の土砂が運ばれたものと思われる。それ以前のキャンパス一帯は耕作地であったことがわかっており、旧陸軍関連施設の建設が周辺の景観を一変させたであろうことは容易に想像することができる。

現在もキャンパス各所では当時の姿を残した旧陸軍関連施設をみることができる。本センターではこれらの記録保存を継続して行ってきた。2011年度にはこれまで土塁がめぐると思われていた場所で門が確認され、新たに煉瓦建物も発見されるなど大きな成果を得ることができた。このような調査成果からは地図などの文献資料に載っていない旧陸軍関連施設の復元が可能となる。これらの新たに見つかった施設は特別な空間であったと評価されている工兵第十聯隊符校集会所(以下、集会所)と庭園があった場所に隣接している。門や煉瓦建物は構築時期などを示す資料がほとんどない。しかし集会所・庭園や旧陸軍の部隊編成との関係を整理していくことで、



図15 駐屯地における施設配置と施設(縮尺1/10,000)



それらのおおよその時期を考えることができる。そしてこれらの施設の変遷から当時の景観や空間構造の変化とその背景をも明らかにしていくことができよう。

このため本論ではこれまでの発掘調査や測量調査によって得られたデータから岡山大学津島北キャンパス（以下、北キャンパス）の南西部における旧陸軍関連施設の変遷について検討していく。

#### a. 集会所・庭園とその周辺におけるこれまでの調査成果

北キャンパス南西部では旧陸軍関連施設として、集会所・庭園、門2ヵ所、土塁と水路、煉瓦建物が確認されている。

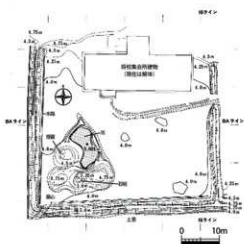


図16 工兵第十聯隊将校集会所と庭園  
(縮尺1/1,000)

##### ①集会所・庭園 (図16)

場所は北キャンパスの南西部にあたる。本センターでは1997年に測量調査を行った。この部分はほぼ50m四方が土塁で区画され、区画された空間の北側に集会所の建物が、南西部に庭園が配されていることが確認された。集会所建物からは正方形の切石が角を合わせて東側へ向かって規則正しく並べられており、石列は土塁が途切れる東側出入口部分へと続いていく。建物入り口付近のみ五角の石が配されている(野崎他1999)。

庭園は茶山と池によって構成されている。茶山には1937年7月に起きた日支事変に関連する「日支事変出征記念」と刻まれた石燈籠(1938年5月の銘あり)や3塊の立石群がみられる。庭園は日本庭園の様式である「茶山林泉式」庭園であったと評価されている(野崎2007)。

##### ②門

北キャンパス南西部では2ヵ所で門が確認された(詳細は本書第1章第1節)。いずれも上部は土塁で覆われていたため、廃絶後に埋められて土塁が築かれたと考えられる。

南側の門1は古段階と新段階があり、新段階は外側に砂利が、内側に板状のモルタルが敷き詰められていた。また土塁の掘削中に門柱の傘や土塁の土留めに用いられる角柱状石が出土している。

北側の門2は石材が「ハ」の字形に丁寧に並べられており、門1とは平面形が異なる。しかし門の外側は砂利敷きで、門1と同じような特徴もみられる。

門1でみられた門柱の部材や門2の「ハ」の字形プランは現存する山砲兵第二大隊表門と共通する特徴である。

##### ③土塁と水路

これまでの調査では土塁と水路は現存する門を除く部分に遡ると考えられてきた。2011年度の調査では庭園西側において、新たに門が見つかり、その部分で水路の北端を確認した(詳細は本書第1章第1節)。水路端部のコンクリート部分は、軸が敷地の内側にあたる東側に振れている。

##### ④煉瓦建物

煉瓦建物は門2の東側で確認された。最上段の角柱状石、2段目煉瓦、最下段煉瓦の3段である。煉瓦建物使用時はすべてが露出した状態であったが、門2使用段階には角柱状石のみが露出していたと想定される。このことから煉瓦建物は門2よりも古いものであったことがわかる。

## b. 旧陸軍の編成と各施設の構築時期

## (1) 岡山駐屯地における駐留部隊の変遷

岡山駐屯地に駐留した旧陸軍の部隊は時代情勢によって変化しており、それに伴い各施設の建築や廃絶も生じたと思われる。特に2011年度の立会調査で確認された門1・2は最終的には土塁で埋められており、門1はさらに古段階と新段階の使用時期が存在している。このため津島北キャンパス西半における部隊の変遷を整理しておこう(表2)。

まず陸軍第十七師団の駐屯地が置かれた1907年(明治40年)は輜重兵第十七大隊が駐留した。輜重兵とは食料や武器弾薬などの物資輸送を担当する部隊である。その後軍縮の高まりにより1925年第十七師団が廃止され、1938年まで工兵第十大隊(1936年聯隊に昇格)がここに置かれた。工兵は土木建築に特化した部隊である。工兵の駐留により輜重兵時代とは異なる施設がこの時に多く作られたことは想像に難くなく、空間構造に何らかの変化が生じた可能性が想定される。

## (2) 門1・2、煉瓦建物2の構築から廃絶までのプロセス

前項の部隊変遷を念頭に置いて各施設の構築から廃絶までのプロセスについて考えてみよう。土塁と水路については駐屯地の造成当時から存在したと考えられ、その後も大きな改変はなかったと思われる。ただし、門1・2の部分については門の廃絶後に土塁が築かれているため検討が必要である。

## ①門1

門1は古段階と新段階に分けられる。古段階については門柱ではなく柱を利用した門扉であった可能性が考えられる。古段階の上限は定まらないが、一度築いた土塁を掘削するとは考え難いことから、土塁構築当初、つまり1907年の第十七師団創設に伴う整地工事時にまで遡る可能性が高い。新段階は外側を砂利敷き、内側をモルタル敷きにしており、その境には門柱が置かれていたと思われる。門柱を有する他地点の門はいずれも1907～1908年に建てられたものと考えられており(野崎2007)、新段階も同時期であったと考えておきたい。

ここで問題となるのは門柱を伴うと考えられる新段階がいつまで開口していたのかという点である。表門ではない門2が記載されている1939年(昭和14年)とされる地図に門1はみられないことから(図17)、少なくともこの時には門が廃絶していたと考えられる。ここで門1の構造を集会所と比較してみたい。集会所で使用された出入り口に通じる通路は切石が丁寧に並べられているのに比べ、新段階のモルタルは不整形で、隙間なく並べられているものの角を合わせるなどの入念な作りではない。このことは新段階と集会所との関連性が薄かったことを窺わせる。さらに集会所の土塁に囲まれた閉鎖空間を考えると、庭園のそばにある門は不向きであったのではなかろうか。このような点から、集会所が機能していた時期には門1は既に取り壊されて土塁に覆われていた可能性が高い。工兵第十聯隊の転営は1925年(大正14年)であるため、この前後が廃絶期となろう。このように門1の使用期間は輜重兵が駐留したわずか18年前後であったと考えたい。

## ②門2・煉瓦建物2

門2についても上限と下限の問題がある。本門では門柱や柱穴は確認されておらず、石列に挟まれた空間を利用したものであったと考えられる。平面形は内側に入り込む「ハ」の字形を呈しており、1907に置かれた山砲兵第二大隊表門と同じである。ここで注意しなければならないのは、東側で確認された煉瓦建物の存在である。同建物は2段目以下のレベルが本門よりも20cm以上低く、また、本門を形成する石列や煉瓦建物最上段石柱状石の標高が約3.85mであり、東の集会所は標高約4.0mである。こうした点から、門2がつくられたのは、1907年段階ではなく、輜重兵時代のものではないかと思われる煉瓦建物を埋め戻した後であり、集会所建築に伴うものであったと考えておきたい。

表2 北キャンパス西半に駐屯した部隊の変遷

1907 (M40) 年～1925 (T14) 年	輜重兵第17大隊
1925 (T14) 年～1938 (S13) 年	工兵第10大隊 (1936年第10聯隊に昇格)
1938 (S13) 年～1945 (S20) 年	工兵第54聯隊



図17 昭和14年の地図に記載された門2

次に問題となるのは門2の地点が整地された1907年段階に土塁が築かれていたのかという点である。これについては門の下部を掘削していないため情報がほとんどないが、煉瓦建物の西辺は水路の南北軸の延長線上と平行しており、接してはいなかったと思われる。また庭園西側の水路先端コンクリート部分の軸が不自然に東に傾いており、これは南石列と平行している。コンクリート部分は以南の石列で構成される水路とは上面のレベルや底の構造が異なっており、同時期の所産とは考え難い。このことから本来は土塁と石列で構成される水路が門の部分まで続いていたと考えるほうがよいように思われる。それが工兵駐留期になって門

2の構築とともにいったん破壊され、北キャンパス西南角の再編が行われたと考えておきたい。

さらに門2は北側石列の南端部分が鉄管を使用した暗渠を作るため破壊されており、逆側の南側石列の北側先端も石が抜き取られている。暗渠は東方向に伸びており、その先の集会所につながっていたものと思われる。しかし、この際に門を構成する石材の数をあえて揃えていることからわかるように、暗渠敷設後も門は継続して使用され続けたようである。1939年（昭和14年）の地図にも門2は描かれていることからこの時点では開口していたことがわかる（図17）が、GHQが作成した終戦直後の地図には記載がない。このため終戦時の1945年（昭和20年）には塞がれていたと考えられる。

### c. 空間構造の変遷

ここまで検討してきた各施設の上限・下限時期を整理して旧陸軍各施設の空間構造の変遷についてみていこう（図18）。

#### ①整地工事（1907～1908年）

1907年の第17師団創設による整地工事の際に土塁及び水路、門1（古段階）があったものと思われる。

#### ②輻重兵駐留期（1908年～1925年）

北キャンパス西部は輻重兵が使用する。門1は山砲兵第二大隊表門と同様に煉瓦作りの門柱を用いたものに改変され、地面にも砂利やモルタルを敷いたものに改変されている。これにより物資輸送のための車両も通行が容易になったものと思われる。門1が内側に向かって傾斜しているのも通行を考えた作りであったと思われる。またこの場所には煉瓦建物も建設されていたようである。

#### ③工兵駐留期

1925年の第17師団解散に伴い当地点は新たな局面を迎え、駐留する部隊が輻重兵から工兵に変わる。当地点には集会所が設けられ、そこは前面と側面を土塁に覆われた空間であり、庭園も併せて建設されたと考えられる。この閉鎖空間を生み出すために門1（新段階）は取り壊され、土塁で覆われたものと思われる。そして新たに集会所の背後に門2を構築し、ここから中に物資を運んだものと思われる。庭園の茶山には1937年8月の日支事変への出征を記念した燈籠（1938年5月の銘あり）が建てられており、少なくともこの時には将校集会所や庭園が機能していたものと考えられる。門2は昭和14年作図の地図にまだ記載があるため、この時期までは開口していたようである。

## ④終戦とその後

旧陸軍各施設の最終的な姿は、終戦後にGHQによって作製された地図から知ることができる。

この地図には門2が記載されていないため、昭和14年から20年までの間に埋められたということがわかる。

一方、集会所は敷地が岡山大学へ移管した後も使用され続け、庭園は現在も姿を残している。

2011年度のフェンス敷設工事によって土塁は消失してしまったものの、水路は当時の面影を残し続けている。

## d. まとめ

本論ではこれまでに蓄積されてきた旧陸軍関連施設の調査データを基に、津島北キャンパス南西角の空間構造の変遷を検討してきた。各施設の移り変わりは旧陸軍の部隊変遷と密接に関わっており、特に1925年以降大幅な改変が行われたと考えられる。

ただし、輻重兵第十七大隊や工兵第十聯隊に関する写真や図などの資料が圧倒的に少ないことから、筆者の推測の域をでない部分があることは否めない。しかし、考古学的な調査により今後さらに新たな遺構・遺物が確認される可能性は残されている。このような点から土塁及び水路、各施設の上限や下限の定点が得られるかもしれない。

昨今のキャンパス整備の進行に際し、岡山大学構内に残されている旧陸軍関連施設は急速に失われている。しかし、これらは単なる古い施設ではなく、明治末から終戦に至る日本の近代化から現代につながる歴史を如実に物語るものである。今後も記録作業や調査研究の継続が必要であり、近代化遺産としての旧陸軍関連施設の位置づけについても模索していかなければならない。(南)

## 参考文献

- 野崎貴博2007「津島地区とその周辺の陸軍関連施設について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2005』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
 野崎貴博・小林青樹1999「岡山大学構内における陸軍関連施設の調査」『岡山大学構内道路調査研究年報15』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
 歩兵第五十四聯隊史刊行委員会1989『歩兵第五十四聯隊史』歩兵第五十四聯隊戦友会

## 図出典

- 図15 野崎2007を一部改変、地図の原因は岡山大学事務局保管図  
 図16 野崎他1999より引用  
 図17 歩兵第五十四聯隊史刊行委員会1989を一部改変  
 図18 筆者作製

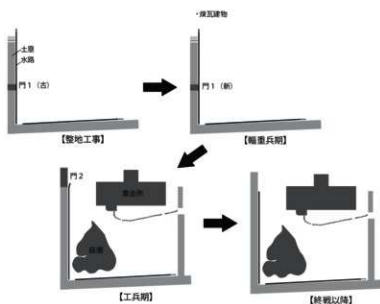


図18 北キャンパス南西角における旧陸軍関連施設の変遷

## 2. 津島岡大遺跡から出土した不明圧痕土器の付着炭化物の分析

国立歴史民俗博物館 工藤 雄一郎

## a. はじめに

2011年3月に刊行された『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』に、筆者は「津島岡大遺跡から出土したマメ科圧痕土器の付着炭化物の分析」として、津島岡大遺跡の第5次調査で見つかった縄文時代後期の河道（阿部編1994）から出土した土器片の内面付着炭化物の<sup>14</sup>C年代測定および炭素・窒素安定同位体分析、全炭素・全窒素分析の結果を報告した（工藤2011）。しかし、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター側で資料の取り違えがあり、シリコン型資料と土器資料がずれてしまっていたため、この土器の圧痕は「マメ科種子圧痕」ではなく、「不明圧痕」であったことが、『紀要2009』の刊行後に判明したとの報告を受けた（山本、2012参照）。

前回の報告では、「マメ科圧痕土器の付着炭化物の分析」として報告をしているため、本報告ではそれを訂正し、「不明圧痕土器の付着炭化物の分析」として、この土器付着炭化物の分析結果について再度報告を行うものである。

## b. 分析試料と分析方法

## 1) 分析試料

分析した土器は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターにて保管されていた津島岡大遺跡出土の縄文時代の土器であり、無文の胴部の破片である。この土器片は第5次調査の縄文時代後期の河道である、第27b層（砂礫層）から出土した資料である。第27b層からは縄文時代後期中業とされる土器が出土している（阿部編1994）。また、同じ河道内からは、縄文時代後期中業と推定される貯蔵穴と晩期と推定される貯蔵穴が見ついている。後期の貯蔵穴群からは、アカシヤコナラなどの果実が出土している。

津島岡大遺跡第5次調査の縄文時代後期の土器からはダイズ属圧痕が1点検出されている（山本2012の図16、No.1）。付着炭化物の分析に用いた土器片はこのダイズ属圧痕土器に共存する土器であるが、圧痕の種類は不明とされている。この不明圧痕のある土器のデータは『紀要2010』には提示されていない。

採取した土器付着物には、津島岡大遺跡からTO-1という試料名をつけ、試料番号とした。土器内面には炭化物がかさぶた状に付着していたことから、炭化物は何らかの有機物を煮炊きしたときにできた「お焦げ」と考えられる。金属製スパーテルを使ってこの付着炭化物を土器表面から削り落とし、分析試料とした。

## 2) 分析方法

試料は国立歴史民俗博物館の年代測定室に持ち帰り、実体顕微鏡下で可能な限り混入物を除去した後、写真撮影を行った。今回の試料には土壌や胎土などの混入がなく、非常に状態の良い炭化物であった。その後、試料約60mgを遠沈管に入れ、蒸留水で超音波洗浄を行い、試料に付着した土壌やホコリなどを除去した。次に、埋蔵中に生成・混入したフミン酸や炭酸塩などを溶解・除去するため、酸-アルカリ-酸（AAA）処理を行った。アルカリ処理は、試料の状態に応じて0.001~1.2M 水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液により、室温~80℃の処理を行った（吉田2004）。徐々にNaOHの濃度を濃くして、水溶液が着色しなくなるまでこの操作を繰り返した。最終的に80℃、1.2Mの濃度まで処理を行った。AAA後の試料は乾燥後、秤量した。

乾燥したAAA済の試料のCO<sub>2</sub>化からグラファイト化までは（株）パレオ・ラボに委託し、同社の加速器質量

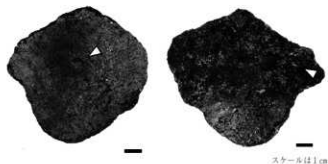


図19 津島岡大遺跡から出土した不明圧痕土器

左：外面。中央に種類が不明の圧痕が確認されている（三角印部分）。  
右：内面。厚さ1mm程度の炭化物が広範囲に付着している。右上が年代測定および同位体分析試料の採取位置（三角印部分）

分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）で $^{14}\text{C}$ 濃度の測定を行った。機関番号はPLDである。

炭素・窒素安定同位体比およびC/N比の分析は、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に設置されているEA-MSシステム（MICROMASS社製、The IsoPrime EA System）（装置の概要と測定方法については、國本田ほか2009を参照）を用いて、炭素・窒素安定同位体比の測定を行った。炭素同位体比の測定には試料0.2mgを、窒素同位体比の測定には3.4mgを用いた。炭素・窒素同位体比は原則1回の測定を行い、誤差は標準試料のばらつきで評価している。誤差は $\delta^{13}\text{C}$ 値で最大 $\pm 0.2\%$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 値で最大0.2%程度と考えられる。

### c. 分析結果

$^{14}\text{C}$ 年代測定結果を表1に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点として何年前かを示した年代であり、半減期はLibbyの5,568年を使用した。得られた $^{14}\text{C}$ 年代は、OxCal4.1（Ramsey2009）を用いてIntCal09（Reimer et al 2009）の校正曲線を使用して校正した。表1には、校正年代の確率分布の $2\sigma$ の範囲を示した。

$^{14}\text{C}$ 年代測定結果は $3,530 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP（PLD-16364）であった。IntCal09による校正年代では、3,885～3,720 cal BP（ $2\sigma$ ）であり、およそ3,800 cal BP前後（約1,850 cal BC前後）に位置づけられた。

炭素・窒素安定同位体比の結果は、それぞれ $-24.7\%$ 、 $5.0\%$ で、陸上動植物起源の有機物の値とほぼ一致した。また、C/N比は20.3であった。

表3 津島岡大遺跡から出土した不明圧痕土器付着炭化物の分析結果

試料番号	遺物番号	種類	$^{14}\text{C}$ 年代 (BP)	校正年代 ( $2\sigma$ ) (cal BP)	校正年代 ( $2\sigma$ ) (cal BC)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰)	C/N比 (mol)	機関番号
TO-1	T5-75 TOG0042	土器付着炭化物	$3530 \pm 20$	3880-3810 (43.5%) 3800-3720 (51.9%)	1935-1860 (43.5%) 1855-1770 (51.9%)	-24.7	5.0	20.3	PLD-16364

### d. 考察

近畿・中国・四国地方の縄文時代後期の各土器型式の $^{14}\text{C}$ 年代測定例はあまり多くないが、国立歴史民俗博物館の学術創成研究グループによって、いくつかの遺跡で土器付着物や炭化材の $^{14}\text{C}$ 年代測定が行われている（西本福2009）。これらのデータと比較すると、津島岡大遺跡の圧痕土器の年代は、縄文時代後期中葉の彦崎K2式や元住山I式頃の年代とほぼ同時期のようなものである。

阿部芳郎氏は津島岡大遺跡第5次調査で出土した後期中葉の第IV群土器を、27b層の古段階、25a層の新段階に区分し、27b層を堀之内2式期の終末、25a層を加曾利B1式初頭と平行するとした（阿部1994）。筆者が行った東京都下宅部遺跡の縄文時代後期の土器付着物の年代（工藤ほか2007）と比較すると、堀之内2式最終末段階の測定結果は得られていないものの、およそ後期中葉の加曾利B1式の年代範囲と一致する。圧痕付着土器が出土したのは27b層であるが、時間的には27b層の主体となる堀之内2式の終末段階よりはやや新しい土器のようである。

一方、炭素・窒素安定同位体比とC/N比を見てみると、 $\delta^{13}\text{C}$ 値は陸上動植物の範囲内であり、 $\delta^{15}\text{N}$ 値も5.0%と高い値は示していない。このことから圧痕付着土器の炭化物には、海の魚や貝類などの海洋起源の有機物は含

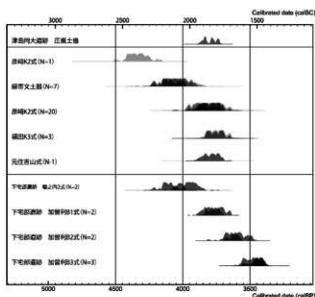


図20 津島岡大遺跡から出土した不明圧痕土器の付着炭化物の校正年代と縄文時代後期の各土器型式の校正年代との比較  
近畿・中国・四国地方の後期土器の年代は、西本福2009に記載されているデータを用いた。

まれていないと考えてよいだろう。また、C/N比をみてみると、圧痕付着土器の土器付着物には窒素がある程度含まれているが、動物性たんぱく質の値よりはC/N比が高い。吉田邦夫らの実験データを見ると、シカやタヌキ、クマなどの陸上動物起源の炭化物は、C/N比が10%前後あるいはそれ以下で、窒素含有率が高い。圧痕土器の付着炭化物はそれらの動物起源の有機物の値とは異なることから、動物起源の有機物は圧痕土器の付着炭化物に含まれておらず、炭化物の元となった有機物は、C<sub>3</sub>植物起源と推定される。

なお、今回分析した土器の圧痕は「不明圧痕」である。土器を焼成した際にどのような植物が近くにあったのかは不明だが、津島岡大遺跡の縄文時代後期の河道から出土した土器には1点「ダイズ属圧痕」のある土器が含まれていることから（山本2011の図16-1）、マメ科種子も利用されていたようである。貯蔵穴から出土している堅果類も、土器で煮炊きされた植物の候補の一つとなる。

これまで筆者が行った下宅部遺跡の土器付着植物遺体や炭化種実などのいくつかの分析事例と、今回の津島岡大遺跡の土器付着炭化物と比較してみると、下宅部遺跡出土のマメ科種子3点の $\delta^{13}\text{C}$ 値は $-25\sim-24\%$ 程度で、C<sub>3</sub>植物の中ではやや $\delta^{13}\text{C}$ 値が高い傾向があり、今回の圧痕土器の $\delta^{13}\text{C}$ 値も類似している。 $\delta^{15}\text{N}$ 値については、今回の圧痕土器の付着炭化物は下宅部遺跡のマメ科種子（工藤・佐々木2010）の値よりもやや高い。

下宅部遺跡の土器付着植物遺体の分析では、編組製品付着土器から採取した炭化物や繊維付着土器から採取した炭化物に、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が $-25\%$ よりも高い値を示すものが多かった（工藤・佐々木2010）。これらの編組製品や繊維と一緒に煮炊きした内容物までは特定できていないが、植物起源の土器付着炭化物のなかには $\delta^{13}\text{C}$ 値がやや高い値を示す一群があるようである。

C/N比についてみてみると、吉田邦夫ら（吉田2006、吉田・西田2009）の実験データでは、C<sub>3</sub>植物のうち堅果類はC/N比が高く30以上であるのに対し、ノビルなどの鱗茎類やアズキ、サトイモやヤマイモなどの根茎類に窒素がやや多く含まれており、C/N比も20以下である。ただし、筆者が行った下宅部遺跡の土器付着物の分析では、鱗茎付着の試料のC/N比が高い値を示しており、吉田らの実験データとは異なる傾向を示した（工藤・佐々木2010）。遺跡出土鱗茎類に関してはまだ研究の途上であり、実際にどのような植物が利用されていたのかは十分に明らかになっていないため、鱗茎類についても現時点では特定できない。小さな球形をした鱗茎類でも、ノビルやアサツキなどのネギ属と、テンブシ質に富むツルボ属やヒガンバナ属の間でC/N比は異なることが予想される。また、炭化して残ることがまずない根茎類について遺跡出土資料に基づいて議論することは極めて難しいため、現時点では根茎類についてこれ以上言及することはできない。

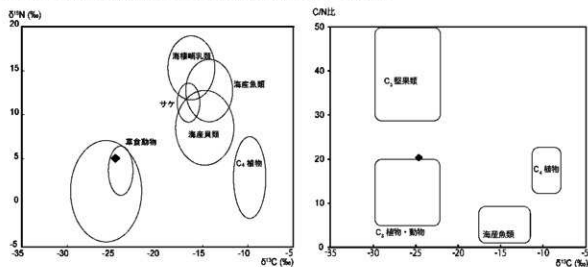


図21 津島岡大遺跡から出土した不明圧痕土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比とC/N比

左：資料資源の各グループの安定同位体比の目安の円は、吉田（2009）に基づく。

なお、最近、岡本田氏が押出遺跡や沖ノ原遺跡のクッキー状炭化物の分析を行っており、C/N比が25~40付近に分布するため、クッキー状炭化物の主成分を堅果類と推定しているが(岡本田ほか2010)、今回の津島岡大遺跡の土器付着炭化物の分析結果は、こうした堅果類が主成分と想定されるものともやや異なっている。

以上のデータからみて、圧痕付着土器の起源となった有機物の候補としては、C<sub>3</sub>植物のなかでもほとんど窒素を含まない堅果類は除外できるだろう。それ以外のC<sub>3</sub>植物のうち多少なりとも窒素を含む植物の候補として、マメ科種子や鱗茎類、根茎類などが挙げられるが、具体的な種類を特定するのは困難である。

今後、遺跡出土植物遺体のうち、可食部位が残っている場合には、それらの安定同位体比とC/N比の分析を行い、基礎データを蓄積していくことが必要である。

## 謝 辞

炭素窒素安定同位体比の分析設備を使用させていただき、分析についてご指導いただいた東京大学総合研究博物館の吉田邦夫先生と宮崎ゆみ子氏、東京大学北海文化研究常呂実習施設の岡本田博士にお礼申し上げます。

なお、本研究は、平成22~25年度科学研究費補助金若手研究(B)「縄文時代の植物利用史に関する年代学的研究」(研究代表者：工藤雄一郎)の一部を使用して実施した。

## 引用・参考文献

- 阿部方郎編1994『津島岡大遺跡4-第5次調査-』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 阿部方郎編1994『後期第IV群土器の型式学的検討』阿部方郎編『津島岡大遺跡4-第5次調査-』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 pp.261-277 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 工藤雄一郎2011『津島岡大遺跡から出土したマメ圧痕土器の付着炭化物の分析』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』pp.27-31 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 工藤雄一郎2012『旧石器・縄文時代の環境文化史-高精度放射性炭素年代測定と考古学-』新泉社
- 工藤雄一郎・小林謙一・坂本 登・松崎浩之2007『下宅部遺跡における<sup>13</sup>C年代研究-縄文時代後期から晩期の土器付着炭化物と漆を例として-』『考古学研究』53-4 pp.51-71 考古学研究会
- 工藤雄一郎・佐々木山香2010『東京都東村山市下宅部遺跡から出土した縄文土器付着植物遺体の分析』『国立歴史民俗博物館研究報告』158 pp.1-26 国立歴史民俗博物館
- 岡本田大・吉田邦夫・辻誠一郎2009『押出遺跡のクッキー状炭化物』『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』pp.241-249 日本考古学協会
- 岡本田大・吉田邦夫・辻誠一郎・福田正宏2010『押出遺跡のクッキー状炭化物と大木式土器の年代』『研究紀要』9 pp.1-14 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 西本豊弘編2009『弥生農耕の起源と東アジア-炭素14年代測定による高精度編年体系の構築-平成16~20年文化科学省・科学研究費学術創成研究費 研究成果報告書』国立歴史民俗博物館
- Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk, Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J., & Weyhenmeyer, C. E. 2009. IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 51, pp. 1111-1150
- Ramsey, B. C. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51-1, pp. 337-360
- 山本悦世2012『縄文時代後期~「突帯文期」におけるマメ・イネ圧痕-圧痕レプリカ法による岡山南部平野における調査成果から-』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』pp.17-26 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 吉田邦夫2004『火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代』新潟県立博物館編『火炎土器の研究』pp.17-36 同成社
- 吉田邦夫2006『炭化物の安定同位体分析』新潟県立研究紀要』7 pp.65-68
- 吉田邦夫・西田泰民2009『考古学がさぐる火炎土器』新潟県立歴史博物館編『火炎土器の国 新潟』pp.87-99 新潟日報事業社



## 第2章 鹿田遺跡の調査研究

### 第1節 発掘調査の概要

#### 1. 鹿田遺跡第22次調査地点

(地域医療人育成センター新営、調査番号1、鹿田AV～BB・04～07区)

##### a. 調査成果

- ①**弥生時代後期** 調査区の南半分に集中して遺構・遺物の分布を確認できた。これにより鹿田遺跡における同時期の集落の東北部へのひろがりとともに地形の確認ができた。
- ②**鎌倉時代～江戸時代初め** 鎌倉時代には遺構・遺物ともに希薄であるのに対し、室町時代～江戸時代初めには、調査区全域が屋敷地へと変化したことに、同時期の集落の再編を窺わせる。この動きは従来の調査成果を補強する点で注目される。
- ③**明治・大正時代** 時代は新しいものであるが、地域の有力庄屋の庭園遺構(池・水路)の調査において、当時の水利・土木技術に関するデータを考古学的に得ることができた点は、地域史と土木技術史を考えるうえで貴重である。

---

<b>調査地点</b>	岡山市北区鹿田町二丁目5番1号 岡山大学鹿田地区内 鹿田地区構内座標AV～BB・04～07区
<b>調査期間</b>	平成23年6月15日～11月18日 [内訳] 造成土掘削6/15～7/13、発掘調査(前半)7/14～9/22 基礎撤去9/26～10/7、造成土掘削10/11～10/17、発掘調査(後半)10/14～11/18
<b>調査面積</b>	533㎡
<b>調査体制</b>	調査主体 岡山大学(学長 森田潔) 調査担当 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター(センター長 北尾善信) 調査員 岩崎志保(助教、主任) 山本悦世(教授) 南健太郎(助教)

##### 遺構・遺物

- 【遺構】** ①弥生時代後期：井戸2基・土坑7基・溝4条  
②鎌倉時代～江戸時代初め：井戸11基、溝2条  
③明治・大正時代：池状遺構2、溝6条
- 【遺物】** 177箱 [土器146箱、矢板・杭などの木材他]
- 

##### b. 調査の経緯と経過

###### (1) 調査に至る経緯

2010年度末に岡山大学鹿田キャンパス内に「地域医療人育成センターおかやま」の新営が計画された。予定地はキャンパス北東の駐車場であり(図22)、以前に旧管理棟建物が建設されていた跡地にあたる。周辺で行われた鹿田遺跡第1次(外来診療棟)・第16次(立体駐車場)・第19次(歯学部渡り廊下)等の既調査の成果から、本調査地点には川が入る可能性が予想されたため、2011年1月に2箇所の試掘確認調査を実施した<sup>1)</sup>。その結果、

弥生～近世の遺構の存在が確認されたことから、発掘調査を行うこととした。

調査面積は533㎡、調査員3名が担当した。

## (2) 調査経過

表土掘削を2011年6月15日～7月13日に行った。掘削にあたっては、旧管理棟基礎が全面に残っており、強固な構造であったため、遺跡破壊を極力避けるためにまず基礎の存在しない部分(190㎡)の発掘調査(以下、前半調査と呼称)を行った後、基礎を撤去し、後半調査として残りの部分を調査した(図23)。

前半調査は7月14日に開始した。調査では表土直下に池・水路が検出され、これらに伴う石垣等の調査を行った後、近世～弥生時代の遺構の調査を進めた。記録に際しては調査員1名を増員した。8月21日には現地説明会を実施し、雨天の中での説明会であったが、26名の参加を得た。9月22日に前半調査を終了した。

次いで9月26日～10月7日に基礎を撤去し、調査が可能となった部分から10月14日より後半調査を再開した。後半調査では近代～弥生時代後期の、各時期の遺構を調査した。前半調査との連続性にも留意してデータを記録した。11月18日に全ての調査を終了した。全体の調査面積は533㎡であった。

11月5日に2回目となる現地説明会を計画したが、降雨により当日中止とした。

## c. 調査の概要

### (1) 層序(図23・24)

基本土層は以下の通りである。

1層：造成土である。1917(大正17)年の岡山医学専門学校移転の際の造成土及び、近代～現代の攪乱埋め土である。当地には1930(昭和5)年に管理棟建物が建設されており、その際にも大きく攪乱を受けている。上面の標高は2.7～2.9mである。

2層：淡橙灰色砂質土で、鉄分、灰色砂を含む。調査区北西部で確認される。上面の標高1.43～1.48mである。

3層：淡橙褐色砂質土である。上面の標高1.25～1.3mを測る。

4層：淡橙灰色砂質土で、上面の標高1.2mを測る。

5層：橙灰色砂質土である。標高1.0mである。

6層：淡灰色弱粘質土で、鉄分を多く含む。調査区中央部で標高0.9m、北端で0.65mである。砂質の差で上下に分けられる箇所もある。

7層：淡灰色粘質土で、上面の標高は調査区中央部で0.8m、北端で0.55mである。古墳時代初頭の土器が出土した。

8層：暗灰～暗黒灰色粘質土で有機質を多く含む湿地的状況を示す。上面は調査区中央部で標高0.66m、北端で0.5mである。弥生時代後期後半の土器が出土した。

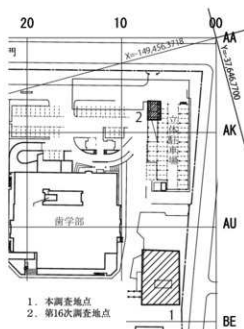


図22 調査地点位置図(縮尺1/2,000)

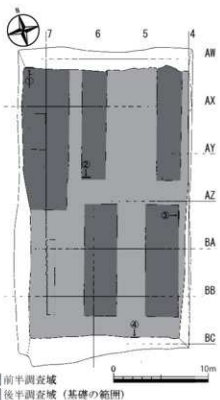


図23 調査区と土層断面の位置(縮尺1/400)

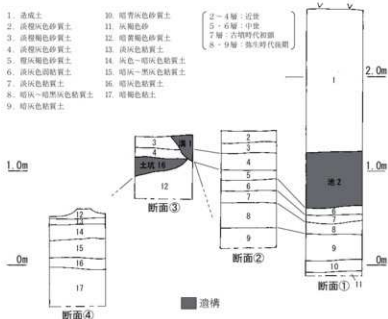


図24 土層断面柱状図 (縮尺1/40)

9層：暗灰色粘質土で、細砂を含む。上面の標高0.36mである。弥生時代後期前半の土器が出土した。

10層：暗青色砂質土で、調査区北側の一部でのみ確認した。上面は標高0.1mである。

11層：灰褐色砂である。調査区北側でのみ確認した土層で、上面は標高-0.07mである。

12層：暗黄褐色砂質土である。弥生時代後期の基盤層となる層である。調査区南半で認められ、断面③では標高は1.1mを測るが、上部を基礎により破壊されているところが多く、本来はそれ以上の高さがあったものと考えられる。12層は、北側低位部では11層より下位の標高0m以下に堆積が想定されるが、おそらく

堆積していない可能性が高い。本層上面段階に南北の高低差は1m以上と想定される。

13層：淡灰色粘質土である。

14層：灰色～暗灰色粘質土である。

15層：暗灰～黒灰色粘質土で、灰色粘質土ブロックをわずかに含む。

16層：暗灰色粘質土で、暗褐色砂をわずかに含む。

17層：暗褐色粘土である。標高0mである。

13～17層は調査区南半で確認された土層群である。北半で対応する土層が堆積する可能性は低く、微高地形成をなす層群と考えられる。

各層の時期は、周辺の調査や上面で検出した遺構の時期から、2～4層が近世、5層は中世後半、6層は中世前半と想定される。遺物が出土している7～9層は、7層は古墳時代初頭、8層は弥生時代後期後半、9層は弥生時代後期前半の時期と考えている。10～17層ではいずれも遺物の出土はなく、弥生時代後期以前とする。

## (2) 地形

本調査地点では時期によって地形の変化が認められ、弥生時代後期には南が高く、北が低い地形であったものが、中世には平坦化していくことが判明した。

調査区南半は微高地に、北半は北に向かって下がる低位部をなしている。その境はおおむね調査区東端のAZラインから西端のBAラインを結ぶラインである。微高地部では13層以下が粘土～粘質土の互層であり、各層の厚さ10～15cmで堆積するのに対し、12層では砂を含む砂質土層が40cm程の厚さで堆積しており、13層と12層との間で大きく環境が異なっていることを示す。こうした微高地の形成は弥生時代後期までに進み、南北で高低差のある地形となったことが窺える。

北側の低位部では、弥生後期段階には9層以下で砂の堆積が特徴的であり、流水を伴う状況を示すのに対し、8層には有機質を多量に含むことから湿地環境への変化が認められる。その後、低位部は徐々に埋没していき、南北の高低差が解消されるのは6層堆積後、中世後半と考えられる。遺構の分布状況も平坦化したことを示して

いる。

### (3) 遺構・遺物 (図25)

#### ① 弥生時代後期

微高地上では12層上面で井戸2基・土坑5基・溝4条を、低位部の斜面部分では9層上面で土坑2基を検出した。

井戸は調査区南端に2基が切り合っており、いずれも後期後半に属する。

土坑は、低位部に位置する2基については、出土遺物は比較的少ないが、一方、微高地上の3基からは大量の土器が出土した。前者の時期は後期前半、後者は後期後半と考えられる。

溝は、微高地の端部を区切る位置におおむね西方向に走行する一群と、それとは別に南北方向を示す1条がある。前者は3条が重複しており、埋没後、その上部には大量の土器が帯状に廃棄された状態で出土した。時期は後期後半頃と考えられる。

後者の溝は調査区南東端に位置し、弧を描くような平面形を示す。前者に比べて規模等の点で違いを示す。

#### ② 古墳時代初期

低位部の斜面において遺物が出土しているが、遺構は認められない。前代から集落が急速に縮小したことが窺える。

#### ③ 鎌倉時代～江戸時代初め

鎌倉時代後半の井戸1基と、室町時代～江戸時代初めの井戸10基・土坑1基・溝2条が検出された。これらの数字が示すように両期間の遺構密度の差は歴然としている。さらに前者の位置は調査区の南端であることから、鎌倉時代には南～西側に想定される屋敷地域の端部であった状況が、後者の時期に屋敷地域へと大きく変化したものと考えられる。

#### ④ 明治時代～大正時代

溝1条 (溝1) と庭園遺構を検出した。庭園遺構は調査区南半と北東の2ヵ所に位置し、池・水路により構成される。前者を庭園遺構1、後者を庭園遺

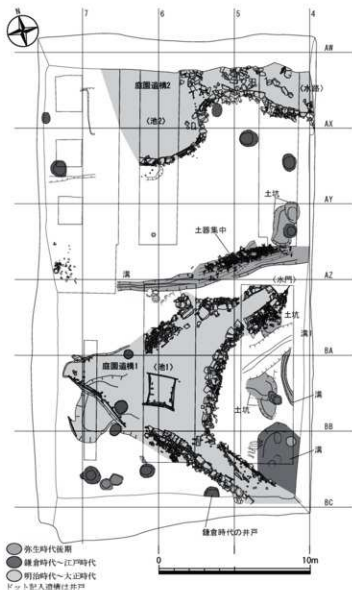


図25 検出遺構全体図 (縮尺1/250)



図26 弥生時代溝の遺物出土状況

構2として記述する。検出面は上層が削平されていることにより、調査区北半では7層上面、南半では3層あるいは12層上面となるが、本来は2層上面に対応する遺構群である。庭園遺構1と同2は、出土遺物から後者の方が新しい可能性が考えられる。溝1は3層上面で検出した。上面は削平されており、本来の掘削面が2層まで遡るかどうかは不明であるが、庭園遺構1の池との切り合い関係から庭園遺構より古いことは明らかである。

溝1：幅20m、長さ約5mを測る。本溝の底面両側に木杭と胴木が検出された。後述する庭園遺構1の池の石積み下部構造や、北東の取水路と方向が並行していることなど、類似する点が多いことから両者間の関連性を窺うことができる。

庭園遺構1：池部分は南北約12m、東西約8m、最深度で深さ1.5mを測る（図27）。池の東側には北東方向からの取水路と、南東方向への排水路が取りつく構造である。取水路には水門が、また池の中央部には方形の本柵の内部を掘りくぼめた施設が設置されている。また、西側は突出する張り出しを有している。この突出部には新旧の作り替えが認められ、古段階の突出部が埋まった後、東側により大規模な土留めを設置している。新しい段階の埋土からは明治10年の古銭が出土しており、古段階はそれ以前の時期と見られる。

これらには石積み、木杭と瓦敷きによる土留め、木杭と木板による土留めなど複数の工法が用いられている。石積み：水路兩岸と池の東岸～南岸にかけて使用されている。最下段に胴木を置き、その上に石を積む。特に水門の内側（西側）は水路からの水圧に対応するため切石が堅固に積まれていた。



図27 庭園遺構1の石積み完掘状況

木杭・瓦敷き：池の南岸・北岸の比較的緩やかな斜面に用いられる。斜面に瓦や石を敷き詰め、下端を木杭で土留めしたものである。

木杭・木板：取水路の水門よりも外側（東側）の兩岸、および池西側の突出部に用いられる。これらの場所では斜面の傾斜が他に比べて急であり、横板を二段～三段垂直に重ね、木杭で留めて土留めとしている。



図28 庭園遺構2の石積み・胴木完掘状況

庭園遺構2：調査区北東端に位置する（図28）。池は調査区中央から東にS字状に延びる石列の北西側の浅い落ち部分である。南東に水路が取り付く。池と水路は石積みにより構築される。石積みの最下段には胴木が敷かれ、複数の切り込みを入れることで、胴木とその上に積む石とを円弧状に配する工夫が認められる。水路には新旧二段階が認められる。新段階の水路からは大正9年の古銭が出土しており、最終の使用時期を示すものとみられる。

これらの遺構は岡山医学専門学校が設置される大正初めには埋没したもので、その直前までキャンパス内にあった有力庄屋の庭園の一部として機能していたことが、古写真の記録からも確認されている。

なお以上の内容は暫定的なものであり、詳細な分析・検討を経て正式報告を後日行う。

（岩崎）

註

1) 野崎貴博2011「1. 岡山県地域医療総合支援センター予定地」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』

## 第2節 立会調査の概要

### 1. 調査の実施状況

今年度の立会調査は、鹿田地区において3事業4件を実施した(図40・表5)。そのうち3件(調査番号2・3・5)は造成土内あるいは近代層までの掘削であった。遺構・遺物を多く検出した立体駐車場新営工事の配管工事に伴う立会調査(調査番号4)については次項に報告する。

### 2. 立体駐車場新営に伴う配管移設工事<調査番号4>

#### a. 調査地点の位置と経緯

本調査は、鹿田キャンパスの南西部に位置するエネルギーセンター東側の駐車場の立体化工事に伴うものであり、調査地点は現在の駐車場を囲む位置にあたる(図29)。工事内容は、立体化工事のうち配管の敷設替えて、10ヶ所の柵新設とそれらをつなぐ幅1.1m、総長170mに及び管路を深さ1.5~2.2mで掘削するものであった。範囲は広いものの破壊部分が比較的小規模と判断し、立会調査に対応することとした。調査は2012年2月27日~4月4日に実施した。

なお周辺では、立会調査(1999年度実施)<sup>1)</sup>および発掘調査(第12次調査、2000年度実施)<sup>2)</sup>において、弥生時代~近世の遺構・遺物の存在を把握している。そのため今回の調査においてもそれらに留意して調査を行った。

#### b. 調査成果

##### (1) 層序と地形

<層序>(図30・31)

1層: 現地表面は標高22~23mである。調査区北半では0.5m程度、南端では1.0mの厚さで堆積する造成土である。

2層: 青灰色~灰色粘質土で、近代の耕作土層である。上面標高は北端で1.85m、南端で1.35mを測り、南北で高低差があるのはCNライン付近とCZライン付近に段が設けられていることによる。

3層: 黄灰褐色砂質土で、近世層である。上面標高は北端で1.8m、南端で1.2mを測る。近代層と同様に段があり、南北で高低差が認められる。

4層: 黄褐色砂質土で、近世層であ

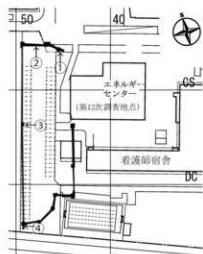


図29 調査地点と土層断面位置図 (縮尺1/2,000)

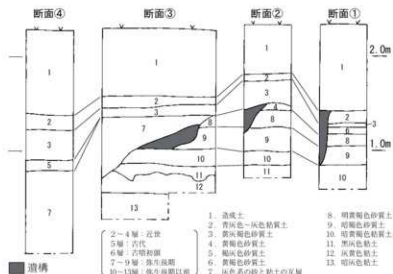


図30 土層断面柱状図 (縮尺1/40)

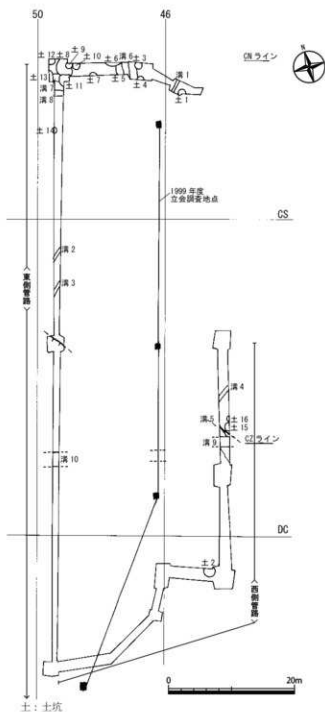


図31 検出遺構配置図 (縮尺1/600)

<地形>

本調査地点は弥生時代後期の段階で、北が高く、南が低い地形がひろがっている。その境はCV49区からCZ44区を通るライン付近である。弥生時代後期までに形成された北側の微高地（8～13層）に対し、南側では、砂や粘土が互層となって堆積する河道が広がっていたことが土層堆積から窺える。この高低差は、その後の堆積が進む中で中世段階まで認められるが、さらに近世においても段が設けられている点などに、その影響を見ることができる。

る。COライン以北で確認される土層であり、それ以外では上層によって削平されている。上面の標高は1.1mである。

5層：褐灰色砂質土である。東側管路ではCZライン以南、西側管路ではCXライン以南に確認している。これらより以北には堆積が認められず、近世層で削平されていると考えられる。上面標高は1.05～1.0mである。上面で検出した遺構の時期から古代と考えられる。

6層：黄褐色砂質土で、上面1.25mを測る。調査区北端、CN45区で堆積が確認された（図30-断面①）。出土遺物はなく、上面で検出した遺構から、時期は古墳時代初頭と考えられる。

7層：灰色系の砂と粘土の互層からなる河道内の堆積層を一括している。東側管路ではCZライン以南、西側管路ではCVライン以南に堆積が認められる。上面は北端で標高1.35m、南端で0.7mであり（図30-断面③・④）、北東が高く南西が低くなっている。出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

8層：明黄褐色砂質土で、出土遺物から弥生時代後期と考えられる。上面の標高は1.4mを測る。

9層：暗褐色砂質土で、マンガンを含む土層である。弥生時代後期と考えられる。上面の標高は1.2mを測る。

10層：暗黄褐色粘質土で、上面の標高は1.0mを測る。

11層：黒灰色粘土で、上面の標高は0.9mを測る。

12層：灰黄色粘土で、上面の標高は0.8mである。

13層：暗灰色粘土で、標高は0.6mである。

## (2) 遺構・遺物

検出した遺構は、古墳時代の土坑1基(土坑1)・溝4条(溝1~4)、平安時代前半の土坑1基(土坑2)、平安時代後半の溝6条(溝5~10)、近世の土坑14基(土坑3~16)・畦畔である。これらの分布をみる(図31)と、調査区北側の微高地部分にはほとんどの遺構が集中する。その中で、平安時代前半の土坑2は調査区南端に近い低部位に1基のみで位置しており、他とは異なる立地を示す。また、平安時代後半~末の溝9・10は、地形の変換点となる境界線上に東西方向に走る。

## ①溝(図32~34)

古墳時代の溝はいずれも北東-南西方向に走行する(図31)。検出面は溝1が9層上面、溝2~4は8層上面であるが、上位は現代の擾乱あるいは近世層により削平を受けているため、本来は同時期のものと考えられる。

溝1と溝3は埋土の類似やその位置から同一溝となる可能性も十分想定可能であるが、底面のレベルが異なる点は注意が必要である。いずれの溝も出土遺物がなく時期決定は困難であるが、隣接する第12次調査で検出した古墳時代後期の溝群と、その方向の類似性が指摘できることから、両者の関連も考えられる<sup>2)</sup>。

溝5~10は古墳時代の溝群とは走行方向が変わる。それらは、北北西-南南東の溝(溝5)と鹿田地割りに即した東西-南北方向をとる溝群(溝6~10)に分けられる。検出面は5層(溝5・9・10)・6層(溝6)・8層(溝7・8)があり、いずれも近世層によりその直上までが削平されているために異なっているが、本来は5層上面に属するものである。出土遺物から前者は平安時代後半、後者は平安時代末の時期が考えられる。

溝1(図32): CN45区で検出した。残存部分の幅は0.6m、長さは1.5mである。底面の標高は0.85mを測る。断面形は浅い皿状で深さ0.1m、埋土は暗褐色砂質土で黄褐色土ブロックを含む。

溝2(図32): CT49区で検出した溝で、残存部分の幅は0.7m、長さは2.7m、底面の標高は1.25mである。断面形は浅い皿状で深さ0.1m、埋土は淡灰色砂質土である。

溝3(図32): CU49区で検出した。残存部分の幅は1.2m、長さは2.7mである。底面の標高は1.25mを測る。断面形は浅い皿状で深さ0.1mである。埋土は淡褐色砂質土で黄褐色粘土ブロックを含む。

溝4(図32): CX44区で検出した。残存部分の幅は0.85m、長さは2.5m、底面の標高は1.15mを測る。断面形は浅い皿状で深さ0.15mである。淡灰色砂質土を埋土とし、暗褐色砂質土ブロックを含む。

溝5(図33): CY-CZ44区で検出した南北方向の溝である。後述の溝9によって切られている。残存部分の幅は1.0m、深さは1.1m、底面の標高は0.55mを測る。埋土は5分され、茶褐色砂質土を主体とする上層と灰色~灰白色砂が主体の下層とに大別される。上層から平安時代後半の瓦器碗一点が出土した。

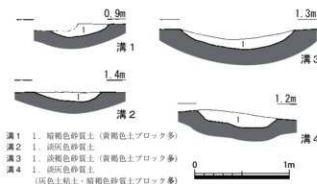
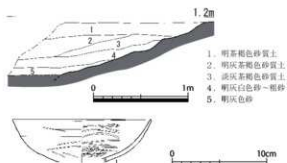


図32 溝1~4(縮尺1/40)



番号	種類・形種	口径(cm)	形態・手法	胎土	色調:内/外
1	瓦器・碗	14.6	(内)ミゾキ型(外)押込後ナデ・ミゾキ縁、1.4残存	微砂	暗灰/灰

図33 溝5・出土遺物(縮尺1/40・1/4)



**溝6** (図34)： CN46区で確認した溝で、47ライン東側を南北方向に走行する。残存部の幅は1.1m、長さ1.7m、底面の標高は0.72mを測る。断面形は皿状で深さは0.3mである。埋土は4分され、灰色系の砂質土層3層と灰色粘土層が最下層に堆積する。出土遺物はみられなかった。

**溝7** (図34)： CN49区で検出した東西方向の溝である。検出面は8層上面である。残存部分の幅は1.15m、長さ1.0mで、底面の標高1.1mを測る。断面形は皿状を呈し、深さ0.15mである。埋土は4分され、いずれも灰黄色系の砂質土層である。遺物は出土していない。

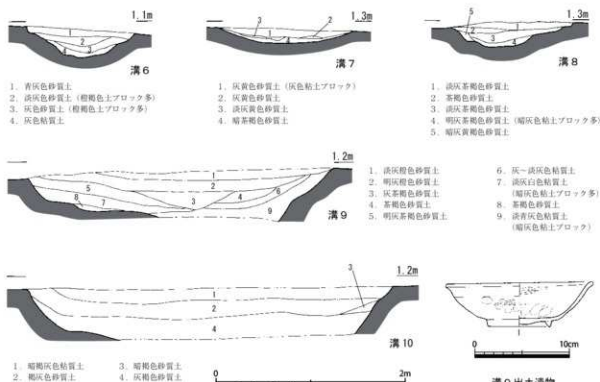
**溝8** (図34)： CN49区で検出した。溝7の南約2mを東西方向に走行する。残存部分の幅は1.3m、長さは1.0m、底面の標高は1.0mを測る。断面形は皿状を呈し、深さは0.25mである。埋土は5分され、灰茶～茶褐色系砂質土が主体をなす。出土遺物はない。

本溝は溝7と方向、規模、底面の標高等が共通している。この点は両者の関係に何らかの有機的要素を窺わせる。両者間の幅約2mが道となり、両溝が側溝となる可能性も考えられる。

**溝9** (図34)： CY49区で検出した東西方向の溝である。検出した溝の幅は3.2mで、深さ1.1mまでを調査した。掘削深度については、工事により破壊されるところまでに留めたため、溝の底は確認していない。遺物は土師質土器碗1点が出土した。出土遺物から平安時代末と考えられる。

**溝10** (図34)： CZ49区で検出した東西方向の溝である。溝の幅は3.7m、深さは1.1mまでを確認した。

溝9と溝10とは溝の規模・方向などの特徴が極めて類似している。また、1999年度実施の立会調査の際に46ライン付近で確認された東西方向の溝を両溝の中間に介在させると、東西方向の一つのラインを区画する溝を構成することが予想される。ただ、その位置を詳細に検討すると、東西ラインで2mのずれを持つ。この点については、いずれかの地点で南北の区画ラインを想定すると、その位置でクランク上に接続していることが予想される。



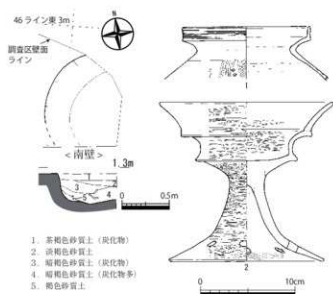
番号	種類・器種	出土量 (cm)			形状・手法・値	粘土色
		口径	底径	器高		
1	土師質土器・碗	151-156	66	4.5-4.8 (内)	押圧・一部ミヅキ (外) 押圧・磨滅 (ミヅキ?)、口縁玉縁、口縁4.5・高台2.3残存	微砂白

図34 溝6～10・溝9出土遺物 (縮尺1/40・1/4)

## ②土坑 (図35～39・表4)

古墳時代の土坑は微高地部に、平安時代前半の土坑は低位部にそれぞれ一基を検出した。近世土坑は、CNライン南側に集中する12基（土坑3～14）とCY44区に位置する2基（土坑15・16）である（図31）。近世土坑については、全体的特徴に留意した分類をもとに報告を行う。個々のデータは表にまとめる（表4）。

土坑1（図35）： CN45区に位置するが、南半・東半は調査区外となる。検出面は6層上面で、残存部分の長径は1.3m、深さは0.3mを測り、底面の標高は0.9mである。出土した丹塗りの高杯はその形態も注目される。時期は古墳時代初頭と考えられる。

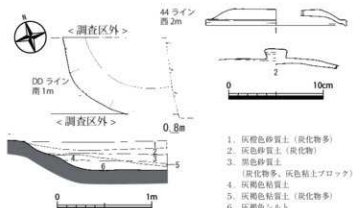


番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法集	胎土	色調
		口径	底径	器高			
1	土師器・壺	13.6	—	—	(内) 横ナデ・輪文沈線8条 (内) ケズリ (外) ハケ絵ミガキ・刺突2ヶ所、1/4残	陶砂・角閃石	茶褐色
2	土師器・高杯	18.4	16.4	16.9	1.5ヶ所・赤色顔料塗布 (脚部内) ハケ、円孔5ヶ所残 (腹元部・南)、1/2残	陶質	淡乳白・赤

図35 土坑1・出土遺物 (縮尺1/40・1/4)

土坑2（図36）： 低位部にあたるDD44区で検出した。北半・東半は調査区外である。検出面は7層上面で、残存する長径は1.1m、短径は0.8m、深さ0.3mを測る。断面形は皿状を呈し、底面の標高は0.4mである。埋土は5層に分層される。灰褐色砂質土を主体とし、特に3・5層に炭化物を顕著に含む特徴が認められる。底面や壁面には焼けた痕跡は認められないことから、周辺で行った被熱作業の炭化物を廃棄した可能性も考えられる。出土した須恵器から、平安時代前半と考えられる。

本時期の遺構は本調査地点から東約100mにある第4次調査地点で河道と橋脚が報告されている<sup>3)</sup>。本地点では、河道は確認されていないことから、その位置はより南側に想定される。



番号	種類・器種	口径 (cm)	形態・手法集		胎土	色調
			(内)	(外)		
1	須恵器・杯蓋	15.0	(内) ナデ (外) ケズリ	ナデ、1/4残存	陶砂	灰
2	須恵器・杯蓋	—	(内) ナデ (外) ケズリ	ナデ、つまみ径2.4cm	陶砂	灰白

図36 土坑2・出土遺物 (縮尺1/40・1/4)

近世土坑群（図37～39 表4）： 検出面は、土坑3～13が4層上面、土坑14～16が8層上面であるが、どちらも上位を近世層（3層）により削平されており、本来は4層上面と考えられる。土坑の形状は円形で断面が箱形のもの（土坑9・10）、隅丸方形で断面逆台形のもの（土坑4・6・8・13・15・16）、円形・長楕円形を呈し、断面がU字形（土坑3・5・14）と箱形に近いもの（土坑7・11・12）とに分けられる。円形で断面箱形の土坑



図37 土坑3・5・7・9～12・14 (縮尺1/40)

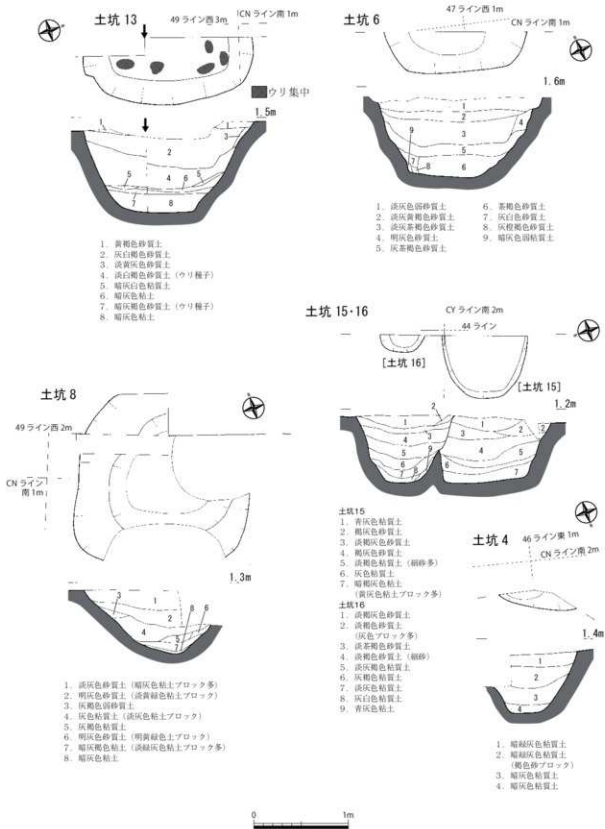


図38 土坑4・6・8・13・15・16 (縮尺1/40)

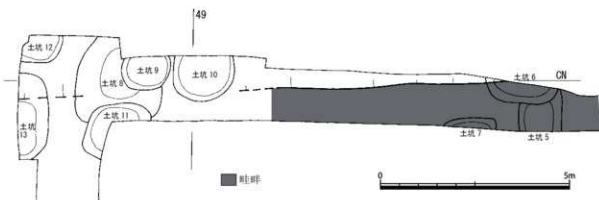


図39 土坑群（土坑5～13）と畦畔（縮尺1/100）

表4 近世土坑一覧（ ）は復元形・残存値を示す。

番号	出土位置	平面形（ ）は復元形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	掘削高 (m)	出土遺物
3	CN66	円形	U字形	(0.9)	(0.45)	0.5	0.4	—
4	CN66	(隅丸方形)	逆台形	(0.6)	(0.3)	0.6	0.65	—
5	CN47	(長楕円形)	U字形	(0.9)	(0.9)	0.5	0.95	—
6	CN47	(隅丸方形)	逆台形	(1.5)	(0.4)	0.8	0.55	—
7	CN48	円形	楕形	(1.15)	(0.2)	0.25	1.05	—
8	CN49	隅丸方形	逆台形	2.1	(1.8)	0.66	0.55	柴付煎片1
9	CN49	円形	楕形	1.0	(0.7)	0.6	0.85	平瓦多数
10	CN48	円形	楕形	1.35	(1.0)	0.6	0.75	備前灯明瓦片1
11	CN49	(長楕円形)	楕形	(1.4)	(1.0)	0.5	0.85	柴付磁器片1、漆焼片1
12	CN49	(円形)	楕形	(0.8)	(0.6)	0.55	1.0	—
13	CN49	(隅丸方形)	逆台形	(1.8)	(0.7)	0.8	0.5	陶器片1、寛永通宝1、ウリ種子
14	CN49	(円形)	U字形	(0.8)	(0.5)	0.4	0.95	土師瓦土器片1
15	CY44	(隅丸方形)	逆台形	(0.45)	(0.2)	0.7	0.45	—
16	CY44	(隅丸方形)	逆台形	(0.9)	(0.65)	0.7	0.45	—

は、内部に木枠を入れるもので、その一部が残っているものもあった。これらは野竈であろう。隅丸方形土坑は大型の傾向がみられ、長径2m前後の規模で、深い点が特徴であるのに対し、円形・長楕円形のもの比較的小型である。

遺物は土坑8～11・13・14から出土しており、江戸時代中頃～後半の時期を示す。注目される遺物としてはウリの種子があげられる。出土した土坑は隅丸方形を呈する比較的深い土坑13で、4層下面と7層から大量に出土した<sup>4)</sup>。その分布をみると4層中ではウリ種子の集中が数カ所に認められ、果実をそのまま置いたことが想定されることから、何らかの祭祀を行った後、埋められたと考えられる。種子は、個体の把握や品種の問題を考える目的で採取し、現在DNA分析を実施中である。

これらの土坑群の埋没後、その上部には東西方向の畦畔がつくられている。こうした状況は、東側の鹿田遺跡第12次調査地点にもつながっており、同ライン上に区画の意識を窺うことができそうである。土坑もまたそうした位置が選択されて配されていると考えられる。

**畦畔** (図39)： CNライン・CZライン付近にそれぞれ近世～近代の畦畔を検出した。いずれも検出面は3層上面であり、東西方向を示す。CNライン付近の畦畔は、前述した土坑群が埋没した後に形成されたもので、この東西畦畔を境に、北側と南側とは約20cmの段差を有する。一方、南に位置するCZラインの畦畔の下層には同じ方向を示す溝（溝9・10）があり、同位置が長期間にわたる区画の位置にあっていると考えられる。

CN・CZラインとも2層上面でも同位置で畦畔が確認され、近代にも踏襲されている。

## c. まとめ

本調査では、鹿田遺跡における微高地の南西端部の状況がどのように変化していくかを把握することができた。また、既調査において比較的資料の乏しい平安時代の遺構・遺物を確認できたことから、集落の復元にあたり、有益な情報を得ることができた。これまで本調査地点内にかかると考えられていた河道が予想以上に南に振れていることが確認できたことも成果のひとつである。

平安時代末から鎌倉時代では、屋敷地の復元を考える中で重要な知見を得られた。本調査で確認された東西溝（溝9・10）の位置が鹿田遺跡第3次調査地点<sup>5)</sup>の溝につながるラインにあたることから、同時期に鹿田遺跡に広がる屋敷地の最南端を区切る区画である可能性が考えられた。また、そうした溝がちょうど微高地から低位部への地形の変換点につくられているということも、区割りの基準を考える上で参考となるものであり、今後の分析に期待が持てる。（岩崎）

## 註

- 1) 横田美香2000「第4節立会調査（2）鹿田地区」『岡山大学構内遺跡調査研究年報17 1999年度』
- 2) 山本悦世2001「第2節発掘調査（1）鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18 2000年度』
- 3) 山本悦世1990「鹿田遺跡Ⅱ」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 4) こうした近世土坑からのウリ種子の出土例は第20次調査D地点でも認められた。
- 岩崎志保2012「鹿田遺跡第20次発掘調査C・D地点」『紀要2010』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 5) 註3に同じ

表5 2011年度鹿田地区調査一覧

種類	番号	工事名称<前目>	調査期間	構内座標	掘削深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内容
発掘	1	地域医療人育成センター新嘗 【鹿田遺跡第22次発掘調査】	7.14-9.22 10.14-11.18	AV-BE 04-07	24-325	1.0-1.6	弥生時代貝戸・溝 中世貝戸・溝 近世貝戸・溝、近代溝・池
	2	図書館給水管漏水	5.24	AP-ARS4	13	1.2	近世溝
	3	立体駐車場新嘗<地盤調査>	11.18・29・30	CQ49, CX49 CZ46	0.7-0.8	-	造成土内
立会	4	立体駐車場新嘗<配管>	2.27-4.4	CN45-49 CO-DF49 CW-DD44 DD45 DD-DF46 DF-DG47-49	0.7-2.38	0.55-1.0	弥生時代土坑、古代土坑 中世溝、近世土坑・溝・畦畔
	5	Jホール新嘗<造成土確認>	12.15・16	AJ61, AS61	1.0, 1.2	1.2	青灰色粘質土層上まで掘削

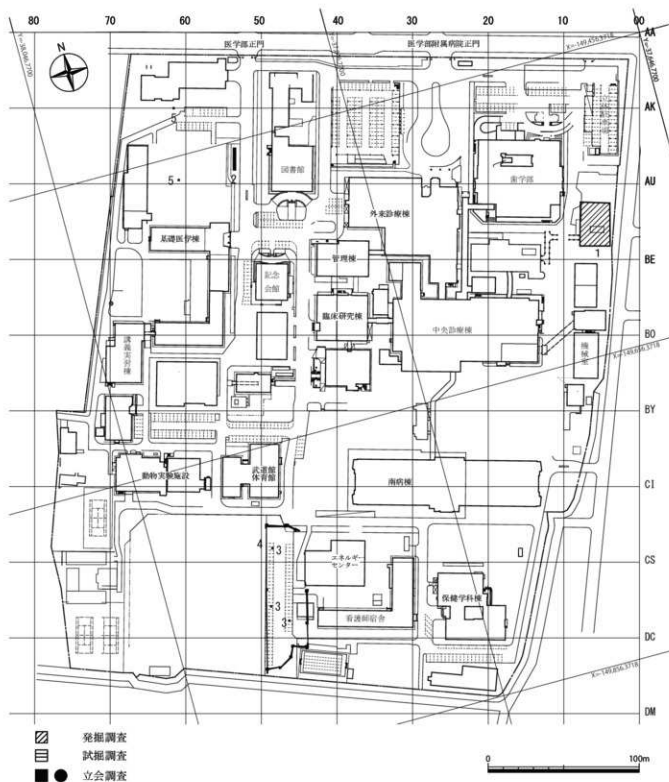


図40 2011年度鹿田地区調査地点 (縮尺1/2,500)

## 第3章 調査資料の整理・研究および公開・活用

### 第1節 調査資料の整理・研究

#### 1. 調査資料の整理

本年度は、鹿田遺跡第21次調査・津島岡大遺跡第34次調査の整理作業を実施し、その発掘調査報告書を紀要2010に掲載した。鹿田遺跡第14次調査、第10次調査、第18次調査b・c地点については、昨年から引き続いて発掘調査報告書作成に向けての整理作業を継続した。

・光本順編著2012「津島岡大遺跡第34次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』

・光本順編著2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』

その他には、鹿田遺跡で、第9次・第11次調査の土器接合作業、同遺跡第19次調査および第20次調査の遺物洗浄作業を進めると同時に、注記用の器材をレンタルし、9月～2月において注記作業を集中的に行った。対象調査は、鹿田遺跡第17次調査・第18次調査a地点・c地点、第19次調査・第21次調査、そして津島岡大第34次調査である。

#### 2. 調査資料の保存処理

##### a. 木製品のPEG保存処理作業

本年度は、昨年度から継続中の第9期の保存処理を終了後、第10期の保存処理を開始した。

<第9期保存処理>津島岡大遺跡：第22次（平安時代大溝出土木器）・第30次（近世・近代水路の杭）

<第10期保存処理>津島岡大遺跡：第5次（流木サンプル）・第6次（杭サンプル）・第9次（部材）・第12次（板材・樹種サンプル）・第13次（杭）・第17次（流木）・第22次（加工木）・第23次（加工木）・第24次（杭）・第26次（杭サンプル）・第28次（杭）・第30次（杭ほか）・第32次（流木サンプル）

鹿田遺跡：第6次（杭?）・第7次（板材ほか）

##### b. 木製品の高級アルコール含浸処理

鹿田遺跡：第12次調査（籠）・第18次調査（漆塗り容器）、第21次調査（陽物形木製品・墨書木板）

（株）吉田生物研究所に高級アルコール含浸処理を依頼（12/27）し、年度末に完了した。（山本悦世）

表6 PEG保存処理工程表

期	年月日	作業内容
第9期	2011年 4月 4日	蒸開け
	2011年 4月21日	濃度96%
	2011年 6月24日	木部引上げ
第10期	2011年 8月下旬	濃度40% T26・S6投入
	2011年 9月27日	残りの木部を投入
	2011年11月21日	濃度30%
	2011年12月26日	濃度30%
	2012年 2月 3日	濃度20%
	2012年 3月下旬	濃度30%

### 第2節 調査成果の公開・活用

#### 1. 公開・開示

##### a. 第13回岡山大学キャンパス発掘成果展

本年度は、津島岡大遺跡における主要な調査成果の一つである「農耕」をテーマとした。同遺跡では縄文時代



の植物栽培をうかがうことが可能な分析資料、弥生時代の水稲農耕開始期の遺構・遺物があり、弥生時代早・前期における初期水稲農耕に関する調査研究成果を主体に企画を構成した。また、岡山平野における水稲農耕開始期の実態をさぐるため、津島岡大遺跡の周辺に所在し、本テーマに密接に関係している津島遺跡、津島江道遺跡等の調査成果をあわせた展示・シンポジウムを目指した。なお、これらの遺跡の発掘調査にあたっては岡山県古代吉備文化財センター、岡山市教育委員会からは展示会への出土遺物・写真の借用およびシンポジウムへの報告者の派遣にご協力をいただいた。

計画当初、展示会とシンポジウムを同時に開催する予定であったが、会場の都合でシンポジウムは12月開催を余儀なくされ、その代替えの新企画としてココガク・カフェを行うこととした。各企画の会場・開催日は、展示会が岡山大学創立五十周年記念館交流サロンで、2011年7月13日（水）～18日（月・祝）、ココガク・カフェが同館ホワイエで、7月16日（土）、18日（月・祝）、シンポジウムが同館会議室で、12月11日（日）である。

来場者数は、展示会223名、ココガク・カフェ39名、シンポジウム104名である。

#### (1) 展示会

「農耕のはじまりを考えるー考古学と自然科学の融合、

津島岡大遺跡での実践ー」

展示は出土遺物・パネル・床面展示で構成し、来場者にわかりやすいものとするため、写真・図・イラスト等を多用した。内容としては、植物遺存体から栽培植物や遺跡周辺の植生をさぐる「植物考古学の世界」、初期水稲農耕段階の畦畔が残る「黒色土」の調査成果と研究課題を整理した「土から農耕を考える」、縄文土器と弥生土器の比較や石器の使用痕から当時の植物利用を考える「土器や石器にのこる植物利用の手がかり」、津島岡大遺跡における縄文時代後期と弥生時代早・前期の地形および遺構分布を比較した「床面展示」のコーナーを設けた。そのほか、最近の調査研究成果の速報として、鹿田遺跡出土猫形木製品の紹介を行った。

「植物考古学の世界」では、プラント・オパール分析や花粉分析の成果から、縄文時代後期から弥生時代前期にかけての植生の変化を示した。「土から農耕を考える」では、津島岡大遺跡に加え、津島遺跡（岡山県古代吉備文化財センター所蔵）と津島江道遺跡（岡山市教育委員会所蔵）において「黒色土」から出土した突帯土器ならびに弥生土器等を借用し、展示した。

上記のほか、体験コーナーとして、顕微鏡をのぞいて種子を観察するコーナーや、種子の写真と名前を当てるカルタ、種選別工程を追ったすごろくを準備した。小学校の夏休み直前の時期であったが、親子で体験する姿が見られた（図41）。

#### (2) ココガク・カフェ

当センターの調査研究員と参加者が、展示に関するテーマについて、くつろいだ雰囲気の中で気軽に意見交換できる場を設けることを目的とした企画である。参加形態は随時選

#### 【主な展示パネル構成】

展示会の開催にあたって  
植物考古学の世界  
発見！4000年前のダイズ  
遺跡周辺の植生をさぐる  
土から農耕を考える  
問題なのは「黒色土」－研究の歩みと課題  
「黒色土」の広がり  
プラント・オパール分析と花粉分析からみた  
「黒色土」  
「黒色土」研究の原点－津島遺跡  
最古の水田？－津島江道遺跡  
「縄文時代の黒色土」の謎－津島岡大遺跡  
「黒色土」はどのように形成？  
これからの「黒色土」研究にむけて  
土器や石器にのこる植物利用の手がかり  
＜床面展示＞  
地形復元の方法／地形と土地利用の変遷  
縄文時代後期の地形と遺構分布  
弥生時代早期・前期の地形と遺構分布  
速報  
鹿田遺跡で発見！最古の猫形の操り人形



図41 体験コーナー

出、途中参加も可能な緩やかなものとした。

当日は展示に関連した三つのテーマを設定し、3ブースに分かれて1ブースあたり10名程度の参加者に対し調査研究員1名が担当した。時間と回数については、三つのテーマのすべてに参加を希望される場合も考慮し、1回30分、各テーマ3回実施とすることで、すべてのブースに参加が可能となるように設定した。

今回は初めての試みで、調査研究員だけでなく参加者にとっても未知の体験であり、ともに手探りの状態であったが、アンケートの感想からも、このような企画の継続的な開催を望む意見もあり、今後、回数を重ねながらより良いスタイルを確立させたい。

### (3) シンポジウム

#### 「水稲農耕のはじまりを考えるー岡山平野の水田研究ー」

岡山平野における弥生水田の発掘調査成果や自然科学的分析成果を共有しながら、これからの調査研究にむけての新たな視点や方法について考えることを目的とした。

シンポジウムは津島岡大遺跡と周辺の津島遺跡、津島江道遺跡および旭川対岸の百間川遺跡群の調査成果をとりあげ、主として岡山平野における初期水稲農耕の姿を残す特徴的な土層である「黒色土」について、プラント・オパールや花粉などの植物遺存体の分析などから探る構成である。各報告の内容については、付録1に掲載している。パネルディスカッションでは、水田の認定方法、耕作時期の決め方、水稲農耕開始段階の土壌や灌漑施設などの農業環境、縄文時代と弥生時代の接点等の問題をめぐって意見が交わされた。また、岡山平野の各遺跡の報告に加えて他地域の状況を踏まえた検討を行うため、大阪府文化財センターの井上智博氏を招き、河内平野における地形形成と初期水稲農耕の展開について報告をいただいた。参加者は104名であったが、岡山県内外の埋蔵文化財行政担当者も数多く含まれるなか、会場から質問や意見が活発に出され、このテーマに対する関心の高さがうかがわれた。

会場外には、シンポジウムの内容に関連した出土遺物やパネル、「黒色土」のサンプルや土層はぎとり断面資料で構成されるミニ展示コーナーを設け、好評を博した。

### (4) アンケートから

本年も来訪者の動向や展示の評価を知るため、展示会、コウコガク・カフェにおいてアンケートを実施した。アンケートは展示会で回収数115枚（6日間）、回収率約52%、コウコガク・カフェで24枚（1日のみ）、回収率約62%である。

展示会アンケートのうち、来場歴をみると、リピーターは63%を占めている。本センターでは、展示会をはじめとする催しの際には、希望者に開催案内を送付している。リピーター率の高さにはこうした取り組みの積み上げがあったことがあげられる。一方、新規参加者には農学に関係されている方もあり、テーマや内容の工夫が参加者層の広がりにつながったものとも考えられる。

（野崎貴博）

#### 【コウコガク・カフェ】

- テーマ：①最古の猫形掘り人形  
②水田今昔ものがたり  
③土器・石器Q&A  
(1回30分、各3回実施)



図42 コウコガク・カフェコーナー

#### 【シンポジウム】

##### 「水稲農耕のはじまりを考えるー岡山平野の水田研究ー」

- 開会あいさつ  
新納 泉（当センター副センター長）  
「弥生農村の世界ー津島遺跡ー」  
金田善敬（岡山県古代吉備文化財センター）  
「最古の水田？ 津島江道遺跡」  
福崎 由（岡山県教育委員会）  
「移りゆく景観と謎の黒色土ー津島岡大遺跡ー」  
光本 順（当センター）  
「百間川遺跡群の水田」  
亀山行雄（岡山県古代吉備文化財センター）  
＜パネルディスカッション＞  
パネリスト：福崎 由・金田善敬・亀山行雄・  
光本 順  
コメント 井上智博（大阪府文化財センター）  
司 会 山本悦世（当センター）

## 2. 資料・施設等の利活用

## a. 調査・研究への支援

## (1) 資料調査協力

- ・縄文土器（津島岡大遺跡第17次調査）：吉備国際大学 白井洋輔、2011年4月
- ・縄文土器（津島岡大遺跡第17次調査）：鳥根県古代文化センター 轡中光輔、2011年9月
- ・縄文石器（津島岡大第15次調査）：香川大学 丹羽佑一、2011年10月
- ・縄文土器（津島岡大遺跡）：岡山大学 松本直子、2011年11月・2012年1月
- ・ウリ・雑草メロン種子（鹿田遺跡第5・6次調査）：岡山大学 加藤鎌司、弘前大学 田中克典、2011年12月
- ・弥生土器（鹿田遺跡）：富山大学 次山淳、2012年2月
- ・銅鏃（鹿田遺跡）：岡山大学大学院生 奥原このみ、2012年2月

## (2) 圖書の貸出

圖書の外部貸出：14件（岡山大学文学部学生ほか）

## (3) 資料の貸出

## 【展示会】

- ・人面線刻土器（鹿田遺跡第1次調査）：出雲弥生の森博物館『弥生人の姿－倭人伝の人々－』7月16日～9月19日開催（出雲市）
- ・棒火矢・鉛玉（津島岡大遺跡第12次調査）、鉄砲玉（同遺跡第13次調査）：岡山城天守閣特別陳列場『城の攻めと守り～その武器が語る武家社会の本質～』3月17日～5月6日開催（岡山市）

## 【研究会】

- ・縄文時代装身具ほか（津島岡大遺跡）：中四国縄文研究会『第22回中四国縄文研究会岡山大会』7月2・3日開催（岡山大学）
- ・鹿田遺跡第19次調査の調査・遺物写真：考古学研究会ポスターセッション、8月27・28日開催（岡山大学）

## b. 教育支援

## (1) 博物館実習：8月8日～11日、17・18日、補講8月23・24日

今年度の受講生は合計29名である。10名をめぐりに3班にわかれて、それぞれ2日間にわたる実習を行った。具体的には、8月8・9日10名、同10・11日10名、そしてお盆休みを挟んで、同17・18日に8名を受け入れた。1名のみは、日程の都合上、受講できなかったため、8月23・24日に補講日を設定した。

授業目的は、発掘調査および整理作業の体験からの、考古資料の取り扱いに関する基本的知識の修得であり、1日目に発掘調査、2日目に室内整理の内容とした。発掘調査は鹿田遺跡で、そして整理作業は津島地区の本センターで遺物の洗浄・注記・接合、そして木製品の保存処理工程を実施した。最後に、グループ別に学芸員として本講義の感想や紹介について発表を行うことで、全体をまとめた。

表7 2011年度非常勤講師の委嘱依頼

職名	氏名	担当科目	委嘱期間	備考
教授	山本 悦世	博物館実習	平成23年4月1日～平成24年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助教	野崎 志保	博物館実習	平成23年4月1日～平成24年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助教	野崎 貴博	博物館実習	平成23年4月1日～平成24年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助教	光本 順	博物館実習	平成23年4月1日～平成24年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助教	南 健太郎	博物館実習	平成23年4月1日～平成24年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）

## (2) 大学における授業の受け入れ

- ・鹿田遺跡第1次調査出土の木製品見学：社会文化科学研究科・新納泉講義において、2011年12月

**(3) オン・ザ・ジョブトレーニング**

平成22年度から始めた事業である。本センターの業務は、大学と社会の接点に位置しており、その特徴を活用し、一般社会人の職場で発掘調査や室内整理業務に従事する場を学生に提供することで、より一層のスキルアップにつなげることをめざしている。これは、大学の講義や実習では体験できない経験であり、加えて経済的な学生支援にもつながる。そして、センターとしても業務補助として、一定の成果を得ることができる事業である。

学生の募集においては、文化財に関する仕事を体験したい人という一定の条件を付けて、学務部を通して広く募集をかけ、本年度は、合計12名の学生を雇用した。雇用形態は、事務的手続きの関係から、前半はアルバイト雇用、後半は非常勤雇用となった。

それぞれの所属は、自然科学研究科院生2名、社会文化科学研究科院生4名、理学部学部生2名、文学部生2名、法学部生2名である。文系・理系を問わず、幅広く学生を雇用することができた。業務は、構内遺跡出土の遺物整理作業を中心に、展示会の補助などである。考古学専攻生には、鹿田遺跡第22次調査での発掘調査補助作業を加え、専門的技術の獲得も視野にいたれた内容とした。

**c. 社会貢献****(1) 中学生職場体験**

- ・岡山市立中央中学校：11月16日～18日 3名
- ・岡山市立岡北中学校：2月1日～3日 3名

**(2) 職員兼業依頼**

山本 悦世：岡山県埋蔵文化財保護対策委員会  
岡山県環境評価技術審査委員会

〔第7回津島遺跡文化財講座〕派遣講師（2012年3月9日）：主催・岡山県古代古備文化財センター

岩崎 志保：岡山県埋蔵文化財保護対策委員会

**(3) 展示見学の受け入れ****【センター内 常設展示室】**

- ・一般4名（5月、12月、2月）
- ・The School of Oriental and African Studies (SOAS) 修士課程1名（6月）
- ・高校生1名（8月）
- ・中学生6名（11月、2月）

**【考古資料展示室】**

- ・一般3名（5月、2月）
- ・朝日高校50名（12月）
- ・大学院社会文化科学研究科：築島准教授、國學院大学：水谷三公教授（9月）
- ・中学生6名（11月、2月）
- ・津島弥生セミナー（3月）

**(4) マスメディアへの公開**

- ・鹿田遺跡第18次調査出土猫形木製品：NHK、RNC、山陽新聞、読売新聞、朝日新聞、共同通信、岡山日日新聞（5月）、山陽放送（6月）
  - ・鹿田遺跡第22次調査状況：山陽新聞（8月）
- (山本)

### 第3節 調査研究員の個別研究活動

#### 1. 外部資金の獲得状況

山本悦世

・ 基盤研究 (A) 「レプリカ・セム法による極東地域先史時代の植物栽培化過程の実証的研究」(研究代表者: 熊本大学 小畑弘己) 研究分担者

・ 基盤研究 (B) 「縄文時代後期における稲作農耕空間の探求」(研究代表者: 愛媛大学 田崎博之) 連携研究者  
野崎貴博

・ 若手研究 (B) 「吉備地域における群小墳の展開過程からみた古墳時代社会構造の研究」研究代表者

・ 基盤研究 (A) 「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」(研究代表者: 岡山大学新納泉) 研究分担者

光本 順

・ 若手研究 (B) 「人物埴輪からみた古墳時代のジェンダー構造に関する実証的研究」研究代表者

・ 基盤研究 (A) 「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」(研究代表者: 岡山大学新納泉) 研究分担者

#### 2. 論文・資料報告ほか

山本悦世2012「縄文時代後期～「突帯文期」におけるマメ・イネ圧痕」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター: pp. 17-26

野崎貴博2011「中四国の埴輪館と地域間の交流」『埴輪から見た中期古墳の展開』中国四国前方後円墳研究会: pp. 1-10

野崎貴博2012「造山古墳と周辺古墳群の円筒埴輪にみられる畿内との関係」『岡山市造山古墳群の調査概報』科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書: pp. 27-32

光本 順2011「弥生社会の新権力論」『弥生時代の考古学』第9巻 同成社: pp. 231-245

光本 順2012「造山古墳前方部所在石棺研究の現状と課題」『岡山市造山古墳群の調査概報』科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書: pp. 38-45

南健太郎2011「南九州における車輪石の拡散」『琵琶湖と地域文化 林博通先生退任記念論集』サンライズ出版: pp. 48-53

南健太郎2011「重圓文鏡の生産・拡散とその意義-南九州における検討から-」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』第5号 アジア鑄造技術史学会: pp. 31-34

#### 3. 研究発表・講演ほか

##### a. 研究報告

山本悦世

・ 中山誠二・山本悦世「縄文時代のマメ科植物の利用と栽培」日本考古学協会2011年度総会、2011年5月29日、國學院大學

野崎貴博

・「中四国の埴輪棺と地域間の交流」第14回中国四国前方後円墳研究会、2011年11月26日、鳥取県湯梨浜町中央公民館

光本 順

・Reconsidering cross-dressing in ancient Japan: queer archaeology of the human-figured *haniwa* figurine in the Kofun period. TAG (Theoretical Archaeology Group) USA 2011 Berkeley 2011年5月7日 於：米国 University of California, Berkeley

・「移りゆく景観と謎の黒色土-津島岡大遺跡-」シンポジウム「水稲農耕を考える-岡山平野の水田研究-」2011年12月11日、岡山大学創立五十周年記念館

南健太郎

・「重圏文鏡の生産・拡散とその意義-南九州における検討から-」アジア鑄造技術史学会第5回榎原大会 2011年8月27日、榎原考古学研究所

・「弥生時代の瀬戸内地域における銅鏡拡散とその背景」考古学研究会岡山例会、2011年12月10日、岡山大学

b. 講演

・山本悦世「種子同定からみた農耕の成立と変遷」津島遺跡セミナー、2012年1月21日、岡山県立図書館

#### 4. 資料収集・調査

山本悦世

・科学研究費基盤研究（A）に基づく土器瓦痕調査（岡山県古代吉備文化財センター）

・科学研究費基盤研究（B）に基づく文京遺跡の調査（愛媛大学）

・構内遺跡に関する資料調査（愛知県名古屋市、京都国立博物館）

岩崎志保

・構内遺跡出土資料関連調査（京都市）

・中国戦国時代青銅器の資料収集（東京都、福岡市）

野崎貴博

・科学研究費基盤研究（A）に基づく山陽地域中期古墳出土埴輪資料収集・調査（広島県、山口県）

・科学研究費若手研究（B）に基づく中・後期古墳群の踏査（大阪府、奈良県、和歌山県）

・科学研究費若手研究（B）に基づく特製棺資料の調査（鳥取県、福岡県）

光本 順

・科学研究費若手研究（B）に基づく人物埴輪に関する資料収集・調査（石川県小松市、群馬県太田市、和歌山県和歌山市、大阪府高槻市）

・科学研究費基盤研究（A）に基づく古墳時代石棺に関する資料収集・調査（福岡県うきは市、奈良県葛城市）

・構内遺跡に関する資料調査（名古屋市）

南健太郎

・弥生時代から古墳時代の銅鏡に関する資料調査（京都府、大阪府、兵庫県、広島県）

## 第4章 2011年度における調査・研究のまとめ

本年度のセンター業務は、発掘等による構内遺跡の調査、報告書作成に伴う研究面を備えた整理作業、展示会や中学生の職場体験の受け入れに代表される社会貢献といった通常の業務に加え、いくつかの新たな取り組みを行った。一つは、博物館実習の受け入れという形で担っている教育面において、オン・ザ・ジョブトレーニングを取り込んだ点、そして、もう一つは、報告書刊行後の資料に対して有効な保管体制を目指したデータベース化の準備に取り組んだ点である。

### 【構内遺跡の調査】

発掘調査は鹿田キャンパスで実施した第22次調査のみであったが、津島キャンパスでも、擁壁工事において旧日本陸軍駐屯地の土塁が破壊されることに伴う試掘あるいは立会調査が比較的広範囲に及び、予想以上の成果を上げることができた。

一般的に、非常に新しい時期を対象とした調査は実施されない場合も多いが、上記の2件の調査では、近代の水利施設にかかわる技術的側面や軍事施設の変遷などの解明に寄与することができた。特に、鹿田遺跡の調査では、弥生時代以降、集落の変遷を近代までたどること地域史として完結することができた点、そして、旧微高地の東端部における地形の特徴や水利環境を復元する手がかりとなった点も見逃せない。

### 【資料整理・研究】

鹿田遺跡第21次調査・津島岡大遺跡第34次調査の整理作業を行い、『紀要2010』への掲載によって正式な報告を行った。特に鹿田遺跡の調査は、遺跡成立の基盤となる微高地の北端を解明する上で重要な手がかりを提供することとなり、さらには「鹿田庄」の北の境界を指し示す可能性をもつ点で極めて注目される調査報告となった。同遺跡の北東部分の調査となった第22次発掘調査成果も合わせ、地形復元並びにその変遷の解明にとって、資料の蓄積が急速に進行した1年と評価したい。

個人レベルの研究で構内遺跡に関連するものとしては、津島岡大遺跡を含む岡山平野を対象として縄文土器の圧痕調査の成果報告をあげることができる。それに関連して、昨年度、資料の誤認があり、関係者にご迷惑をおかけした点も本紀要で訂正することができた。

### 【展示会・シンポジウムの開催】

展示会では、会場の都合により展示会とシンポジウムの開催時期を変えざるを得ない状況を余儀なくされたが、それを受けての新企画「コウコガク・カフェ」の取り組みは、開催者と参加者の距離を縮める形として、今後の展示会の可能性を広げることとなった。展示にあたっては、津島岡大遺跡の成果を自然科学的視点から見直し、研究の過程や楽しさを伝えることを目指した。それは企画側にとっても刺激的なものであり、学外の研究者を交えて岡山平野の水田研究について議論を深めるシンポジウムにつなげることができた。本紀要ではその概要を付編に掲載している。今後も研究面の充実と外部への発信に努めていきたい。

### 【オン・ザ・ジョブトレーニングと資料のデータベース化】

オン・ザ・ジョブトレーニングは、教育と本センターの業務進行を備え合わせた取り組みであり、学生の社会体験からのスキルアップや経済的支援とやや専門性をもった業務の推進の両立を目指した。授業では得がたい社会経験の場を提供できる点は、本センターならではのといえよう。

データベース化は、これまでに蓄積された遺物に関して、有効な利用を目指して全ての資料（図面・写真・遺物など）を包括的に管理できるシステム作りを目指すものである。2011年度はその準備期間と位置づけた作業を進め、次年度へと継続することとなった。報告後の資料をいかに保管するか。効果的な体制を確立していくことが今後の課題となる。

(山本)

## 付編1

### シンポジウム『水稲農耕のはじまりを考えるー岡山平野の水田研究ー』の発表記録

1. 弥生農村の世界ー津島遺跡ー
2. 最古の水田？ 津島江道遺跡
3. 移りゆく景観と謎の黒色土ー津島岡大遺跡ー
4. 百間川遺跡群の弥生前期水田

#### 1. 弥生農村の世界ー津島遺跡ー

岡山県古代吉備文化財センター 金田 善 敬

弥生時代前期の津島遺跡でどのような水田稲作が行われていたのかについて、調査成果をもとに説明したいと思います。

まず、津島遺跡の調査歴を簡単に説明します。昭和35年から北池・南池で発掘調査が行われ、南池周辺で弥生時代前期でも古い弥生土器が出土しましたが、昭和43・44年に武道館当初建設予定地で弥生時代前期の集落跡と水田が見つかったことで全国的に有名になりました。その後、平成になって、陸上競技場、新体育館の建設等に伴って発掘調査が行われました。資料に津島遺跡弥生前期稲作マップをつけています(図46)。総合グラウンド各所に設けられた調査区の、特に稲作に関する調査成果を記載しています。この資料をどのように読み取っていくかが、まさに本日の課題といえます。

次に、津島遺跡の弥生時代前期水田層といわれる黒色土について説明します。先ほど新納先生が今日の水田土壌は灰色だとおっしゃいましたが、明治時代まで残っていた水田層はご覧のとおり灰色をしています。この近世水田の特徴として、梅雨時に田んぼに水を引き入れ、収穫までには落とすという毎年の給排水作業があげられます。こうすると水田下部にオレンジ色の鉄分や、チョコレート色のマンガンという物質が沈着していきますが、これが水田層を特定するひとつの目安となります。次に、黒色土ですが、報告書などで黒褐色土とか暗褐色土とも表記されているように必ずしも土色は一様ではありません。ここでは、黒色土と申しますが、さきほどの近世水田と比べても明らかに色が黒いということはお分かりいただけるかと思います。それから、この黒色土では鉄分とかマンガンの沈着は顕著ではありません。この黒色土は、津島遺跡を中心に東西、南北およそ1.5km四方の広い範囲に分布しているといわれています。これに対して、現在判明している同時期の集落はわずかしか見つかっていません。

津島遺跡では黒色土が検出される標高を目安に「微高地」、「水田」、「低位部」と三つに分類して理解しています(図43)。「微高地」ですが、検出面が相対的に高く、集落域を伴う場合があります。具体的な調査地としては武道館当初建設予定地(微高地)、南池地点があります。低い場所のものは「低位部」と呼んでいます。南池東側、新体育館の西側、武道館当初建設予定地(低位部)があげられます。相対的に低いため、土壌が還元状態になり少し青みがかった色調の土もあるようです。「水田」と呼んでいますのは、両者の中間的なものということ、標高1.3mから2mくらいです。水田というからには検出レベルのほかにも根拠があり、畦畔とか水路が伴っている場合があります。

この黒色土のあり方について、武道館当初建設予定地を例に説明したいと思います。ここでは微高地縁部に杭を打ったような痕跡(矢板状杭痕跡)が認められましたが、この痕跡を境として西側が微高地となっています。現在、還元整備をしていますけれども、堅穴住居や掘立柱建物などが検出され、いわゆる集落域と考えています。





図43 黒色土の種類

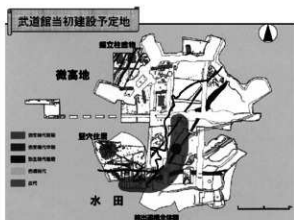


図44 武道館当初建設予定地遺構図

水田はちょうど微高地の縁辺部に沿うようなかたちで、幅が5mとか7mだったと思いますけれども、帯状に水田が検出されています。ただ、この水田では畦畔は検出されておらず、どちらかといえば低位部といった方が良いのではと思っています。これがなぜ水田かということですが、ここではプラント・オパール、花粉、種子の分析から水田と判断されました。この武道館当初建設予定地は、集落域と水田がセットになって発見された全国でも稀な例であるということ、これにより国史跡に指定されたという経緯があります。

水田について補足しますが、陸上競技場の調査では水田を示す黒色土が広い範囲で検出されました。水田では畦畔が発見されていますが、現在の田んぼと比べると区画が小さいので「小区域水田」と呼んでいます。大きいもので一枚の面積が70㎡、小さいもので6、7㎡を測ります。大小さまざまありますが、平均で20㎡くらいでしょうか。ここでは、水田直上からイネの穂を摘み取るための石包丁も出土していますので、ここでイネを収穫していたということは間違いないと考えています。

次に稲作を裏付ける証拠としてよく引用されますイネのプラント・オパールについて分析事例を紹介いたします。これは、体育館建設予定地J区の結果です。ここでは、津島遺跡の水田のなかでも非常に多くのプラント・オパールが検出されました(図45・46)。65、66層は古墳時代後期の水田層、77、78、80層が弥生前期水田の黒色土に相当します。古墳時代後期の水田層においても、弥生時代の前期水田層においてもイネのプラント・オパールが検出されています。ここで問題なのはその量です。J区の弥生前期水田では、77層でプラント・オパールが2,800個、これは1gのなかにプラント・オパールが2,800個見つかったという意味です。この層の上層のプラント・オパールの量はわずかなので、上層からの影響は考えなくてもいいと思われます。したがって、この時期にここで稲作が行われていたということがいえるかと思えます。問題は1g中2,800個という量です。実は、一つの田んぼで数十年にわたって安定した稲作が行われた場合、1gの中に大体5,000個以上が見つかるという指標があります。津島遺跡の2,800個というのはそこまで至っていないということです。しかも、このJ区で検出されたプラント・オパールの量は、津島遺跡のなかでは多いほうで、他の地区の大半はこれよりも少ない量しか検出されていません。津島遺跡の稲作の内実を示す数値といえるでしょう。

また、陸上競技場で分析した土壌は、畦畔を伴う水田層から採取したのですが、これについてもプラント・オパールの分析を行っています。分析機関によってやり方が違うので単純に比較はできませんが、こちらでは栽培種であるイネ属のプラント・オパールの出現率<sup>1)</sup>が5%以下という数値が示されています。これは、例えば稲わらを堆肥として使用した場合、約8年間耕作すると出現率が16%ぐらいになるといわれていますので、陸上競技場の水田の場合、比較的低い数値が示されたといえます。このように、津島遺跡では水田の土壌を採取し、プラント・オパール分析を依頼しますと、確かにプラント・オパールは検出されるのですが、検出される量は概

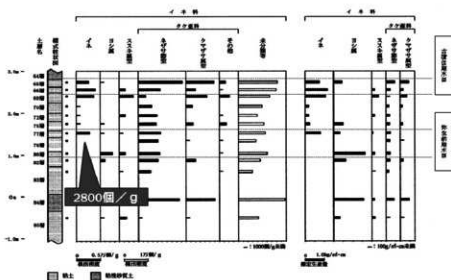


図45 イネのプラント・オパール分析

して少ないのが現状です。よって、当時の稲作は、我々が通常秋の収穫で眺めている風景とは異なったものであった可能性が考えられます。

なお、この黒色土の形成時期について、津島遺跡の調査成果から少し言及しておきたいと思います。津島遺跡の黒色土の上層には弥生時代前期前半の遺構がありますので、少なくとも弥生時代前期前半より前にこの黒色土が形成されたということが分かります。しかし、上限については考古学的にははっきりしていません。津島遺跡では弥生前期水田の黒色土から出土した炭化物の放射性炭素による年代測定を行っています。歴年代代およそB.C.1000年くらいの値が出てきています。弥生時代前期前半期はB.C.500年以前ということになるのでしょうか。したがって、津島遺跡の黒色土層は、幅がありますが、およそB.C.1000年からB.C.500年の間に形成された可能性があるといえます。

最後に、津島遺跡の弥生前期の水田稲作の特徴について簡単にまとめておきます。まず、津島遺跡の黒色土ですが、これは津島遺跡を中心に広範囲に分布していることが知られていますが、それに対して集落域はわずしか見つかっていません。続いて、近現代の水田のように床土に鉄分やマンガンの沈着があまり見られません。したがって、灌漑を整備し、水を頻繁に出し入れするようなものではなかったと考えられます。

そして、イネのプラント・オパールの分析から、単位面積におけるイネの生産量はそれほど多くなかったのではないかと思います。それは、津島遺跡の黒色土から検出されるプラント・オパールの量が総じて少ないということから推測できます。その理由として、一つの場所での稲作期間が限られていたことや、イネの生産性自体がそれほど高くなかったということなどもあげられると思います。もちろん、プラント・オパールの分析については、水田層であっても検出量が少ないところもあり、土中におけるプラント・オパールの保存環境など、今後も議論すべき点も残っています。

従来、弥生時代の稲作というのは、大陸から技術的に完成された状態で伝来し、一昔前の教科書などには一面に稲穂が実った田園風景として描かれるケースも多かったかと思います。しかし、今回ご紹介した津島遺跡の調査成果から考えますと、少なくとも、同じ場所で毎年毎年収穫を得ることができるような生産効率の高い水田ではなかったようです。おそらく複数品種が混在し、作付けと休耕を繰り返す、ある意味、焼畑的といえますが、そういった経営形態を考える必要があらうかと考えています。集落域に比較して広大な面積を必要としたのは、そのような理由も考えられるのではないのでしょうか。

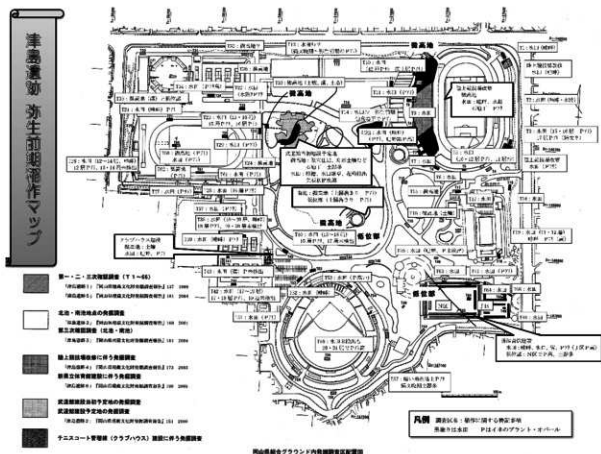


図46 津島遺跡弥生前期稲作マップ

註 1) 出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数とし、イネ属単細胞・機動細胞珪酸体の割合  
 参考文献：『津島遺跡』1~5 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137・151・160・173・181・190 岡山県教育委員会

## 2. 最古の水田？ 津島江道遺跡

岡山市教育委員会 扇崎 由

私が紹介いたします津島江道遺跡は、北区津島東の岡北中学校の校舎建設に伴い発掘調査をしたものです。今回は「最新の情報を」、ということですが、調査しましたのは、私が岡山市にはいった最初の年、かれこれ25年ほど昔の話になります。

まず校内の様子です。④の所が今日ご紹介いたします場所です。面積は300㎡ほど。ですから、津島遺跡、津島岡大遺跡、百間川遺跡群の調査事例と面積がずいぶん異なります。逆にコンパクトに絞った話と考えるといただければと思います。

写真は今日問題にします黒色土の水田が埋もれた跡です。この黒い所が今日の話題の黒色土です。この黒色土の下には黄色い土である基盤層がある。この黒色土の上を水田にしている、畔の作り方と

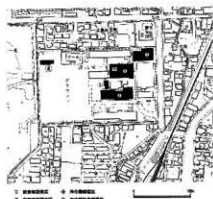


図47 調査位置図

いうのが、高い所ではまっすぐな畔の作り方ですが、黒の土がこのあたりから低くなっていきますので、たわみに合わせたような形の、地形に合わせたような畔の作り方をしています。

次に地層です。縮尺を横方向と高さで少し変えております。写真の一番下の線が黒色土の一番上側の線ですね。それにところどころ茶色く塗っている部分が畔としてわかった所。それから灰色に塗ってある部分がこのたわみを覆った洪水の砂です。洪水の砂がこのたわみの所だけ残っているのです。

写真は黒色土の上面で見つかった畔です。色の濃く見える所が黒色土、白い筋の所が畔になります。灰色で塗った部分に洪水砂が残っている。もう一度見ていただきますが、高い所から、たわみに落ちてくる、この部分に砂が残っているということです。

写真は畔、田んぼの畔の見え方です。たわみの中については津島岡大、あるいは津島遺跡の近辺とも畔の見え方といえますが、残り方が少し違います。一番下の線から下が黒色土です。蒲鉾状の所が畔の土、この上が洪水の砂です。ここが耕土。この畔自体はこの黒い土がまっぼつと混ざったり、こっちの耕土と同じような土が混ざったりしておりますので、畔の作り方自体はこの黒色土、あるいはそれを耕した土を盛りあげて畔を作ったものと理解しております。

今度の写真は線が引いてないので、わかりにくいですが、ここが畔の一番上の所です。それでこの横の所が砂ですね。このあたりが耕土になります。

次の写真も同じような黒色土です。これは畔が少し見えています。黒色土を盛りながら、あるいは耕土を盛りながら。耕土についてももう少し茶色になっている部分と、少し灰色がかり、黒色土に少し近いような部分があります。こちら側が灰色がかり、こちらが茶色、うす茶色になっている。このような見え方をしています。この耕土の色の見え方というのも、黒土を攪拌していく中での攪拌度の違い、手の入れ方の違いに起因するものかなあと思っています。

出土した土器ですが、こちらの高い所、田んぼ土の中からは弥生の前期の中ごろのもの。この灰色、砂の中からは突帯文土器とっている中の、少し新しめの一群の土器が出てきている。それから、この耕土と言っている中から出てきたのは、これよりも少し古い段階の土器、それとともに石鍬、土掘りの道具も一緒に出てきます。それで、実はこの水田になる前の黒土の層、ここからも同じように突帯文土器が出てきています。おそらくは耕土の中に入ってきた土器も、もともとこの地層にあった土器を耕作の時にかきあげていたことも十分考えられます。ですが、この洪水の砂の中から出てくる土器、少しの量ですけれども、明らかにこれよりも新しい傾向の土



図48 たわみ部の土層

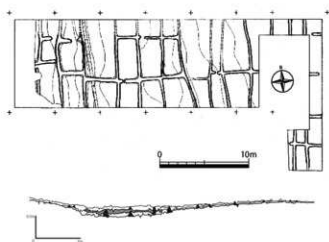


図49 G層水田平面図・土層図

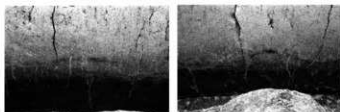


図50 あぜの土層



図51 出土土器

水田の水口に土器があるということがあれば、より限定できるかもしれません。現状としてはこの小さな面積の中で考えていく以外はないと思います。現地はまだ中学校であり、この田んぼの南側についてはグラウンドになっています。たわみ地形が南の方に続いているれば、この時期の遺構がまだ現地に残っているかと思うので、その部分については、将来的に広い面積をもって、たくさんの土器やほかの事実関係を検証しながら調査することができましたならば、この点についてもっと明らかになっていくのではないかなと思っています。

参考文献：神谷正義1992「最古の水田」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社

### 3. 移りゆく景観と謎の黒色土—津島岡大遺跡—

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 光本 順

津島岡大遺跡の様相からどのように弥生時代の水稲農耕の問題が考えられるのかについてお話ししたいと思います。津島岡大遺跡は、縄文時代の集落からその歴史がスタートします。そして水稲農耕の始まりの頃の水田が形成され、それ以降は水稲農耕をはじめとする農耕の歴史がずっと積み重なって近代にまで至る遺跡です。報告するポイントです。第一に、景観からどのように農耕の始まりが考えられるのか。特に縄文時代の景観と弥生時代の景観を比較しながら、その移り変わりの中で見えてくるものに注目したいと思います。第二に黒色土について、どのように岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは認識しているのかという点を示したいと思います。第三に、水利という点で重要になってくるのが溝の存在ですが、これについても触れたいと思います。以上をあわせて、津島岡大遺跡における景観と水稲農耕のかかわりについて考えたいと思います。

#### a. 津島岡大遺跡の地層と景観

まず津島岡大遺跡の地層をみてみたいと思います。基本的に津島岡大遺跡では、縄文時代後期の土器が出てくる黄褐色の砂質土層があり、その上に黒色土が形成されます。両者の間に、本当は縄文時代晩期の層があってもよさそうですが、晩期の土器は出土せず、層として認定されたものもありません。黒色土と、その上の色調が薄い、ねずみ色かった層において、弥生時代前期の水田が見つかっています。その後弥生時代中期・後期の砂質が強まった層が堆積します。弥生時代後期頃の水田が見つかるパターンもあります。黒色土は、古代や中世のような灰色の還元化した粘土とは明確に異なります。

次に景観の復元という観点から、水稲農耕開始期の様相を考えたいと思います。岡山大学では2000年頃以降、

器が出てきていますので、この谷部から砂に埋もれた水田というのは、突帯文の新しい土器を含む時期のもの、中で考えていいんじゃないだろうかと思っています。

この灰色の砂がない所、高かった所については、黒色土が新しい時代にも地表に出て、田んぼにされることによって弥生時代前期中ごろの土器が入ってくるわけですが、砂で覆われた部分については、その砂の下に古い地層がそのまま残される。後々の水田であるとか、人の手が加わるようなことがなく残されているということで、ごくごく限られた面積のこの部分については古い時期の水田景観をそのまま残しているのではないだろうかと考えています。

本当にこの時期の水田でいいのかということについては、たとえば、一緒に出てくるような灌漑水路であるとか、その

キャンパスの縄文・弥生時代の景観を復元しようというプロジェクトがなされており、それが総合的に明らかになりつつあります(山本・横田・岩崎2002、岩崎・山本2003、山本2004、山本・岩崎2004)。その成果をご紹介します。縄文時代後期については、キャンパス北東に居住域が形成され、その周りに川が幾重にも流れていました。川のそばに貯蔵穴が作られます。また、居住域から離れたところに灰跡や火を焚いた跡が点々とあります。キャンパスの北東には朝寝鼻貝塚があります。ですから縄文時代後期の景観というのは、川が幾重にも流れながら、居住域を中心として貯蔵がなされ、火も焚かれ、ゴミも捨てられ、というように、キャンパスが箱庭のような一つの生活空間をなしていたことがわかってきました。地形にあわせて生活空間が機能によって分節された形といえます。

弥生時代になると川が土砂で埋まってきますので、川の幅が狭く、逆に微高地の面積が広がります。川から微高地に至る緩やかな斜面が増えるという形で、地形が変化します。こうした緩斜面を中心に黒色土が分布し、水田が形成されます。縄文時代後期に顕著であった貯蔵穴は、弥生時代早期・前期には減少します。貯蔵穴の減少は、地形の変化とも、水稲農耕の始まりとも関連するものと考えます。

## b. 黒色土と畦畔

では黒色土の性格を考えてみましょう。まずどんな土か。黒褐色から暗茶褐色の砂質土で、低位部では粘性が強まります。マンガンは発達していません。黒色土の分布域は、緩斜面が中心となります。当センターでは、黒色土と低位部にある黒色をなす有機質層とは区別しています。

黒色土の上面標高は約20~34mとなります。キャンパス北東部は縄文時代以来土地の標高が高く、南に行くにつれ標高が低くなります。こうした黒色土の標高は、津島江道の黒色土のそれと合致するとともに、津島遺跡よりは全体的に高くなります。

黒色土中のイネのプラント・オパールをみてみると、1gあたり700~2,300個となり、基本的には700、1,000個前後が検出されています(表8)。これは現代の1gあたり5,000個という数値を基準にしますと、非常に低い数値です。黒色土を3層に分けて、プラント・オパールを調べた結果、上層から下層にかけてプラント・オパールの数値が低くなるような状況も認められません。したがって、黒色土中にプラント・オパールが少量ながらも一定量含まれると現在考えています。

表8 調査地点別イネのプラント・オパール密度(個/g)

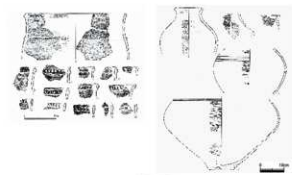
土層の時期	17・22次調査	23次調査	27次調査	28次調査	30次調査	32次調査	試験調査				立会調査 2006年度 (教育学部)
							T2	T2	T4	T6	
近代	-	-	-	-	770、10,500	-	-	-	-	6,800~8,200	10,700~13,200
近世	-	-	-	-	800~7,700 4,470~7,700	2,100、2,300 6,200	-	3,000~4,500	-	6,800~8,200 3,000~3,800	3,800~9,100 2,800~3,900
中世	-	-	5,000 3,000	10,100	6,800	-	-	-	-	-	1,900~5,100 2,100、3,900
中世or古代	2,700~4,200	-	-	-	1,700	-	-	-	-	3,000~3,800	-
古代	6,500~8,500	-	-	5,200	1,900	-	-	3,000~4,500	-	-	-
古墳時代	700~1,800 2,900	-	3,000	-	-	-	-	-	4,500~8,300	-	-
弥生時代 (中期or後期)	5,600	-	-	-	-	-	-	3,000~4,500	-	-	2,100~3,900
弥生時代中期	4,200	-	2,100、3,300、 1,400~2,100	-	2,100、 3,300	-	3,700	3,000~4,500	-	-	-
弥生時代前期	1,400~2,300	-	-	-	2,600	-	-	2,200~2,300	-	-	-
弥生時代 早期~前期 (黒色土)	700	800	700、 700~2,100	700	960 0	0	-	2,200~2,300	1,500	1,500~2,300	550 0 660
縄文時代(後期)	0	0	0	0	700	-	0	0	0	0	0

山本民世2008『津島岡内遺跡における植物性遺体分析』『岡山大学理農文化財調査研究センター紀要2006』に加盟

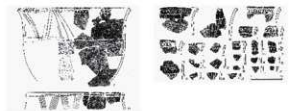
表9 津島岡大遺跡の黒色土上面の水田畦畔一覽

調査次	地点名	期町の 時期	黒色土上遺物				備考	参考文献
			早期 (尖形文)	前期土器内訳				
				前期	前期 前期	前期 前期		
2-8b	BH13R (合骨処理槽) 遺伝子実験施設	前期	○	○			「岡山大学津島岡地区遺跡群の調査Ⅱ」1986 「津島岡大遺跡5」1995	
3-15	男子学生寮 趾ペンチャー・ボックス・ラゴトラー	前期中期	○	○			「津島岡大遺跡3」1992 「津島岡大遺跡14」2004	
7	工学部情報工学科棟	前期後葉	○	○	○		「津島岡大遺跡6」1995	
9	工学部身体機能応用工学科棟	前期	○	○		前期水田2面	「津島岡大遺跡10」1998	
11	総合情報処理センター	前期後半	○	○			「津島岡大遺跡7」1996	
12	図書館	前期	○	○		前期水田2面	「津島岡大遺跡11」2003	
13	福利厚生施設南棟	前期	○	○			「津島岡大遺跡8」1997	
14	福利厚生施設南棟	前期	○	○		前期水田2面、黒色土上面遺2条	「津島岡大遺跡9」1997	
17-22	環境理工学部	前期	○	○		前期水田2面	「津島岡大遺跡16」2005	
19	コラボレーションセンター	前期	○	○			「津島岡大遺跡12」2003	
27	創立五十周年記念館	前期	○	○		前期水田2面(前期以前)	「津島岡大遺跡13」2003	
28	自然科学系総合研究棟	前期	○	○			「津島岡大遺跡18」2008	
32	教育学部創始地	前期	○	○		遺1条	「津島岡大遺跡20」2011	

土器の量 ○&gt;○



○12層の土器



○12層の土器

図52 黒色土の時期(第3次調査)

上層の黒色土である12a層には弥生前期の土器と突帯文土器が出土し、下層の黒色土である12b層には突帯文土器しかみられません。13層からは突帯文土器しか出ない。12a層の弥生土器は、前期中頃のものと考えていますが、それともう突帯文土器と13層の突帯文土器を比べると、下の方はやや古いものと考えます。この13層の土器は、突帯文土器の変遷でいえば、前池式、津島岡大式、沢田式と変わるうち、津島岡大式に近いもの

黒色土の形成要因について考えてみましょう。これまでプラント・オパール分析や花粉分析などから、黒色土は乾燥地を示すという見解が津島岡大遺跡でも出されてきました。一方で、むしろ湿潤な環境で形成された湿地状の土で、植物が分解されず積み重なった泥炭層ではないかという意見も最近、岡山大学大学院自然科学研究科の鈴木茂之先生にお聞きしました。これにつきましては、今後もう少し分析を重ねる必要がありますが、湿地状の土地に形成された土という方が妥当ではないかというイメージを持っています。

黒色土の形成時期については、遺物の出土状況というのに規定されますので、考古学的に押さえるのは難しいものがあります。図52に第3次調査(男子学生寮)の層位と出土土器の関係を示しました。この地点が、黒色土の時期を最も押さえやすいところだと考えています。トーンを貼った12a層というのが黒色土、b層も黒色土の範疇で考えています。12c層は河道の下の堆積層とらえています。

と考えます。12層の突帯文土器を沢田式の範疇でとらえるならば、黒色土の形成時期は、12層の沢田式以降、すなわち突帯文土器の最終末以降に形成されたのではないかとというのが津島岡大遺跡の状況です。ただそれが津島岡大遺跡の全部の地点にまで当てはまるかは分かりません。

さて、次に畦の話をしたいと思います。規格の小さい、数メートル四方の小さな畦が津島岡大遺跡では黒色土上面に作られています。黒色土を削りだして作られたもので、津島江遺跡のような畦を作るために土を盛ったりするような状況は津島岡大遺跡の中では確認されていません。作土・耕土も津島岡大遺跡の中では未確認です。表9は、畦を検出した地点の一覧です。畦の時期ですが、黒色土から出てくる土器が突帯文土器なのか前期の土器なのかということと、前期のいつ頃の土器なのかを検討しました。今のところ黒色土上面の畦畔の時期は、弥生時代の中頃か後葉に該当します。弥生時代前期の最初の畦畔は、確認していません。

第3次・15次調査の事例では、弥生時代前期に調査区北西に川があり、その縁の緩斜面に黒色土が堆積します。そこに蜘蛛の巣状に小区画の畦が作られます。これが津島岡大遺跡の畦畔の典型例だと思います。

### c. 溝

溝についてみてみましょう。古い時期では黒色土の形成より前の段階の突帯文土器を伴う溝が見つかってます（第23次調査：文化科学系総合研究棟）。しかしこの溝は底面に凹凸がみられ、灌漑水路と評価するのは難しいものと考えます。

弥生時代前期には、緩斜面に水田が作られ、低い部分に溝が作られた事例があります（第28次調査：自然科学系総合研究棟）。ただ、いかんせん田んぼの方が溝よりも標高が高く、水を田んぼに引くというような機能は想定しにくい。また水田と常にセットで溝が検出される話でもありません。一方で弥生時代前期には、明らかに灌漑施設と考えられるものも存在します。堰と導水路が築かれた状況がキャンパス西側（第23次調査：文化科学系総合研究棟）でみわかりました。堰を用いて、瀬と溜の水流をうまく利用しながら、導水路に水を流し込んだのではと考えています。ここでは、堰に伴って小型の壺や、徳島の石を使った石権も出土しました。本格的な水稲農耕文化といえるかと思いますが、こうした存在は津島岡大遺跡の中では非常にまれな、マイナーな存在です。堰自体が非常に簡易な、杭が一列しか打たれていない形で、その後これが継続的に使われたような修築の状況もありません。ですので、こうした灌漑施設の設置が当時新たに試みられたのは確かですが、それは一過性かつ局所的なものではないかと考えます（光本2006）。

弥生時代後期になりますと、中期までに川が埋まりますので、その埋まってできた平坦地に水路が築かれます。この時期に灌漑水路が遺跡全体に普遍化するものと考えています。

### d. 津島岡大遺跡における景観の変化と水稲農耕のはじまり

まとめますと、まず基本的に津島岡大遺跡については、自然の地形の変化に即した、ある種の身の丈にあった水稲農耕をしているのではないかとイメージが浮かび上がります（表10）。縄文時代後期以来の地形から出発しながら、河道が埋まり、緩斜面が形成されるところに黒色土が形成されます。この黒色土の形成以降に水田が営まれます。そして黒色土が見えなくなる、要するにさらに川が埋まって地形が平地化の中で灌漑水路が普

表10 津島岡大遺跡における景観の変化と水稲農耕の展開

	縄文時代後期 後葉～中葉	縄文時代後期末～ 弥生時代早期前半	弥生時代早期 後半（～津島岡式）	弥生時代早期 末葉（沢田式）	弥生時代前期 中葉～後葉	弥生時代中期 ～後期	
景観	小規模な微高地と 河道の形成	/	微高地－河道の比高縮小化 緩斜面の形成	黒色土の形成		河道の埋没	
貯蔵穴	○				△	×	
畦畔	×			×	○	○	
プラント・オーバー	×			?	700～2300	約3000～5000	
溝	×			局所的構築	?	灌漑水路・堰の局所的構築	灌漑水路の全所的構築
水稲農耕	×			×	×		○



進化していき、プラントオパールも増えてくるといえます。このように、自然景観の変化と対応した水稲農耕の導入が、津島岡大遺跡の特色と考えています。

#### 引用文献

- 岩崎志保・山本悦世2003「耕作地の問題」『津島岡大遺跡11』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp. 285-294  
 光本 順2006「環の構築・使用過程と社会関係」『津島岡大遺跡17』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp. 106-113  
 山本悦世2004「縄文時代後期の集落構造とその推移」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp. 13-20  
 山本悦世2008「津島岡大遺跡における植物珪酸体分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp. 20-23  
 山本悦世・岩崎志保2004「縄文時代から弥生時代における景観比較」『縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化』(科研報告) pp. 1-16  
 山本悦世・横田美香・岩崎志保2002「縄文時代の景観復元と生業に関する実証的研究」(科研報告)  
 図出典 図52: 山本悦世編1992『津島岡大遺跡3』より作図

## 4. 百間川遺跡群の弥生前期水田

岡山県古代吉備文化財センター 亀山 行雄

### a. はじめに

豫山の北麓を東に流れる百間川は、旭川の放水路として江戸時代につくられた人工河川です。この百間川の改修工事に伴い、岡山県教育委員会で河川敷に所在する原尾島、沢田、兼基・今谷、米田という4つの遺跡について発掘調査を実施してきました。これらは縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡ですが、とりわけ弥生時代では集落と水田が一体で見つかり、西日本を代表する弥生遺跡の一つとして知られています。調査は昭和51年から現在まで20年以上にもわたっておりまして、弥生時代の水田についてもさまざまな知見が得られているわけですが、本日は時間も限られておりますので、次の3つに絞ってお話します。1つ目は前期水田の立地と土質、特に黒色土層とのかかわりについて検討します。2つ目は井堰や水路といった灌漑施設の問題を取り上げます。そして3つ目は水田の検証に用いられるプラント・オパールという植物の細胞化石についてお話します。

### b. 水田の立地と土質

百間川遺跡群では、原尾島、沢田、兼基・今谷の3遺跡で弥生時代前期の水田が見つかっています(図53)。沢田遺跡の前期水田は、微高地を帯状に走る幅30mほどの窪地を利用して開かれています。水田の区画は大きいもので一辺が10mほどありますが、3m四方の小さなものも見られます。また原尾島遺跡では、微高地の斜面に水田が開かれていて、微高地上には水田と平行して走る水路が見つかっています。水田の区画は長方形をしているようですが、総じて遺存が悪く明確ではありません。津島遺跡などでもそうですが、前期の水田は地形の傾斜と直交する方向に細長い区画を連ねていて、より少ない労働力で傾斜地に水田を開いていく工夫と考えられます。百間川遺跡群の前期水田は海拔2mほどの高さにあつて、微高地との比高はわずかであり、地下水位もさほど高くない環境が想定されます。

次に、水田の土質について見ていきます。百間川遺跡群では、弥生時代末の洪水がもたらした砂が広く堆積しています。厚いところでは70cmにもなりますが、これを取り除くと灰色をした後期の水田層が現れます。その下には弥生時代中期の水田となる灰黄色の粘土層がありまして、一番下に弥生前期の水田層である黒色土が広がっています。津島遺跡周辺の黒色土層に比べて色調はいく分か明るく暗褐色を呈していますが、この層の下面には植物による土壌化の痕跡と思われる凹凸が見られます。つまり、黒色土は水成堆積によるものではなく、植物が

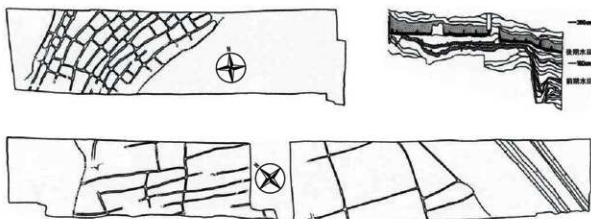


図53 百間川沢田遺跡（平井ほか1993）と百間川原尾島遺跡（宇垣ほか1994）の前期水田

生成した腐植土がもともとなっていることを示しています。図54にはこの黒色土の見つかっている地点を●で示しておりますが、津島遺跡や津島江道遺跡、津島岡大遺跡、北方遺跡群、伊福定国前遺跡といった半田山と京山に挟まれた一帯と、藤原光町の原尾島遺跡や百間川の原尾島、沢田遺跡など操山から北に張り出した三角形の範囲で、いずれも旭川の川筋から離れた安定した場所にあたります。

それでは、この黒色土層はいつごろ形成されたのかということですが、岡山工業高校のすぐ北側にある伊福定国前遺跡では弥生時代中期の水田や水路に削り残された場所でこの黒色土層が遺存しているのを確認しました。この黒色土層の下に堆積している粘土層中の植物遺体について年代測定を行なったところ、3870±30年BPという値が得られました。津島江道遺跡ではこの黒色土層の上に弥生時代早期の水田が営まれているということですので、その形成時期は縄文時代後期と弥生時代早期の間、およそ縄文時代晩期と推定できます。この時期には気候が一時的に寒冷化し、「弥生小海退」と呼ばれている現象が起こっていて、岡山大学の鈴木茂之先生によりますと、このあたりでは海水面が3mほど下がったと推定されています。海水面が下がりますと河川では浸食が進んで川床が低くなりますから、河川の氾濫等による土砂の堆積量は大幅に減少したものと考えられます。その結果、安定化した土地では植物が繁茂して分厚い腐植土層が形成された、それがおそらくこの黒色土層の正体なのだろうと考えます。ちなみに、鈴木先生が弥生小海退の証拠としてあげられた黒色土層（泥炭層）は中山下の海拔0.7m（2790±110年BP）、土田の海拔1.8m（2670±70年BP）で確認されていますが（図54■）、これは津島岡大遺跡の海拔2m～3.4m、津島遺跡の海拔1.7～2m、伊福定国前遺跡の海拔1.5mという高度と整合する値だと思います。

黒色土層の広がりをもって当時の生産域を推定するような考えもありましたが、実際には当時の一般的な地表面であって、人間の活動とは関わりなく岡山平野の北半に広く遺存しているものと思われます。

#### c. 水路と井堰

次に、灌漑施設の問題に移っていきます。津島遺跡（陸上競技場）の前期水田では微高地から延びてきた水路が水田の中を鏡形に走る様子がとらえられています。このように水田を走る水路は北方遺跡群でも多数検出されています。また、津島遺跡や北方遺跡群では小区画の水田を南北に仕切る大き



図54 黒色土層の広がり  
（藤原・白神1986に加筆）

な畦も見つっています。普通の畦は幅30cm、高さ10cmくらいのものですが、この畦は幅1m、高さ50cmもあります。水田への配水や通路として機能するこのような大畦が、すでに前期の段階で存在している点は注目されます。百間川遺跡群でも先ほど御紹介しましたとおり前期の水路がいくつか見つっていますが、水田との接続が明らかになった例はありません。葦基・今谷遺跡では近くの川から直接水を引こんでいたようで、立地にあわせてさまざまな灌漑方法がとられていたようです。このほか、津高にある岡山医療センターの建設に伴って調査をした田益田中遺跡では幅5mもの水路が見つっています。上流の田益新田遺跡から続いているとしますと、その延長は1km近くにもなります。水田は見つかりませんが、水路の埋土から多量のプラント・オパールが検出されていることからすると、その周辺で稲作が行われていたことはほぼ確かなようです。

この遺跡ではまた、川の中から前期の井堰が見つっています。川底にたくさんの杭を斜めに打ち込み、横木を架け渡した構造です。その上流では後期の井堰も見つっていますが、近くに住居跡が見つっていることからすると生活用水を確保するための施設であったのかも知れません。百間川原尾島遺跡では水路の幅を決めるように杭を打ち込んだ中期の遺構が見つっていますが、これとよく似た状況は雄町遺跡でも確認されています。徳島県の菅原康夫さんは角落とし堰と評価されていますが、これについては異論も出されています。

このように、前期水田ではすでに周到な水配りが計画されていて、その水を導くための堰や水路を設ける技術も備わっていたということ、これまでの話して御理解いただけたかと思います。

#### d. プラント・オパール分析の解釈

禾本科植物の細胞にはガラスの主成分である珪酸が含まれているため、その細胞化石は長期にわたって土壌中に遺存します。プラント・オパールと呼ばれるこの細胞化石は植物の種類や部位によって形が異なっていますので、それをもとにイネの細胞化石を探していけば、そこで稲作が行なわれていたかどうかの手掛かりになるわけです。

昨年、百間川原尾島遺跡で洪水により埋もれた弥生時代後期の水田を調査しましたが、洪水が運んだ砂を取り除けて水田面を精査していくと、砂が詰まった直径5～6cmくらいの小さな窪みがたくさん見つかったのです。



図55 百間川原尾島遺跡の稲株痕跡（正岡ほか1984）とその成因（矢田1995）

実はこれと同じものが昭和56年にも見つかり、洪水で埋もれた稲株の痕跡ではないかと話題になりました（図55）。この時の調査では、この窪みが7つの列をなして規則正しく並んでいることから、田植えが行なわれた証拠とされたのです。しかしながら、この窪みが本当に稲株の痕跡なのかという科学的検証は現在に至るまでなされていません。

そこで今回、なんとかその性格を知る手掛かりを得たいということで分析方法をいろいろ検討しておりましたところ、岡山市教育委員会の根本さんから稲株痕跡とされる窪みとその周辺の土壌とでイネのプラント・オパールの量を比較してみてもどうかというアドバイスをいただきましたので、早速試料を採取して分析を依頼しました。すると、プラント・オパールが全く見つからないんですね、イネだけではなくそのほかの植物も。分析機関の方の話によると、砂層中のプラント・オパールというのは花粉と同様に分解消失してしまうらしいのです。つまり、洪水で運ばれた砂泥によって埋もれたことにより、稲株痕跡というごくまれな遺構が形成されたのですが、その一方でプラント・オパールの分解消失を促進

することになったわけで、何とも残念な結果に終わりました。

しかし、プラント・オパールが見つからないから全く意味がないかというと、そういうわけでもありません。皇學館大学の外山修一さんは、プラント・オパールが残らない環境は河川の氾濫がたびたび引き起こされるような不安定な環境にあったことを示すものとして積極的に評価されています。

#### e. 弥生前期の稲作

ノートダム清心女子大学にいらっしゃった高橋護先生は、弥生時代前期の小区画水田を雨水のみに頼る天水田か畑と理解されました。その根拠として、プラント・オパールの分析結果から高燥な環境と推定されること、水田に特徴的な還元脱色が見られないことを上げておられます。最近出された報告書の中にはこの考えを踏まえた論考がいくつか見受けられますが、果たしてそれは妥当なのかどうか、最後に検討したいと思います。

まず前期水田の環境についてですが、先ほど説明しましたとおり、黒色土層というのは縄文時代晩期に形成された腐植土に起因するもので、高い場所では高燥な環境に生育するネゼサ、低い場所では湿潤な環境を好むヨシなどのプラント・オパールが検出されます。しかし、弥生時代前期の環境が縄文時代晩期と同様であったかどうかは明らかではありません。確かに前期の水田層からはネゼサのプラント・オパールが見つかりますが、それは基盤となる黒色土層から供給された可能性があるからです。

次に前期水田の土壌構造ですが、耕作土については前期のみならず中期や後期の水田においてもその識別が困難な場合があります。また、津島江道遺跡では耕作土に脱色が認められたということですが、やはり場所によって現れ方に差があるようで、どうやら水田が置かれたその後の堆積環境によって大きな違いが出ているのではないかと考えています。

またプラント・オパールの問題ですが、先ほど金田さんの話しにありました稲作の判断基準とされる土壌1gあたり5,000個という値は、現代の水田土壌をもとに設定されたものです。確かに、現代よりも生産性が低い弥生時代の土壌から5,000個以上のイネのプラント・オパールが見つければ稲作が行われていたと推定してよいと思います。しかし、津島遺跡の前期水田で検出された2,500~3,000個というプラント・オパールの量が少ないと言えるのかどうか、弥生時代の平均値が分からないわけですから判断できません。まして、堆積後に分解消失した可能性も考慮すれば、プラント・オパールの量をもって水田の生産性や耕作期間を推定することはほとんど不可能に近いのではないのでしょうか。

それからイネの品種についてですが、津島遺跡では熱帯ジャポニカという畑で作るようなイネのDNAが検出されたということです。そうすると、熱帯ジャポニカを使って畑作のような栽培を行っていた前期から、温帯ジャポニカを水田栽培する後期へと移り変わっていったとも考えられます。しかし、熱帯ジャポニカのDNAが見つかったのは後期の遺構で、すでに灌漑施設を伴った水田経営が展開されている段階ですから、稲作技術の発展とともに品種が転換したというわけでもなさそうです。

ところで津島遺跡周辺では、集落規模に比べていそう広域に前期水田が展開していることから、作付けと休耕を繰り返しながら耕作地を移していったのではないかと指摘があります。休耕によって生産力の回復を図るといった高度な農法は漢代の農書にすでに見えるそうです。しかし、それが日本に伝わったのは弥生時代中期の段階で、瀬戸内から近畿地方に伝わったのは後期の頃ではないか、といったことを町田章先生が木製農具の研究をもとに推定されています。そうでなくとも稲作が伝わったばかりの段階において、貴重な労働力を投下して作った水田を一時的にせよ放棄するというようなことがあり得たのかどうか、私はいささか疑問に思っています。

以上、いろいろと話してきましたが、堰や水路といった水稲農耕の技術はすでに前期の段階で伝わっています。津島岡大遺跡では灌漑施設を伴わない原始的な水田経営のようにも見受けられますが、それは水を得やすい環境によるもので、百間川遺跡群や田益中遺跡のように河道から離れた場所では灌漑施設を積極的に設けています。

初期の稲作というのは、そうした立地条件に見合った水田経営がなされていたのだろうということで私の話を終わらせていただきます。

#### 図出典

- 平井 勝ほか1993 「百問川沢田遺跡」3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 岡山県教育委員会  
宇垣匡雅ほか1994 「百問川原尾島遺跡」3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 岡山県教育委員会  
藤原健蔵・白神 宏1986 「岡山平野中部の沖積層と海水準変化」昭和58・59・60年度科学研究費補助金研究成果報告書  
正岡睦夫ほか1984 「百問川原尾島遺跡」2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 岡山県教育委員会  
矢田 勝1995 「中世後期の田植え跡について」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 付編2

### 1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

#### (1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

〔平成16年4月1日〕  
岡大規程第93号

##### (趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理學則（平成16年岡大則第1号。以下「管理學則」という。）第26条の規定に基づき、管理學則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

##### (目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

##### (自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外者による検証を受けることを原則とする。

##### (教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

##### (センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第3号）第5条第1項第5号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

##### (副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の職務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

##### (調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

##### (調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

##### (管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

(運営委員会)

第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(雑則)

第12条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

(2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

〔平成16年4月1日〕  
〔学 長 裁 定〕

(趣旨)

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長
- 三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名
- 四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人
- 五 センターの調査研究室長
- 六 施設企画部長

2 前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(事務)

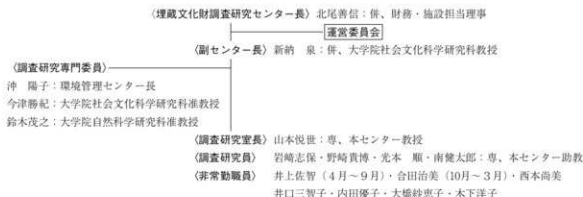
第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

## 2. 2011年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

### (1) センター組織



### (2) 運営委員会

#### 【委員】

北尾善信	財務・施設担当理事 (センター長)	大塚愛二	大学院医歯薬学総合研究科教授
新納 泉	大学院社会文化科学研究科教授 (副センター長)	沖 陽子	大学院環境学研究所教授・環境管理センター長 (調査研究専門委員)
久野修義	大学院社会文化科学研究科教授	山本悦世	埋蔵文化財調査研究センター教授 (調査研究室長)
柴田次夫	大学院自然科学研究科教授	秋山明寛	施設企画部長

#### 【2011年度協議・報告事項】

第71回2011年9月2日	議 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成22年度決算について</li> <li>・平成23年度予算 (案) について</li> <li>・発掘調査について</li> <li>・第13回岡山大学キャンパス発掘成果展について</li> <li>・教員人事について</li> </ul>
第72回2011年11月28日	協議事項	埋蔵文化財調査研究センター助教再任について
第73回2012年3月1日	協議事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成24年度予算 (案) について</li> <li>・平成24年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について</li> </ul>
	報告事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発掘調査について</li> <li>・シンポジウム「水稲農耕のはじまりを考える－岡山平野の水田研究－」について</li> </ul>

## 3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

### 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年5月15日  
埋蔵文化財調査研究センター長  
施設部長

#### I. 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。



3. 工所用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

## II. 発掘現場で注意すべき事項

### 1. 服装・装備・用具等

- 1) 安全で機能的な服装にする。
- 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
- 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
- 4) グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
- 5) スコップ・草削りなどの用具は、危険がないよう使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。

### 2. 掘削

#### 1) のり面の角度

造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。  
 堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。  
 発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。

#### 2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。

#### 3) 深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。

### 3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業

- 1) 作業中には安全帯を使用する。
- 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
- 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。

### 4. 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベアー・ポンプ等）

- 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工所用電力の保安責任者が安全確認を行う。
- 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
- 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないように措置をする。
- 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
- 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

（重機関係）

- 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
- 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
- 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。

### 5. 健康管理

- 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

## III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

## 付 表

表11 1982年度以前の構内主要調査 (1980～1982年度)

年度	地区名	種別	工事名：調査名称	調査組織	調査面積 (㎡)	文献	備 考
1980	鹿田	立会	薬学部附属病院棟新営	岡山山教育委員会	8		
	津島	BD36	* 薬学部寄附倉庫新営	*			
		*	* 文法館 合葬処理棟施設	*			
		*	* 文法館 合葬処理棟施設	*			
		BD09, BC09～11	* 基幹整備 (共同課取付)	*			
1981	鹿田	BD～BE04～07	* 路上舗装改修 (配水管施設)	*			
		*	* (医病) 高気圧治療室新営	*			
		*	* (医病) 動物実験棟新営	岡山山教育委員会			大学が由教委への確認調査依頼をせずに個別。その後、岡山山・津島地区が現在構内の調査を実施
		*	* (医病) 理解部体験型処理保管庫新営	岡山山教育委員会			
	*	*	* 医学部運動場改修	*			
1982	津島	AV06-10, AW05-14, AX08, BD07, BE10	試験 排水基幹整備	*			津島AW14区で発生時代包含層層、発掘→津島岡大遺跡第1次調査へ
		AW14	発掘 文法館 排水集中槽 (NP-1) 建設	岡山大学	21.0	3	【小橋法員遺跡】と報告
		*	試験 武退屈新営	岡山山教育委員会	2.3		
		AY15-16	* 法経 校舎新営	*	7.0		
	鹿田	*	* 医学部本部保存庫新営	岡山山教育委員会	8.0		
		*	* (医病) 外来診療棟新営	岡山山教育委員会	4.0	2	
		*	立会 医学部動物実験施設関連排水管・ガス管理施設	岡山山教育委員会		1	
		*	AE～ANZE, AE22～26	* 薬学部電話ケーブル施設	岡山山教育委員会 岡山大学理蔵文化財調査室		

文献

1. 光永真一 1983 『岡山大学医学部附属病院敷設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査』岡山山遺跡文化財報告13 岡山山教育委員会  
 2. 河本 清 1983 『岡山大学医学部附属病院外来診療棟改修に伴う確認調査』岡山山遺跡文化財報告13 岡山山教育委員会  
 3. 吉原賢敏 1985 『岡山大学津島地区小橋法員遺跡 (AW14区) の発掘調査』岡山山遺跡発掘調査報告第1集 岡山大学理蔵文化財調査室

表12 2010年度以前の構内主要調査 (1983～2010年度)

凡例	<ul style="list-style-type: none"> <li>総合番号：調査地区別通し番号 (立会調査は連席IDに保存)</li> <li>津島岡大遺跡第1次調査は本機関設置以前の調査であることから、総合番号を※1として区別している。</li> <li>試験確認調査のうち、その後の発掘調査範囲内に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には総合番号に ( ) を付している。</li> <li>立会調査で、付表に保存する基準：①中世土層以下を確認した調査 ②明確な遺構・遺物を確認した調査</li> <li>番号：年度別報告番号</li> <li>文献：表14-15の番号に対応する。正式報告が刊行された場合は、年報・紀要掲載の掲載文献は削除している。</li> </ul>						
※1	1982	津島岡大遺跡第1次調査	AW14	10.28～11.24	24	発生中期～古代：漢、【小橋法員遺跡】と報告	3
	1983	津島岡大遺跡第2次調査	BE14-18, BF17-18 EG14 EH14-15	8.1.9～3.5	265	発生早～前期：遺物	4
	1983	津島岡大遺跡第2次調査	EH13	11.14～11.22 8.4.19～3.5	276	発生前期～水田開墾遺構 (遺物)	4
	1986 1987	津島岡大遺跡第3次調査	AV00, AW00-01	12.1～87.6.18 8.24～9.5	1550	縄文後期河内、発生早期：貯蔵穴群・河内、発生前期～近代：水田・漢、古代集里開墾遺構	19
	1986	津島岡大遺跡第4次調査	BF-EG09	87.1.19～1.22	70	発生前期漢、中世河内	6
	1988	津島岡大遺跡第5次調査	AV06～08 AZ06-07	6.27～89.3.19	1537	縄文後期～発生早期：貯蔵穴群・河内、発生時代末～近世：水田開墾遺構	27
	1988	津島岡大遺跡第6次調査	AV-AW04-05	9.20～89.3.31	600	縄文後期：貯蔵穴群・河内、古代集里開墾遺構、発生前期～近代：水田・漢	35
	1988	津島岡大遺跡第7次調査	AV-AW05-06	10.12～89.3.31	800	縄文後期：中・ピット、発生前期～近世：水田・漢	35

表12-(1) 発掘調査

&lt;津島地区：津島岡大遺跡&gt;

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積 (㎡)	概要 (主要遺構)	文献
※1	1982		津島岡大遺跡第1次調査	AW14	10.28～11.24	24	発生中期～古代：漢、【小橋法員遺跡】と報告	3
	1983		津島岡大遺跡第2次調査	BE14-18, BF17-18 EG14 EH14-15	8.1.9～3.5	265	発生早～前期：遺物	4
	1983		津島岡大遺跡第2次調査	EH13	11.14～11.22 8.4.19～3.5	276	発生前期～水田開墾遺構 (遺物)	4
	1986 1987		津島岡大遺跡第3次調査	AV00, AW00-01	12.1～87.6.18 8.24～9.5	1550	縄文後期河内、発生早期：貯蔵穴群・河内、発生前期～近代：水田・漢、古代集里開墾遺構	19
	1986		津島岡大遺跡第4次調査	BF-EG09	87.1.19～1.22	70	発生前期漢、中世河内	6
	1988		津島岡大遺跡第5次調査	AV06～08 AZ06-07	6.27～89.3.19	1537	縄文後期～発生早期：貯蔵穴群・河内、発生時代末～近世：水田開墾遺構	27
	1988		津島岡大遺跡第6次調査	AV-AW04-05	9.20～89.3.31	600	縄文後期：貯蔵穴群・河内、古代集里開墾遺構、発生前期～近代：水田・漢	35
	1988		津島岡大遺跡第7次調査	AV-AW05-06	10.12～89.3.31	800	縄文後期：中・ピット、発生前期～近世：水田・漢	35

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	横内座標	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	概要(主要遺構他)	支那
39	1990	1	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究所棟共同掘-排水施設	AY-AZ08	4.3-4.21	90	古墳後期溝	27
44	1991	2	津島岡大遺跡第6次調査 (A地点) ：東北女子短期大学新嘗	BD18-19	7.23-12.25	690	縄文時代土坑、弥生時代-近世：溝群	32
45	1991	3	津島岡大遺跡第6次調査 (B地点) ：小倉処理場新嘗	BH13	7.23-12.2	140	弥生時代溝、古代-近世：水田	32
50	1992	1	津島岡大遺跡第9次調査 ：学生機動応用工学科棟新嘗	AU-AW04	7.1-9.01.29	690	縄文後期-野穴穴群・土坑・溝・火竈、弥生時代-近世：水田・田間遺構	47
51	1992	2	津島岡大遺跡第10次調査 ：総合情報処理センター新嘗	BB-BC10-11	9.21-3.31 4.17-7.31	400	弥生後期土坑群、古墳時代：井戸・住居・印、古代特穴群、中世溝、近世耕作間道遺構	64
54	1993	2	津島岡大遺跡第11次調査 ：総合情報処理センター新嘗	AV-AW11-12	9.14-9.41.11	640	縄文後期：ビツト、弥生前期水田開墾跡	36
55	1993	3	津島岡大遺跡第12次調査 ：図書館新嘗	AV-AW13-14	9.4.29-3.31 4.1-11.30	1472	弥生前期水田、弥生中期-古墳時代：溝群、古代-近世：集居間道溝	64
64	1994	2	津島岡大遺跡第13次調査 ：福利厚生施設(念棟)新嘗	AW-AX11-12	10.6-11.30 9.5.10-10.4	816	縄文後期ビツト、弥生水田、弥生-古墳時代：溝群	41
69	1995	2	津島岡大遺跡第14次調査 ：福利厚生施設(南棟)新嘗	BB-BC12-13	10.25-9.6.14	896	弥生前期水田、弥生-古墳時代：溝群	46
70	1996	1	津島岡大遺跡第15次調査 ：サウライトベンチャーレジビネスラボラトリ新嘗	AW00-01	9.6.1.16-4.25	1600	縄文後期-弥生早期：野穴穴群-河沿、縄文後期：ビツト群、石材ヤブ・火竈、弥生前期水田、古墳-中世：水田・溝	72
74	1996	2	津島岡大遺跡第16次調査 ：動物実験棟新嘗	BD19-20	5.7-15	30.3	A地点：縄文時代・古墳時代：土坑 B地点：中世溝、古代特穴群、弥生時代水田	44
75	1996	3	津島岡大遺跡第17次調査 ：環境理工学部校舎(1期)新嘗	AW02-04	5.21-9.7.19	1451	縄文後期：住居・土坑・溝、弥生前期：水田、弥生時代溝群、古墳後期柱列河、古代水田、中世築群作痕	77
85	1998	2	津島岡大遺跡第18次調査 ：環境施設(南)ボンプ増設	BH11	4.7-4.10	16	古代溝状遺構	53
86	1998	3	津島岡大遺跡第19次調査 ：コアコレクションセンター新嘗	AZ09-10	7.27-9.9.21.8	1019	縄文後期：ビツト・印、弥生前期：水田・土坑・河沿、古墳時代-中世・溝、近世：道路状遺構・溝	65
87	1998	5	津島岡大遺跡第20次調査 ：環境理工学部校舎ボンプ増設	AY07	10.19-28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
88	1998	6	津島岡大遺跡第21次調査 ：工学部エレベーター設置	AX09	11.6-24	30.2	縄文時期土坑、弥生早期-前期：溝、古代：土坑・溝	65
89	1998	8	津島岡大遺跡第22次調査 ：環境理工学部校舎(2期)新嘗	AW02-03	9.9.3.1-7.12	77.35	縄文後期-弥生早期：河沿、弥生早期土坑、弥生前期水田、弥生中期溝、古墳-近世：集居間道溝・水田	77
109	1999	5	津島岡大遺跡第23次調査 ：総合研究棟新嘗	AZ15-BA14	0.0.2.3-7.28	1309	縄文後期-弥生前期間道、縄文後期柱列河、弥生早期-前期溝、弥生前期溝、弥生前期-近世：溝	80
111	2000	3	津島岡大遺跡第24次調査 ：総合研究棟西り面下建設	AZ14	12.5-14	34.2	縄文後期：河沿-坑河	80
112	2000	4	津島岡大遺跡第25次調査 ：排水施設設置	BA15	01.1.29-31	20	中世-近世：溝	61
113	2000	5	津島岡大遺跡第26次調査 ：事務機械新嘗	BC-BD14-15	01.3.26-9.30	1590	縄文・中期：土坑・印、弥生早期野穴穴群、弥生前期土坑、弥生後期溝、古墳後期-中世：櫛列-道路状遺構、近世-溝-塚	76
121	2001	2	津島岡大遺跡第27次調査 ：創立五十周年記念会館新嘗	BB-BC14-15	02.2.1-6.24	1648	縄文後期印、弥生-古墳時代：溝群、中世櫛列(条田間道)	68
127	2002	2	津島岡大遺跡第28次調査 ：自然科学系総合研究棟新嘗	AW-AY06-08	4.30-9.20, 11.28-03.11.15	1798	弥生前期水田、弥生前期-中期：溝、古代：溝(内土柱穴群)、中世間道遺構	87
128	2002	4	津島岡大遺跡第29次調査 ：共同溝設置	BF16	9.18-10.3	62.6	弥生-古墳時代：溝-ビツト	71
163	2007	1	津島岡大遺跡第30次調査 ：岡山大学インキュベーター新嘗	BC19-20	8.1-12.17	1035.4	縄文後期-弥生早期：土坑群、弥生-古墳時代：溝群、古代道路状遺構、中世穴：土坑群・明野・溝群	95
168	2008	1	津島岡大遺跡第31次調査 ：大学生協東福施設新嘗	AX04	6.17-8.22	212	弥生前期明野、古代道路状遺構	90
184	2009	1	津島岡大遺跡第32次調査 ：教育学部志道場新嘗	AX02	7.16-10.13	383	縄文後期野穴穴群、弥生前期明野、弥生前-中期-中世穴：溝	100
196	2010	1	津島岡大遺跡第33次発掘調査 ：教育学部福義棟新嘗	BH17-18、BC17-18	7.16-11.11	972.2	縄文・中期：ビツト、弥生時代：土坑・溝、古墳時代後期-古代代柱建物、古代：土坑・道路状遺構	105
197	2010	2	津島岡大遺跡第34次発掘調査 ：総合交流会館新嘗	AU-AY13-14	7.30-9.28	1590	弥生前期：明野・溝、近世土坑群、平面調査B中世上面まで実施し、本層位は保存	105

## &lt;鹿田地区：鹿田遺跡&gt;

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	横内座標	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	概要(主要遺構他)	支那
1	1983	-	鹿田遺跡第1次調査 ：鹿田遺跡新嘗	AU-BD28-40	7.27-11.22 8.4.1.9-8.31	2188	弥生時代中期後半-中世の集落遺構群	7
2	1983	-	鹿田遺跡第2次調査 ：NMR-CT室新嘗	BG-BG18-21	8.1-12.30	176	弥生時代後期-中世の集落遺構群	7

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	概要（主要遺構等）	文献
10	1986	1	鹿田遺跡第3次調査 ：医療技術短期大学校舎	CN-C127-28、 C7-CV19-27、 CX-DD16-25、 DD-DG22-23	6.2-11.29	2300	中世の集落遺構群、古代の橋脚・河道	10
12	1987	3	鹿田遺跡第4次調査 ：医療技術短期大学の配管敷設	DD-DF25 DG-DG27-28	11.2-11.21	30	古代の河道	10
13	1987	2	鹿田遺跡第5次調査 ：管理棟新嘗	BB-BB35-42	106-88.32 88.323-3.31	1192	弥生時代中期後半～中世の集落遺構群	24
16	1990 1991	1	鹿田遺跡第6次調査 ：アイトープ総合センター新嘗	BW-CC67-71	11.30-91.6.30	600	古墳時代初期土坑、中世集落遺構群	40
25	1997 1998	1	鹿田遺跡第7次調査 ：基礎医学棟新嘗	B855-BX61 BY36-57	98.2.27-8.6	829	古墳時代初期・中世の集落遺構群、近世の水田・溝	85
27	1998	4	鹿田遺跡第8次調査 ：沼西衛生新嘗	BP-BS30-32	7.28-9.1	165	古墳時代と中世の溝群	85
28	1998	7	鹿田遺跡第9次調査 ：病棟新嘗	CD33-37、 CE-CF28-37、 CG-CJ30-37、 CK-CL25-37	11.27-99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中・近世集落遺構群	33
31	1999	3	鹿田遺跡第10次調査 ：共同浴設置関連	CD-CE10-12 DD-DF16-22	5.7-10.14	2441	古代の枕列、弥生時代ピット、近世溝	56
32	1999	4	鹿田遺跡第11次調査 ：病棟新嘗	CD-CM19-42	8.19-12.22	2020	弥生時代水田畔畔、古代の陥没遺構、中・近世集落遺構群	56
40	2000 2001	2	鹿田遺跡第12次調査 ：エネルギーセンター新嘗	CO-CV35-44 CN-CM28-43 CN28-38	10.2-01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代溝・土塁跡まり、中世集落遺構群、近世土坑・溝	56 61
46	2002	3	鹿田遺跡第13次調査 ：総合教育研究棟新嘗	BL-BR46-51	4.30-10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土塁跡まり・溝、中世集落遺構群、近世土坑群	98
50	2003	1	鹿田遺跡第14次調査 ：病棟（B期）新嘗	CD-CM12-20	7.31-12.17	1331	近世～近代の畦畔・溝・溝、中世の集落遺構群、近世のため・土坑	71
56	2003	2	鹿田遺跡第15次調査 ：総合教育研究棟外構	BQ-BQ45-46	10.16-10.29	30.4	古墳時代初期の井戸・溝	98
59	2004	1	鹿田遺跡第16次調査 ：立派車庫新嘗	AH-AH-7 AF12-13、 AN-AG4	10.21-11.8	49.15	近世～近代の畦畔・溝・土坑、中世の土坑、弥生～古墳時代の河道	81
60	2006	1	鹿田遺跡第17次調査 ：総合研究棟（化学系）新嘗	BR-BY60-64	7.10-11.14	642	古墳時代～中世の集落遺構群、近世土坑・溝	88
64	2007	1a	鹿田遺跡第18次調査 ：中央診療棟新嘗	BT13-BY20	10.10-08.3.14	87.22	弥生時代後期～近世の集落遺構群	92
65	2007	1b	鹿田遺跡第18次調査 ：防火水栓設置	CG-CB9-10	10.16-11.1	43.2	古代後半の井戸、近世入江状溝溝・溝群施設	92
66	2007	1c	鹿田遺跡第18次調査 ：用水路改修	CM-CM9-10 CO10-11	12.27-08.1.16	56	弥生時代土坑・溝	92
76	2008	1	鹿田遺跡第19次調査 ：薬学部蔵り廊下設置	AW-AY22-23	6.26-9.12	80	弥生時代後期の「方彩高まり」・貝塚・竪坑・土坑・溝、古墳時代土坑・溝、古代ピット、近世土坑	95
80	2009	1a	鹿田遺跡第20次調査A地点 ：中央診療棟共同浴設置	BZ-CC31-40	6.18-7.31 8.5-24	632	弥生時代～近世の遺構・遺物	102
81	2009	1b	鹿田遺跡第20次調査B地点 ：中央診療棟新嘗（本体工事）	BS20-23 BT-BW20-24 BX-CDL3-25	10.15-11.22 3.1-8	2482	弥生時代～近世の遺構・遺物	102
84	2010	1	鹿田遺跡第20次調査C地点 ：中央診療棟新嘗	BR-BS12-21 BT-BX12-13	7.20-10.8	226	弥生時代～近世の遺構・遺物	105
85	2010	2	鹿田遺跡第20次調査D地点 ：中央診療棟新嘗	BT-BU24	2011.2.18-3.2	15	中世～近世の遺構・遺物	105
86	2010	3.1	鹿田遺跡第21次調査A地点 ：外室棟周辺地盤調整	AD-AF30-33		21.2	平安時代河道、鎌倉時代溝・溝群	105
87	2010	3.2	鹿田遺跡第21次調査B地点 ：外室棟周辺地盤調整	AG-AH30-31	11.18-12.9	22	平安時代河道、鎌倉時代溝・溝群	105
88	2010	3.4	鹿田遺跡第21次調査D地点 ：外室棟周辺地盤調整	AS-AT25-28		59.4	弥生時代瓦合層	105

## ＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	概要（主要遺構等）	文献
1	1997	1-2	福呂遺跡第1次調査 ：実験研究棟新嘗	-	97.5.10-30 7.28-31	309	縄文時代早期・弥生時代中期・中世・近世の集落	55
2	1997	3	福呂遺跡第2次調査 ：実験研究棟新嘗に伴うスロープ設置	-	97.11.25-12.5	130	近世・中世・古代の集落	55

表12-(2) 試掘・確認調査

## &lt;津島地区：津島岡大遺跡&gt;

総合番号	年度	番号	調査対象地名 概	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文獻
							TP数	内容・その他の対応	
33	1983	-	農学部合併処理槽予定地	BH13	25	-	1	→津島岡大第2次調査：1983年度	1
4	1983	-	農学部排水管中間ポンプ槽予定地	BF17	35	-	1	→工事立会	
5	1983	-	農学部排水管理施設予定地	BE-BE14, BE-BH15, BE18, BF16-18, BC18	20	-	29	→津島岡大第2次調査：1983年度	
6	1983	-	農学部農産倉庫棟予定地	BF22-23	2.0-3.0	0.6	2	土留計→1987年度工事立会	
(7)	1983	-	大学事務局棟予定地	BC-BD15	2.0-3.0	0.9	3	→津島岡大第26次調査：2000年度	
(8)	1983	-	保健管理センター予定地	BE10	2.0-3.0	0.8	1	→津島岡大第10次調査：1999年度	
9	1983	-	津島総合予定地	BE16	0.9	0.9	2	土留計→1987年度工事立会	
10	1983	-	工学部校舎新設予定地	AW05	3.0	1	1	土留計	
12	1985	1	教養講義棟予定地	BE08	35	12	2	遺構など未確認→1986年度工事立会	
13	1985	2	教育研究棟予定地	AX02	2.6-3.4	12	3	縄文・弥生・中世土器出土	
14	1985	3	男子学生寮予定地	AV-AW99-01	2.0-3.0	1	12	→津島岡大第3次調査：1986年度	6
(17)	1986	3	屋内運動場予定地	BF-BG09	2.4, 1.2-1.7	11	3	→津島岡大第4次調査：1986年度	
(18)	1986	4	大学院自然科学研究科棟予定地	AV-AZ07	1.6-3.2	0.6-0.8	3	→津島岡大第5次調査：1988年度	
22	1987	4	外国人館舎予定地	AP02	2.2-2.8	-	2	縄文時代・弥生時代・近世の遺構目録	
(23)	1987	5	総合情報処理センター予定地	AV11	2.0-3.0	2	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	8
24	1987	6	理学部身体障害者用エレベーター予定地	AY09	3.0-3.5	約0.1	1	中世・近世の遺物、古代・中世の瓦田・麻績土調査	
25	1987	7	教養部身体障害者用エレベーター予定地	BD09	2.5	0.7	1	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器・麻績土調査	
29	1988	17	工学部校舎予定地	AX04-06, AW04	2.0-3.5	1-1.5	6	→津島岡大第6-7次調査：1988年度	
30	1988	19	動物実験飼育棟・遺伝子実験棟予定地	BD18-19	2.3	1.1-1.2	3	→津島岡大第8次調査：1991年度	11
31	1988	20	国際交流会館予定地	BC26	2.5	1.2	3	中・近世土器→1988年度工事立会	14
33	1989	2	教育学部身体障害者用エレベーター予定地	AZ-BA05	2.5	0.8	1	縄文後期・弥生早期の遺構目録、縄文後期～中世土器・麻績土調査、面積36.5㎡	
34	1989	3	大学院自然科学研究科合併処理槽予定地	AZ17	4.0	1.6-2.0	1	中世～明治の瓦田掘削→1989年度工事立会	
35	1989	4	学生合宿所予定地	BE02	2.0-3.2	-	1	弥生早期～前期～中期→1989年度工事立会	
(36)	1989	5	図書館予定地	AV-AW13	3.0	1.4-1.6	2	→津島岡大第12次調査：1993年度	18
40	1990	3	学生合宿所ポンプ槽予定地	BC32	2.5	1.1	1	弥生前期掘削、中世土器	
41	1990	6	福利厚生施設予定地	AW-AX11	3.9	1.4-1.6	2	→津島岡大第13次調査：1994年度	
46	1993	3	農学部汎用耕機実験実習施設予定地	BE-BF22-23	1.5	-	2	中～近世の耕器目録	
65	1994	3	農学部動物実験施設予定地	BE20	2.0	0.9	1	GL-14mで黒色土、縄文土器1点→盛り土保存	33
71	1995	4	国際交流会館予定地	BE36	41-24	1.6	2	中世～明治層掘削、13111遺跡、遺構・遺物なし(明治期ののみ)→工事立会	38
72	1995	5	環境理工学部校舎予定地	AW02-03	2.4	1.2	2	→津島岡大第17次調査：1996年度	
73	1995	6	ボタニング部ボタックス移設予定地	BF07	3.0	1.2	1	標高2.5mで黒色土、弥生・古墳時代の遺2条、古代遺1条	
90	1998	9	コファレーションセンター予定地	AZ09	2.7-3.4	1.3	2	→津島岡大第19次調査：1998年度	
(91)	1998	10	環境理工学部校舎予定地	AW02-03	4.5	1.2	2	→津島岡大第22次調査：1998年度	53
92	1998	13	工学部システム工学科棟予定地	AW04	2.8	1	1	GL-1.8m黒色土、縄文後期の遺構	
93	1998	14	遺跡保護区整備関連掘削	AU02-03-06, AV03	2.4-3.8	0.8-1.6	5	TP1-3-5：黒高塚、TP2-4：黒高塚、TP1：弥生溝、TP3：弥生溝・ベットの、TP4：中世溝	
(105)	1999	6	文法館 総合研究棟予定地	AZ15, BA14	2.7	3.5	0.8	1	
106	1999	7	風気研究室設置予定地	AV08	1.2	0.2	2	現表土以下に基礎となる切替層	56
114	2000	6	縄文・弥生時代における環境復元に伴う調査	AX00, AX00-02-03, AZ06, AW08	2.6-3.2	1.7-0.9	6	縄文・弥生時代の黒高塚、古代溝	61
115	2000	7	創立五十周年記念館予定地	BH14	2	0.8	1	→津島岡大第27次調査：2001年度	71
129	2002	5	事務局旧本部移転予定地	BD15	2.1	1	1	黒色土の露出	
185	2009	2	学業保育室予定地	AV14	3.24	1.95	1	黒色土確認	
186	2009	3	農学部構内植物工場予定地	BF20	3.4	2.3	2	古代溝・堀跡 弥生・中世～古代におさまる溝	
198	2010	3	国際交流会館予定地	AU13-14	3.4	1.6-1.9	3	→津島岡大第34次調査：2010年度	102
199	2010	4	生活アレーナ予定地	BC12	2.2	0.9	1	黒色土は未確認を記録	105

## &lt;鹿田地区：鹿田遺跡&gt;

総合番号	年度	番号	調査対象地名 概	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文獻
							TP数	内容・その他の対応	
44	1984	-	西橋北緑交水権予定地	BU30-31	1.4	0.5-0.7	2	中世土器・包含層確認→盛り土保存	2
45	1984	-	医療短期大学校舎予定地	CT-U25, CZ19-20-22	2.7	0.8-1.0	3	→鹿田第3次調査：1986年度	
6	1985	4	外来診療棟環境整備工事範囲	AJ33, AJ40, AJ-AK26	2.2-3.0	0.9-1.4	3	弥生時代～中世の遺物	5
(17)	1990	5	アイソトープ総合センター予定地	BY-BZ06B	2.3	1.2-1.3	1	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(20)	1997	8	基礎医学棟予定地	BT57	2.2	0.9	1	→鹿田第7次調査：1997年度	50
29	1998	11	南棟予定地	CF-CG43-44, CH25-26, CK25-26, CK15	2.0-2.4	1	4	→鹿田第9次調査：1998年度	53

総合番号	年度	番号	調査対象地名	値	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要		文獻
								TP数	内容・その他の対応	
82	2009	2	学生サークル棟予定地		CR70-71, CW70	2.1~2.3	0.9~0.7	2	学生時代別荘地掘削中継掘削作業、集落外縁	102
89	2010	4	岡山県地域医療総合支援センター予定地		AZ04-BA08	2.3~2.4	1.2~0.6	2	近世溝・赤土包含層確認→掘削第22次調査、2011年度	105

## ＜倉敷地区＞

総合番号	年度	番号	調査対象地名	値	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要		文獻
								TP数	内容・その他の対応	
1	1990	4	資源生物科学研究所道路確認		-	2.5	0.7	1	中世後半以降の土層	18
2	1998	12	バイオ実験棟予定地		-	1.5	0.2	1	近世下掘削内、遺構未確認	33

## ＜東山地区＞

総合番号	年度	番号	調査対象地名	値	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要		文獻
								TP数	内容・その他の対応	
3	2006	1	附属小学校校舎予定地		-	3.0	0.3-0.5	4	近世・古代 溝3条、中世7期層	98
4	2008	1	附属中学校校舎予定地		-	2.3~2.4	1	2	古代明層	95

## ＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合番号	年度	番号	調査対象地名	値	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要		文獻
								TP数	内容・その他の対応	
3	1992	5-6	東福呂宮様予定地		-	1.66~2.1	0.8	2	→福呂遺跡2次調査、1997年度	90
5	2004	1	三朝宿泊所増築予定地		-	1.3	0.5-0.9	2	遺構・遺物、包含層未確認	
6	2004	2	高辻蔵・電話設備予定地		-	1.0	0.85	1	河津溝、段石礎等確認	81

表12-〔3〕 立会調査

## ＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合番号	年度	番号	工事名称/項目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要		文獻
							TP数	内容・その他の対応	
11	1984	-	南館舎併合処理機関係配水管理施設	BI15-17	1.0~2.2	1	溝・土層、赤土土器・須恵器	2	
19	12		教養部校舎新営	BE08-09	2.3	1.3	中・古墳：赤・土器		
20	1986	21	ハンドボールコート新設	BG08	0.2~2.0	0.8	黒色土		6
21	26		教養部校舎新営に伴う電気配管	BF07-08	1.8	0.9	中世包含層		
32	1988	17	テニスコート敷設明掘調査	BG10-11	2.2	1.5	GL-約2mで黒色土、西に向かう溝を鑑定		11
37	1989	8	自然科学研究所棟新営：工事用道路	AZ08	1.4	-	赤土後期水田、瓦葺溝、75cm		
38	10		生物応用工学科棟新営に伴う電気移設	AV04-05	1.3~1.9	0.7~1.2	黒色土		14
42	16-19		岡山市造本町津島東蔵新築	AV03-10	0.4~3.0	0.6~1.4	5ヶ所、黒色土、奈良南北溝		
43	2000	34	学生合宿所給排水管設置	BD03-04	2.3	1.2	GL-2.3mで黒色土		18
46	9		防火用水継上	BC18	2	0.8	層層まで掘削、石礎		
47	17		津島地区基幹整備（電気）	BE16	1.7~1.8	0.5	2ヶ所、明治層～赤灰色粘土層		
48	1991	19	津島地区基幹整備（電気）	BD15	1.7	1	GL-1.5mで黒色土		21
49	40		南北道路外灯設置	BC-BE-BF12	1.5	-	3ヶ所、GL-1.4mで古代層		
52	15		遺伝子実験施設ハンドホール設置	BD18	1.5	0.75~1.1	障子土層前層まで、溝2本		
53	1992	34	附属図書館北館前駐車場整備	AV12	3	1.7	造成土以下は粘土層		25
57	17		保健管理センター新営	BE-BE10-12	1.8	0.6~0.7	黒褐色土はGL-1.15~1.7m		
58	19		焼却炉設置	BE11	1.1	0.8	赤土土器、工法変更		
59	23		津島地区基幹整備（共同利用施設水処理施設）	BA07	3.2	-	明治～中世層・層間赤土層、古代溝？溝文 後期土層		
60	1993	28	津島地区環境整備	BD-BE13	1.5	1	1ヶ所、中世層		30
61	33		津島地区環境整備	BE-BE12-13	1.8	0.5~1.2	10ヶ所、中世層まで、一部で黒褐色土層		
62	34		野球場バックネット・防球ネット改修	BE-BE12-13	1.6	1	中世層まで、一部で黒褐色土層		
63	39-41		野球場バックネット・防球ネット改修	BE05-07 BE08-01	2.0~3.2	1	GL-1.2~2.0m付近で黒色土、以下黄色砂・ 褐色粘土		
66	9		陸上競技場明灯設置	BE-BE-BF04-07	2	0.96	GL-1.92~2.0mで黒色土		
67	1994	13	総合情報処理センター新営電気工事	AV10, AW10, AV11	2.2	1.5	GL-1.7mで黒色土、近世溝		33
68	20		焼却炉設置	BE20	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土		
76	4		農・業字部動物実験棟新営	BE18	2.2	1.9	黒色土層付近まで		
77	5		ハンドホール設置	BD16-19	1.3	-	4ヶ所、造成土以下に2層		
78	1996	12	サッカイトーンベンチャービ ジネススクワットリ新営	AV02, AV03, AV04, AV99, AW02, AV04	1.0~1.5	0.76~1.1	6ヶ所、明治層～赤土層？		44
79	13		環境理工学部校舎新営	AV03-AW03	2	0.95	赤土時代層まで、古墳前期 遺構・遺物		
80	18		環境理工学部校舎新営予定地電気移設	AW03	2	-	黒色土まで		
81	25		附属図書館南本館・外構工事	AV13	1.3	1	造成土以下に青灰色・黄褐色・灰褐色粘土		
82	16		南北道路ガス管理施設	BE13-BE13	1.5	-	中世層まで		
83	1997	19	福呂厚生施設新営に伴う共同灌漑施設	AW11-BA13	1.5	-	中世層まで		50
84	24		福呂厚生施設新営に伴う共同灌漑施設	BC12	2	0.8	GL-1.65mで黒色土、古代～近世の溝		
94	15		外灯設置	BA09	1.47	1	GL-1.47mで黒色土		
95	1998	22	コッポレーションセンター共同電気設備設置	AZ09, BA09	1.4	1	GL-1.4mで黒色土		53
96	24		南館外灯設置	BE12, BC12	1.4	0.95	中世層まで		

総合 番号	年度	番号	工事名称/種目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要	支線		
	97	31	環境理工学部校舎新営に伴うガス管理設	AW00-AX-AY00 -66	12-14	0.65-0.96	中層まで(12×9)			
	98	34	学生会館改修に伴うトランプ撤去	BC10	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土、GL-2.2mまで灰色粘土			
	99	35	NTT電柱移設	BA00	1.5	0.9	造成土以下に褐色系腐質土			
	100	41	環境理工学部実験棟水管理設	AX03-AY07	1-24	0.6-1.4	10×9、5地点で中層、2地点で古墳、1地点で古墳時代層まで	53		
	101	42	馬場移設に伴う樹木移植	AX02	2.2	1.1-1.3	GL-2mで発生後期層、GL-2.2mで縄文系層			
	102	44	環境理工学部校舎新営	生活排水処理装置	AV00、AW00	1.97	1.4	古墳時代層まで、須恵器・土師器		
	103	48		ガス管理設	AW03	1.45	1	中層まで		
	105	8	外灯設置	AY00、AZ01-03	1.15-1.25	0.5-1.2	3×7所で黒色土(GL-0.8)-1m)			
	108	12	コラボレーション・センター新営・ハンドホール設置	AZ08-09	1.48-2.21	1.03-1.16	2×9所、その1×9所は古墳時代層まで			
	109	13	環境理工学部校舎新営に伴うスロープ設置	AW02	3.5	1.2	調査面跡跡跡、黒色土下面まで、近代土塊、古土塊、縄文後期ピット	56		
	110	42	コラボレーション・センター新営に伴う排水処理装置	AZ09	1.0-1.2	0.8-1.0	6×9所、1×9所で黒色土対応層まで			
	116	17	津島地区電柱設置	BA12	1.6	1	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土層			
	117	23		本館基礎補強	AY09	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・灰色粘質土		
	118	28		機械設備換気	AX10、AY10	0.85-1.60	0.8-1.6	南館ハンドホール・GL-1.6mまで・GL-1.52mで中層土(今回は南東→北西)	61	
	119	42	精密応用化学科棟部室ガス改修	AW08、AX08	1.6-2.05	1.45	GL-1.82mで明灰褐色粘土(中層?)			
	120	44	文法館 総合研究棟仮設電柱設置	BA16	1.5-1.7	1	GL-1.4mで中層土?車道側の築山?土壌→一部腐植			
	122	4	理学部校舎改修・電気設備	ハンドホール	AZ10	1.6	1.0-1.2	中層まで		
	123	11	本館棟新営	電柱	BB-BC16	1.5-2.1	1.2-1.4	2×9所、GL-1.4mで灰色粘土、GL-2.1mまで砂か?	66	
	124	27		車庫移設	BB-BC13	0.5-1.6	1	2×9所、中層まで		
	125	30		樹木移植	BB14	1.6	0.65-0.8	GL-1.4mに灰色粘質土層(古代)		
	126	31	旧実業部基礎修繕		BB14	1.05	0.45-0.75	12×9掘削、中層まで		
	130	29	農学部校舎改修・電気設備		BB15	1.8	1.5	3×9所、古代・古墳層まで		
	131	34		排水網・管溝	BC13-15	1.2-2.5	0.7-1.2	突発土層・古砂多量、近世溝、張生溝		
	132	51	本館棟新設	雨水排水網・管溝	BB13	1.57	0.8	中層・古代・古墳層		
	133	54		外灯	BB13-BD14	0.95-1.9	0.8	2×9所で中層土と古代層まで、GL-1.3mで黒色土	71	
	134	55	一般教育棟自機外灯設置工事		BC07-09	1.0-1.26	0.95	4×9所、中層まで		
	135	57	創立五十周年記念館新営	汚水排水	BB-BC14-15	1.0-2.3	0.85-1.0	一部黒色土上面まで		
	136	1	創立五十周年記念館新営	雨水排水網・管理設	BB13-15	1.3	0.7-0.8	中層まで		
	137	4	総合研究棟新営機械設備ガス配管管理設		AX06	1.4	0.9	古代層まで		
	138	6	旧事務庁舎改修電気設備工事		BC15	2.43	0.85	GL-1.9mで黒色土、GL-2.1mで縄文系層		
	139	7	農学部総合研究棟改修電気設備工事		BB、BC18	1.7	0.7	GL-1.2m前後で黒色土層、GL-1.5-1.6m前後で縄文後期系層		
	140	8	総合研究棟新営その他工事	雨水排水	AX06-BA06	1.7	0.7-0.8	標高3.3-3.4mで黒色土、発生-古代・東西溝多量、近世-近代・東西溝-相野		
	141	14		電気設備工事(外灯)	AW、AX06、07	1.4	-	中層まで		
	142	15	総合研究棟新営その他工事	排水	AW-AX06-07	0.5-2.5	1.6	AW→一部縄文系層まで掘削、張生溝		
	143	17	旧事務庁舎改修・外部給水・消火設備		BC-BD15	2.75	1.1	併で、縄文系層		
	144	21-1		No.1区農学部合併処理槽	BG-BH13	1.8	0.9	縄文系層まで	74	
	145	21-2		No.2区体育館前東～武道場西	BE-BG10	1.95-2.25	0.8-0.9	併で縄文系層、管溝で発生早-前期まで、張生溝、縄文土塊		
	146	21-4		No.4区英文・法・経2号館西	AZ16	2.45	1.5	縄文系層まで、張生溝		
	147	21-5	公共下水本網接続工事	No.5区農学部	BA10	1.9	0.7	中層の厚土層を確認		
	148	21-6		No.6区農学部4号館東	BC22	1.5-1.9	0.9-1.4	縄文系層まで、発生-古墳初期：ピット、近代層状遺構		
	149	21-7		No.7区津島宿所西	BB16	1.15-1.3	0.8	中層まで		
	150	21-8		No.8区津島宿所西	BB15	2.0-2.45	1.1	中層まで		
	151	6	公共下水本網接続工事	留生等防犯施設	BB-BD36	1.22-1.68	1.0	縄文系層まで		
	152	6	津島キャンパス環境整備	留生センター西	BB9-10	0.3-1.15	0.4-0.6	発生後期/気合層・遺構、礎層	81	
	153	3	総合研究棟改修	仮設電柱	AV08	1.5	0.9	青灰-白灰色の粘質土、黒色土は確認されず		
	154	5		アース板	AW09	1.8	-	縄文系層まで、黒色土		
	155	9	キャンパス環境整備(旧館改修等)		BB02、BG07	1.0-1.3	0.7	-1mで中層層、近世層	83	
	156	13	ブルーム改修(排水管改修)工事		BC-BB10、BB-BC02	0.75-2.4	0.8-1.3	縄文系層まで、黒色土、発生-古墳：溝多量、近世土塊、近代：大規模・溝	85	
	157	14	サッカー場地球ネット設置工事		BB-BC04	2.0-2.2	-	ローラーによる掘削、一部で古墳		
	158	2	総合研究棟改修工事：耐震工事に伴う支障物撤去・PC耐震性基礎掘削		AX10	1.4-1.6	1.0	中層まで、近世：南北方向の溝		
	159	3	教育学部公共下水本網接続工事		AZ-BA02-04	1.3-2.3	0.7-1.0	掘：深さ2.3m、配管：深さ1.05-1.92m、黒色土層系層まで、東西方向の溝	88	
	160	5	ブルーム改修配管掘削工事		BA-BB02、BC02	1.7	0.7-0.8	黒色土層or系層まで、古墳時代頃の溝状遺構		
	161	11	総合研究棟：耐震工事に伴うPC耐震性基礎掘削		AX08-09	1.8	-	古墳-発生時代層		
	162	2006	13	農学部2館由電柱移設		BF16	2.0	-	中層まで	88

総合 番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要	支線		
164	2007	4	公共下水道接続工事 (浄化部)	BA12	2.0	0.8~0.9	GL-1.6mで黒色土、赤牛時代溝	92		
		8	総合研究棟改修	外灯基礎及び管路 外務機・配管 (東半部)	AV-A307-08	1.4~1.7	1.2		流石一巾巻	
		10		AW07-08	1.1~1.4	0.9	高巻層、土坑基礎			
		13		BA-BC20	1.2~1.4	0.6~0.8	流石時代一巾巻、中世一巾代の溝			
		17		A209	4	-	黒色土上、GL-4m以下で巻層			
		169	21	理学部ヘラウム演習実習棟 改修工事 基礎杭設置	A209	4	-		黒色土上、GL-4m以下で巻層	
		170	21		AW07-08	2	-		2地点掘削、空地地で黒色土無し	
		171	22	総合研究棟 (教育系) 改 修	電気工事 柱柱 電気工事 柱地盤埋設	A303-BA03 AY04	1.2 1.7~1.78		- 古代層?1.1mで河返の砂層	
		172	26		機械工事 都市ガス	A203	1.2		-	GL-0.95mで黒色土
		173	28	KRIII無線基地局新設工事 柱柱	BB12	1.8	0.8~1.05		灰褐色砂質土層まで、黒色土未確認	
174	2008	32	プールの水水道メーターボックス取設工事	BB04	0.9~1.5	-	中世層(?)まで	95		
		33	南倉倉庫改修工事	BJ17	2	-	GL-1.2~1.5mで黒色土			
		176	30	大学生協東側利施設新築	ガス管 外灯移設	AX04 AX05	0.85~1.23 1.1~1.2		0.68~0.95	中世層まで 2地点掘削、古代層まで
		177	40	新技術センター公共下水道接続工事	AW00-01	0.85~1.75	0.7		中世~近代溝4条 (南北北東向き)、黒色土上 面まで	
		178	42		動物室	AY01	0.85		0.85	黒色土上面で赤牛~古墳時代の水田相野
		180	44	教育学部体育館修繕工事	仮電柱設置 接地地埋設	AY03, BA03 AY02	1.2~1.7 0.3~1.7		-	2地点掘削、北:中世層まで、南:東海溝 まで
		181	49			AY02	0.3~1.7		-	古代層まで
		182	52	大学生協館体改修工事:一般教育講義棟ガス設備	BB10-11	0.7~1.2	0.55		GL-1.0m以下で輝層、土坑1基、溝?1条	
		183	53	工学部原外ガス配管改修工事	AV04-06, AW04	0.8~1.48	0.8~1.1		一部で中世層まで	
		187	6	総合教育棟 (共通教育) 改修工事:高土テーブル	BE-BF04-08	1.3	-		2箇所、中世層、古墳層まで	
188	2009	14	環境整備 (施設設備室内) 改修工事	BB10	0.8~0.95	0.6	保健管理センター北東で赤牛?透視層土	102		
		16		ガス管	AU06	0.8~0.9	-		一部赤牛?急勾層	
		17	工学部2号館 (動物実験 室) 改修	排水管	AU06-07	0.65~0.69	1.25		北東部で河返	
		21①			BB12	2.2	-		中世一巾巻層まで、直前で黒色土	
		22			BA12	2.0	-		縄文層まで、北:黒色土確認	
		23			BA13	2.05	0.58~1.25		縄文層まで、黒色土確認	
		24			BD12	1.95	-		縄文層まで	
		25			AY-A202-03	0.8	-		赤牛層確認	
		27			電気設備:アース埋設 電気設備:配管 電気設備:外灯	1.65 AY01-AZ03 0.8~1.3	0.4		縄文層まで、黒色土・中世以前の遺構 黒色土まで	
		29			屋外排水	AY02-03	1.15		1	黒色土・赤牛遺構
191	2009	30	総合研究棟B期 (教育系) 改修	屋外排水:管路 屋外排水:井 電気設備:アース埋設 電気設備:配管 電気設備:外灯	管路 AZ00-02 A200-AY-AZ01	0.8~0.9 1.2~1.7 1.7 0.8~0.9 1.3	0.7 0.6	急勾層・相野・小溝 縄文層まで、北:黒色土、南:黒色土無し 縄文層まで、黒色土 急勾層・土層部小片 既設土内		
		42	支法線ボイラー用機交換工事	電気設備:配管	AX16	2.5	1.5	縄文層まで、赤牛~後期溝1条		
		48	総合研究棟 (薬学系) 改 修	電気設備:配管 電気設備:アース板	BB16-BC17	1.45 1.50~1.54	1.05	近世層、近代溝 急勾層 (中世?)		
		54	環境理工学部公共下水道接続工事	AU03	2.3	0.9	赤牛~古墳層まで、近代東西相野1条 黒色土上面まで			
		55	薬学部西水道管位置修正工事	BC18	2.7	0.55	-	岡山県教育委員会対応? 縄文層まで、黒 色土		
		200	8	外灯整備工事	教育学部 創立五十周年記念館	A206 BB14-15	1.1	0.7	黒色土	
		202	17			BB14-15	1.1~1.6	1.15	近世層、近代石組用水路	
		203	23	総合研究棟 (薬学系)に 伴う支障管修設	生活排水・実験排水	BB-BC17	0.87~1.4	0.8	古代層	
		203	26	テニスコート施設復旧工事	BC11	1.9	-	既設内、陥層部<岡山西寄回収>		
		204	2010	34	薬学部本館改修工事	電気設備:管路 電気設備:ハンドホール 外灯設置:管路 外灯設置:基礎	BC-BD18 BB17	0.7~1.28 2 0.63~0.74 1.08~1.34	1.1 0.85	中世層 縄文時代層、近代一巾代:聖地蔵 近世-近代層 中世層
35					BF15	1.1	-	既設内		
205	36			農学部水道管復旧工事 (緊急対応)	排水復旧工事	AU-AV13-14	2.2~2.5	-	4箇所、中世上面から0.55m掘削、赤牛後期 層	
207	37			国際交流会館						

<栗田地区: 栗田遺跡>

総合 番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要	支線
1985	1985	3	1983- 外米診療棟系配管設置	AO-AW22	1.3	-	赤牛後期:土器/分銅形土製品、貝類類	1
		6	外米診療棟関係屋外排水管理設	AW-BH23, BH-0224	1.3~1.7	0.7~1.3	中世-赤牛:遺構・遺物	5
		12	基幹環境整備緑化工事:電気配線ハンドホール掘削	AG11, AG24, AF23	1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ所、中世包含層・土器	
		9	記念館東側内水改修工事	BE-BN4	0.8~1.3	0.8	中世包含層、土器	6
		11	2004 講堂及び附属工事	CL-CR12, CR- CX13, CX-DA14	2	0.8~1.0	中世包含層	
		14	1987 管理棟新築に伴う基礎杭埋設	BC37	2.5	-	赤牛時代?急勾層・遺構	



総合番号	年度	番号	工事名称/種目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上厚 (m)	概要	支線	
15	1989	46	旧管理棟基礎地盤整備：外灯基礎	CE20-37-44, CJ-CR45, CL28-29	1.2-1.5	0.7-1.0	2ヶ所、中世層	14	
18	20	2	アイソトープセンター1期給排水-集水管	BT71	1.4-1.5	0.9	中世遺構1基	25	
19	1992	41	アイソトープセンター協賛棟建設	CI73	1.2	1	古代土層1点	25	
20	1994	5	溝埋め改修工事	DF60-62	1.5	0.8	中世層以下は遺構層土中、溝3条・ピット9基	33	
21	1995	11	附属病院連絡通路新設	BG-BI18	1.5	1	造成土以下に茶褐色土・黄灰色粘質土層、遺物なし	38	
22		14	復旧地区基幹整備	遺構タンク設置	CD07-08	2.3	1		中世2層、溝3条、溝内から中世・古代土層
23		17	遺構タンクU字溝埋設	CD08-CC11	1.23	0.85	遺構中、中世土層、掘削で区間全長の1/2程度埋設		
24		23	防球ネット取設工事	DF56-67	3	0.8	径60cmを12ヶ所、内4ヶ所で土層片・石部、調査区西寄り・GL-2m以下は旧河道か		
30	1998	36	校舎改修に伴う仮設電柱工事	BV73, CN78	1.2	1	中世層まで	53	
33	15	18	研究棟新設	給排水-管路	BV65-71	1.2-1.4	0.9	中世層まで	61
34	18	34	排水槽	BU66	2.2	1.1	面積8.2㎡、遺構遺。中世・溝・ピット		
35	27	27	基幹整備（電気設備）：地中配管	BV42-43, BU43-44	1.25-1.45	0.45-0.5	2ヶ所、中世層まで、時期不明遺構		
36	1999	41	病棟新設	共同溝解体	CF21-28, CF-CL28, CD-CF28-33	1.7	-	面積16㎡、掘削11次調査範囲で中世ピット	
37	46	46	汚水管-管路	CN46-DE69	2.3	1.2	古墳時代：厚1基・土坑1基、中世遺構等		
38	47	47	グラウンド防球ネットゴール	CM-CN-CP-CR-CT58, CV-DA-DC-DD-DF59	2.0-2.3	-	11ヶ所、青銅・土層・河泥、7-10ヶ所：掘高地、粘土層・河泥		
39	48	48	病棟新設	汚水排水槽	BT51	2	1	古墳時代層まで	
41	25	25	病棟新設	排水-雨水槽	CD41-CN45	1.8-1.8	-	溝か？	
42	2000	36	電柱及び外灯の埋設工事	CN15-21-27, CO01-42, CN45, DV45	1.6	-	7ヶ所、灰白色土層・赤褐色砂質土層・層間色砂質土層、掘高地部か		
43	29	29	医学部ガス配管切り離し用バルブ取付工事	DE27	0.8-1.15	0.7	GL-0.85mで黄灰色粘質土		
44	47	47	復旧地区南側用水路境管理棟改修	DG-ID28-67	2.1-2.3	1.3-1.3	幅120mの埋戻し調査、古代の遺構-河泥		
45	2001	37	総合教育研究棟新設に伴う機械設置工事	BR-CA43, CA43-55, CA44-45, BR-CA55	1.65	0.7-0.9	中世層まで、中世土層多数出土地点あり	66	
47	10	10	復旧地区ガス配管埋設工事	CHI1-CN22	1.0-1.3	0.87	中世層まで	71	
48	19	19	復旧地区ガス配管埋設工事	BT-BU11	0.5-1.8	-	2ヶ所、GL-1.22mで中世or古代層		
49	22	22	共同溝排水管	QH1-42	1.5	-	1ヶ所、包含層まで		
50	25	25	エネルギーセンター棟新設	外灯	CG41, CO34, CF43, CO38	1.47-1.66	-		4ヶ所、中世層まで
51	27	27	外溝	CV36-45	0.9-1.9	0.9	中世：井戸・柱穴・溝		
52	36	36	総合教育研究棟新設その他工事	BI-BS45-53	1.85-2.0	0.8-1.0	5ヶ所、中世層まで		
53	52	52	本部棟新設その他工事：植栽移植	DO67	1.25	-	中世層		
54	56	56	旧医舎合棟アリーナストラップ改修	BG18	1.68	-	底面で弥生～古墳層、土層		
55	5	5	屋外排水	BS-BZ45, CA-CO46, CO45	1.7	0.7-1.0	弥生中期?包含層まで、古墳土層、中世ピット多数、軟地部確認		
56	2003	9	総合教育研究棟	外構工事（雨水-汚水-実験排水）	BL-BS45-53	0.8-1.75	0.7-0.9		一部弥生中期包含層まで、古墳時代遺、中世層が、遺土上等等
57	10	10	給水管管理施設	BR-BS50-54	1.33	0.8	一部で中世層まで		
58	13	13	外構工事（外灯）	BRS5, BL54	1.4	0.8	中世層まで		
60	3	3	医病棟内支障ガス配管改修工事	AF16, AF-AJ17, AJ9-16	1.0-1.9	0.7-0.8	掘地部：弥生-古代水田層、中世雑碎、弥生-古墳河泥（砂層）		
61	5	5	医病棟内支障給水管配管改修工事	AE4-16, AF-AI16, AI9-15, AJ-AO9	0.9-1.9	0.85	弥生-中世?近代雑碎、弥生-古墳河泥（砂層）	81	
62	2005	3	医学部変電所ピット周辺高圧ケーブル設置工事	DH-DJ18, DJ19	1.1-2.5	0.7-1.1	一部で弥生-近代層	83	
62	2006	6	エネルギーセンター棟新設に伴う工事	CT-CU45	2.5	0.9	掘削幅122調査地点と重複	88	
67	4	4	基幹整備（道路等）工事	CG13-30, CH13-20	1.2-2.2	0.9-1.2	基幹層まで、中世：東西-南北溝	92	
68	5	5	中世棟屋上防水改修その他工事	AS03-07, AV-AX07, AY-BR09	0.6-0.9	1.4, 1.8	0.7		中世東西溝、古墳時代南北溝
69	7	7	中央診療棟新設：ガス管切断工事	BT11	1.28	0.5	中世遺		
70	10	10	基幹整備（電気設備）工事	CO42, CV36	1.3-1.65	1.3	中世層まで、遺構		
71	2007	11	環境整備（道路等）工事	ガス配管1	CG08, CF09-10, CG-CH1, CH11	0.85-1.3	0.9		中世：井戸（貯水）・ピット・溝
72	17	17	環境整備（道路等）工事	ガス配管2	CL12, CM13, CN14-15	1.0-1.2	0.4		中世層、中世遺構
73	22	22	総合研究棟（医学系）新設その他工事	BT-BUS5	1.25	1	中世層		
74	28	28	雨水路改修工事	CJ7-CP12	1.7-2.9	0.6-0.8	包含層及び柱穴範囲に掘高地		
75	30	30	エネルギー治療室改修工事	BE33	1.4	0.6-0.7	中世～近代：雑碎・溝、弥生後期土層		
76	3	3	基幹整備（電気設備）工事	ライトコート工事	BT24-25	0.98-1.4	0.7		弥生基層層まで
77	6	6	ライトコート工事	BQ24, BR24	0.75	0.5	深地性汚濁層		
79	2008	7	基礎医学棟一部とりこわしに伴う支障ガス配管移設工事	AO53-54, AL54-AO64, AL54-61, AL62-AP65	0.76-1.0	0.5	近世層まで、土坑2基	95	
83	2009	3	掘削跡線20A調査発掘打ち	CI02, CI40	0.8-0.9	0.7	中世層まで	102	

総合番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文獻
90		6	高規格放射線治療棟屋外排水管工事	BRC2-30, B1-16.35	0.75-0.9	0.6	中～近位の遺構?	
91	2010	7	中央診療棟新設工：アース盤設置工事	BRC14-16-19-22	0.9-1.8	1.1	包含層	105
92		17	外付整備工事：研究棟南駐車場	BY46-50	1.2	1.2	遺構埋土?	
93		22	仮倉庫改修工事	CV-CV28-29	1.6	1.15	仮倉庫埋土まで	

## &lt;東山地区&gt;

総合番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文獻
1	1983	1	附属中学校新設	-	4.0-5.0	-	シルト層中	1
2	1997	29	附属小・中学校校舎改修工事	-	1.2	0.79	GL-1.1mで近接水田層。溝1条	50

## &lt;三朝地区：福島遺跡&gt;

総合番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文獻
4	1997	18	実験研究棟新設に伴う電気屋設置工事	-	1	-	GL-1.0mで中世包含層は東に向かい土層	50

表13 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2012年3月現在）

種別	遺跡名 (地区名)	調査名・地区名	種 数（1箱：約30リットル）							特殊遺物ほか	文獻
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	ヤブタ*		
展覧	真田	第1次調査：外装診療棟	5465	803	6	20	0.5	1	16	丹波り土器群、白磁・瓦器、木製短甲、入面織物土器、ガラス片、炭骨、等	7
		第2次調査：NMR/CT室	1064	96	0.4	4.5	0.5	1	4	赤色土器、用舟、木簡、漆器土器、和用磁、凹面磁等	
		第3次調査：医師検査	586	36	0.3	18	0.3	4	4	石帯	10
		第4次調査：医師配管	4	2	0.3	0.5	0.2	1	1	古代土器、甕形製品	
		第5次調査：管理棟	1012	88	2.5	6	1.5	0.2	3	木器、炭化種子、手鏡骨、焼き印付き井戸枠	24
		第6次調査：図総合センター	62	39	0.5	1	1.5			青銅製物	40
		第7次調査：基礎医学棟	775	73	1	1.3	0.2	1	1	磁器製品	85
		第8次調査：図治癒棟	10	10						鎌形物類、瓦器類、漆器類	56
		第9次調査：内科	1301	96	0.1	13		9	2	本瓦3点	56
		第10次調査：古河講	2	2						古代土器、杭	56
		第11次調査：内科	71	66	4			2	2	本瓦1点	56
		第12次調査：エネルギーセンター	147	77	1	54		15		定置漁撈り機、籠、黒漆器跡	61
		第13次調査：総合教育研究棟	369	229	24	10		6		漆物	98
		第14次調査：内科	662	55	1	2	0.2	1	7	木簡、瓦器類	78
		第15次調査：総合教育研究棟	4	3						1	91
		第16次調査：立体駐車場	1	1						-	81
		第17次調査：総合研究棟	1112	68	4	8	0.2	1	30	-	87
		第18次調査：中央診療棟（本体）	1505	116	19	18	0.5	2	-	-	92
		第18次調査：中央診療棟（その他）	4	2						-	92
		第19次調査：南学部講義室	225	145	1	4			75	磁器、漆器類、貝	102
		第20次調査（A・B地点）：中央診療棟	296	148	66	62		6	12	-	102
第20次調査（C・D地点）：中央診療棟	861	55	16	7	1	0.1	7	-	105		
第21次調査：環境整備	101	4	1	3	0.1	0.1	2	漆物形木製品	105		
第22次調査：地域医療支援センター	175	146	3	25		1	-	-	本記要		
第1次調査：NP-1	5	0.5	0.5	4				-	3		
第2次調査：農学部合併処理槽	155	12	1.5	4			2	発着文土器、弥生前期土器	4		
第3次調査：男子学生寮	59	48	15	2	4.5		3	縄文後期土器、弥生文土器、石器類、板状土器片、棒状石器、壺形器、種子	19		
第4次調査：屋内運動場	1	1						-	27		
第5次調査：大学院自然科学研究科棟	85	71	3	1	8		2	縄文後期：土器、耳杯、輪、壺形器、種子	6		
第6次調査：生物応用工学科棟	53	36	1	9	6		1	古代土器、人形木彫、銅小物、弥生前期人形土器製品、壺形器	35		
第7次調査：情報工学科棟	135	10	0.5	1			2	-			
第8次調査：遺伝子実験施設	115	11	0.5					-	32		
第9次調査：生体機能応用工学科	425	35	2.5	3	2			壺形器、種子、縄文後期土器	47		
第10次調査：保健管理センター	86	78	1	7				分銅形土器製品、鋸切関連、磨石	64		
第11次調査：総合情報処理センター	4.5	3	0.5	1			1	-	36		
第12次調査：図書館	602	38	1	20	0.2			弥生木製農具具、銅	64		
第13次調査：福利厚生施設北	125	12	0.5	1				-	41		
第14次調査：福利厚生施設南	122	11	0.2				1	-	46		
第15次調査：サテライトベンチャービジネスラボ（トリ）	38	15	2	30			1	縄文後期耳杯、銅小物、壺形器	41		
第16次調査：動物実験棟	23	0.3					2	-	72		
第17次調査：環境理工学部校舎	71	63	11					縄文後期土器	77		
第18次調査：南福利ボンプ棟	0.2	0.2						-	53		
第19次調査：コラボレーションセンター	38	21	1	4		1	1	砂帯、障子口	65		

種類	遺跡名 (地区名)	調査名・地区名	数 (1期1約30リットル)							特徴遺物ほか	文献		
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	その他*				
発掘	津島岡大	第23次調査：環境理工学部ボラ館	0.2	0.2							-	53	
		第22次調査：工学部エレベーター	7	5	2						縄文中期土器・横長石	65	
		第22次調査：環境理工学部校舎	339	26	4	3	0.2	0.2	0.5		古代瓦部材	77	
		第22次調査：総合研究棟	81	29	0.5	60	0.5				縄文後期土器、石棒	80	
		第24次調査：総合研究棟2階地下	2.1	1	0.1	1						80	
		第25次調査：農学部放牧施設	0.3	0.1		0.2						61	
		第26次調査：事務局本部棟	25	17	2	5			1			76	
		第27次調査：創立五十周年記念館	182	14	1			0.2	2		縄文後期土器(中津)	68	
		第28次調査：自然科学系総合研究棟	15.2	13	2			0.2				87	
		第29次調査：農学部共同棟	1.1	1	0.3							71	
		第30次調査：インキュベータ	23.3	5	0.1	18			0.2			93	
		第31次調査：大学生協東エリア店舗	5.7	5	0.5			0.2				95	
		第32次調査：教育学部創造館	17	12	3				2		編み物	100	
		第33次調査：養学部講義棟	126	11	1.5			0.1				105	
	第34次調査：国際交流会館	1	1								105		
	福島	第1次調査：実験研究棟	7	6	1						縄文早期土器	55	
		第2次調査：実験研究棟スロップ	31	3				0.1				55	
	試掘 確認	栗田	鹿田駐車場(1985)	1	1							-	5
			栗田アソビテラス総合センター(1990)	1	1							-	18
			地域医療総合支援センター(2010)	1	1							-	105
男子学生寮(1985)			1	0.7	0.3						-	5	
津島岡大		大学院自然科学研究科棟(1986)	1	1							-	6	
		理学部身障者用エレベーター(1987)	0.3	0.3							-	8	
		教養部身障者用エレベーター(1987)	0.7	0.7							-	8	
		工学部校舎(1988)	1	1							-	11	
		動物実験飼育棟・遺伝子実験棟(1988)	0.7	0.7							-	11	
		国際交流会館(1988)	0.3	0.3							-	11	
		大学院自然科学科併置処理槽(1989)	0.2	0.2							-	14	
		学生合宿所(1989)	0.4	0.2					0.2		-	14	
		教育学部身障者用エレベーター(1989)	0.3	0.3							-	14	
		図書館(1989)	1	1							-	14	
		学生合宿所ガソリン機(1990)	0.4	0.4							-	18	
		福利厚生施設(1990)	0.5	0.5							-	18	
		農・畜学部動物実験施設(1993)	0.1	0.1							-	33	
		環境理工学部校舎(1995)	0.1	0.1							-	53	
		システム工学科棟(1998)	0.1	0.1							-	53	
		〔土器〕	外国人宿舍(1987)	1	1							-	8
〔貨幣〕	資源生物学研究館(1990)	0.1	0.1							-	18		
〔東山〕	初級小学校校舎(2006)	1.1	0.1						1		87		
立 倉	1983年度	2	2							分銅形土製品	1		
	1984年度	1	1							-	1		
	1985年度	1	1							-	3		
	1986年度	0.5	0.5							-	6		
	1987年度	0.5	0.5							-	8		
	1991年度・1992年度	0.3	0.3							-	21.25		
	1993年度～1999年度	0.8	0.8							-	30.33.38 44.50.53 56		
	2000年度	3	3							-	61		
	2002年度	8.5	2.5	6						弥生早期土器、中世、礎石	71		
	2003年度	2	2							-	74		
	2004年度	1	1							-	81		
	2005年度	1.1	0.1					1		-	83		
	2006年度	1.1	0.1					1		-	87		
	2007年度	0.5	0.5							-	92		
	2008年度	1	1							-	95		
	2009年度	0.2	0.2							-	102		
	2010年度	4.2	0.2					4		近現代、御軍用産金属類、電線	105		
2011年度	0								-	本記要			
分布調査	1989年度 三倒一本島 倉 計	0.3	0.3							-	14		
			361.23	2715.1	201.4	419.5	28	29.4	218.9				

表14 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ(農学部構内BH13区他)	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3	1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報4	1986年度	1987年10月

表15 埋蔵文化財調査研究センター刊行物(2011年3月まで)

番号	名	称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊(鹿田遺跡第1次・2次調査)	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5	1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第1号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊(鹿田遺跡第3次・4次調査)	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6	1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7	1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8	1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊(津島岡大遺跡第3次調査)	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9	1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊(鹿田遺跡第5次調査)	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10	1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡4	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊(津島岡大遺跡第5次調査)	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報11	1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊(津島岡大遺跡第8次調査)	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12	1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊(津島岡大遺跡第6次・7次調査)	1995年12月
36	津島岡大遺跡7	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊(津島岡大遺跡第11次調査)	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13	1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡4	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊(鹿田遺跡第6次調査)	1997年3月
41	津島岡大遺跡8	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊(津島岡大遺跡第13次調査)	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14	1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第13冊(津島岡大遺跡第14次調査)	1997年12月
47	津島岡大遺跡10	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊(津島岡大遺跡第9次調査)	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報15	1997年度	1999年1月

番号	名 称	発行年月日
51	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報 16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡1 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊 (福呂遺跡第1次・2次調査)	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報 17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学理蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報 18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 (津島岡大遺跡第10次・12次調査)	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 (津島岡大遺跡第19次・21次調査)	2003年3月
66	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年3月
67	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊 (津島岡大遺跡第27次調査)	2003年5月
69	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊 (津島岡大遺跡第15次調査)	2004年3月
73	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊 (津島岡大遺跡第26次調査)	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊 (津島岡大遺跡第17次・22次調査)	2005年3月
78	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 (津島岡大遺跡第23次・24次調査)	2006年3月
81	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年3月
82	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第36号	2006年10月
83	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2005	2007年3月
84	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第37号	2007年3月
85	鹿田遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊 (鹿田遺跡第7次・8次調査)	2007年3月
86	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第38号	2007年10月
87	津島岡大遺跡18 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊 (津島岡大遺跡第28次調査)	2008年3月
88	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2006	2008年3月
89	岡山大学理蔵文化財調査研究センターの20年 - 自然と人間、地中に埋もれた命の対話 -	2008年3月
90	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第39号	2008年3月
91	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第40号	2008年9月
92	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2007	2008年12月
93	津島岡大遺跡19 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊 (津島岡大遺跡第30次調査)	2009年3月
94	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第41号	2009年3月
95	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2008	2010年2月
96	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第42号	2010年2月
97	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第43号	2010年3月
98	鹿田遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊 (鹿田遺跡第13次・15次調査)	2010年8月
99	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第44号	2010年12月
100	津島岡大遺跡20 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第27冊 (津島岡大遺跡第32次調査)	2011年3月
101	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第45号	2011年3月
102	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2009	2011年3月
103	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第46号	2012年11月
104	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第47号	2012年3月
105	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2010	2012年3月

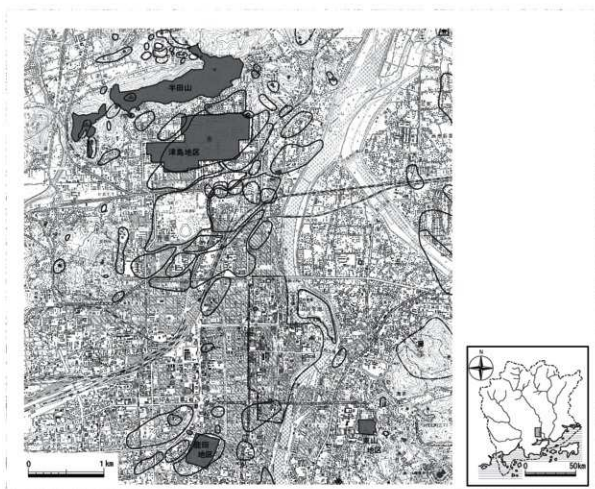


図56 岡山大学の位置と周辺の遺跡分布 (縮尺1/50,000・縮尺1/3,750,000)

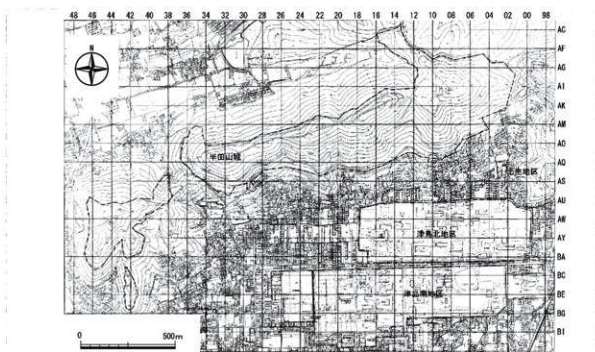
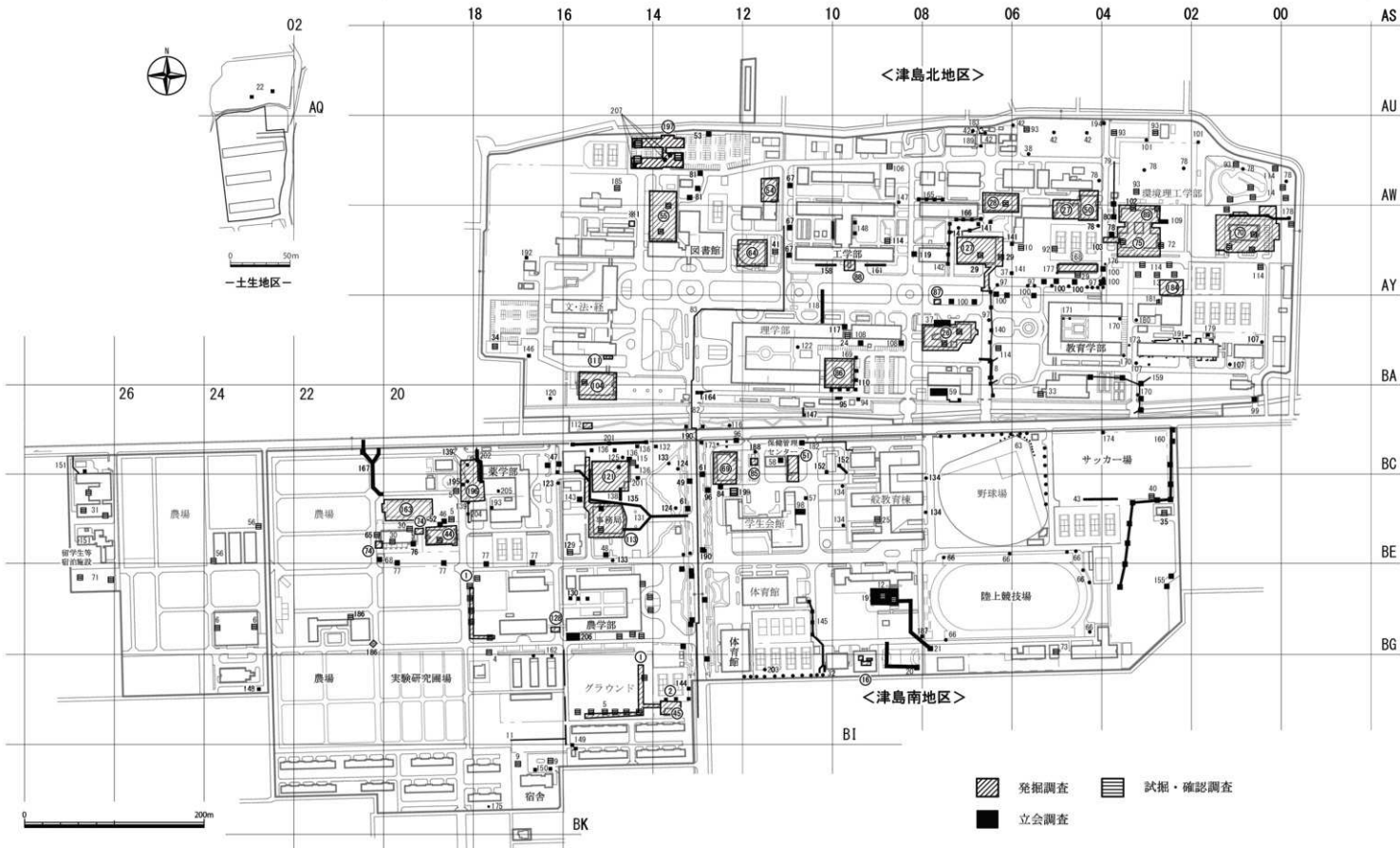


図57 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)

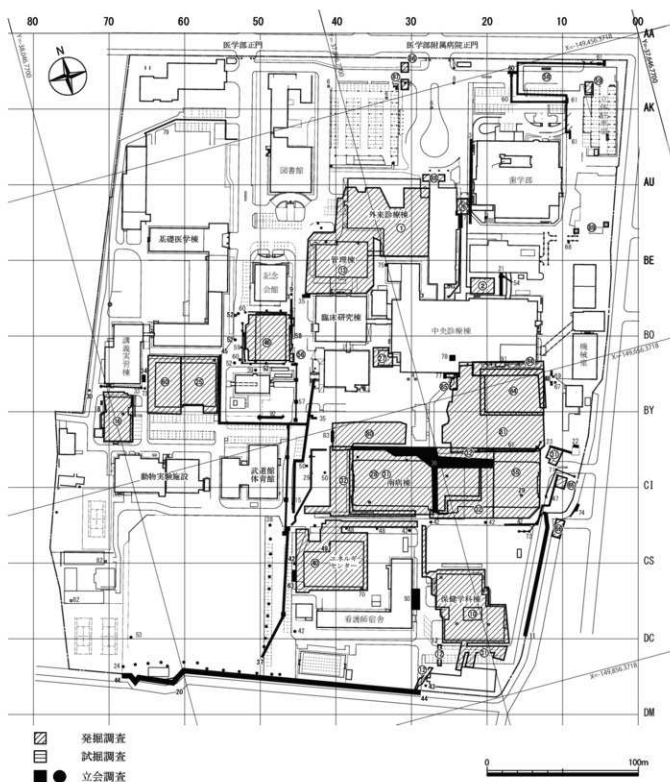




※番号は表12の総合番号に対応する。

図58 2010年度以前の調査地点【1】-津島地区- (縮尺 津島地区：1/4,000・土生地区：1/3,000)





※番号は表12の総合番号に対応する。

図59 2010年度以前の調査地点【2】—鹿田地区— (縮尺1/2,500)



Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

---

---

2013年2月28日 印刷

2013年2月28日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要  
2011

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
岡山市北区津島中三丁目1番1号  
(086) 251-7290

印刷 友野印刷株式会社

---

---

